ちれはあな

一より六まで　甲

しやもじ



第一枚

明治四十三年一月一日發行

雅俗文庫

例言

△本誌は、萬國に於て、畫壇の精華と評されつゝある、日本浮世繪の研究と鼓吹を目的として、毎月一回發行するにあり

△されど俗耳に容り易きを主として、高尙の論說等は、當分これを避け、低きを先とす

△又浮世繪に關係なき事項を記すこともあり、これ浮世繪の趣味を解し得ざる人にも本誌を讀ましめ其間漸次に牽引して同化せしめんとする一種の手段たり

△浮世繪師個人に就ての專門的研究の結果は、其記事を本誌に登載せず、浮世繪鑑、浮世繪師全傳等の別著として發行す

△以上の主旨に反せざる研究家の投書は歡んで迎ふ

編輯發行者

▲此花第一枝總目錄

今上陛下の御筆

いにしへの
文みるたひに
おもふかな
おのか治る
國はいかにと

難有き御軫念なる哉、吾人は此聖慮に感泣すると共に、陛下が常に古書を叡覽遊ばさるゝ事あるに鑑みて、吾人も亦常に其心得なかる可らずとするなり、これ此初刊卷首に掲出し奉る所以たり

歷代帝王の御筆は、墨寶帖等に載する所多しと雖も、公刊物上に於ける今上陛下の御筆は去月『日本及日本人』紙上に、永平寺の勅額「承陽」の二字ありしを拜觀せるのみ、勅額は黃檗山其他にあり

此花　第一枚

明治四十三年一月一日發行

●此花の咲きし理由

先年予が東京の酒井好古堂といふ古本屋へ行つて、望みの書籍を探して居ると、其店頭へ他から一人の男が來て同店の主人に「何か珍物はありませんか」と云ふと主人は「伜が昨夜信州から買入れて持歸つた品が少々あります」と云ひつゝ、古い江戸繪の類を二三十枚出して見せた、其中の細田榮之の描いた美人の風俗畫三枚について、主人は二百圓より一錢も負けないと云ふに、彼の男が「百八十五圓ならば戴きませう」と云つて居る、予は其高價の賣買に驚いて、横間から口を出し「そんなものが二百圓とは如何したものですか」と尋ねて見ると「これは横濱の商館行でございます、皆外國人が買ふのでございます、此二百圓位の品はマダお廉い方です、喜多川歌麿の描いた鮑捕りの圖三枚物などは、外國人相場が千五百圓で、我々商人仲間でも千圓以上に賣買されましたが、今は一枚も出なくなりました、舊大家の藏の中にはマダ殘つて居るかも知れませんが、市中に賣物はモーありません、以前は三枚が高々二三十錢位のものでしたのに、それが千圓以上になるのですから、皆さんがお賣りになつて了ひました、そんな景氣でございますから、鈴木春信の描いた半紙形位の一枚物でも、百五十圓以上に戴きます、大阪邊に在ますならば、四五枚御持參下さいませ、御望みの古本は幾らでも呈上いたします」と云つた

予は此事を聞いて、大いに感じた、外國人が我國の古い浮世繪の版物を一枚百圓二百圓にも買取ると云ふに、本元の我國で冷眼視するのは、抑も何故であるか、外國人だつて馬鹿者ばかりぢやあるまい、一時の流行といふのならば、一鉢の蘭が三百圓とか、一株の藪柑子が百圓とかいふ詐欺師仲間の相場もあつたが、外國人が日本の浮世繪を買初めたのは、明治二十年頃の事であつて、爾來十數年、相場は漸々騰貴するのみで、今に續いて居ると云ふのは、佛國とか、獨逸とか、英國とかの鑑識家が尊重して居るからであらう、又各國の博物館には日本の浮世繪を多く陳列してあるので、日本人が見て、何時の間にコンナ澤山の品を買占められたのであるかと、呆れる程であると云ふから、日本の浮世繪には眞の價値があるに違ひない、これは一つ研究して見ずばなるまいと感じた

又先年京都の大黒屋といふ外人相手の書肆へ行つて「外國出版書の中に、葛飾北齋の事のみを書いた本があるさうですが、其本が今あるのならば一冊買ひたいのです」と云ふと、「種々ございます」と云つて、示されたのを見ると、英獨佛の原書が七八冊である、予は其多數なるに驚きながら、悉く買取つて歸つたが、さて又感じたのは、本元の我國では、北齋の繪畫を研究して居る人もあるかは知らないが、其研究の結果を公刊の著書として發表した者はない、只僅に繪なしの『葛飾北齋傳』といふ單行本があるに過ぎない、然るに外國人が斯くの如く、專門的に研究して、其結果を公刊する者が多いのは、諸外國に於ける北齋の勢力偉大なるを知ると共に、日本の浮世繪を愛重する者が、各國に多くあることを證明して居るのである、又近頃渡來の外國美術雜誌を見ると、いづれにも日本の浮世繪を寫眞三色版として毎號掲出してある、されば、我日本人たる者が、日本の浮世繪を外人の研究にのみ委して置くのは、位置顚倒の甚だしき事である、これは是非とも我々が大いに研究して見ねばならぬ

と感じた結果が、終に『此花』を難波津に於て咲かして見る事になり、今回漸く咲いた其第一枚を日本人諸家に提供する次第である

浮世繪の眞價

これは曾て予が別刊物紙上にて公表した一記事であるが、本誌に必要の論であるから茲に再錄する

浮世繪といふもの、昔は町繪と蔑視されて居たものである、其何者が蔑視して居たかといふに、狩野派とか南宗派とか云ふやうな漢畫を摸倣した畫流の者が、浮世繪を俗なりとし恰も無慈悲の武士共が商工業者を町人共と嘲つた如く、浮世繪を町繪と呼んで之を排斥したのであつて、是全く當時漢畫者流の多くは繪所預所の員に列するとか、又は大名共の抱へ畫師といふ境遇にあつたが爲め、殊更に浮世繪師を斥けて、士門に入れざらしめんとしたる卑劣根性から出たものである

斯くの如く、幕府又は諸大名に飼はれて居た者どもが、輕侮せしにも拘はらず、浮世繪は上下一般の好尚に適し、當時々々の浮世繪妙手家に描かしめたる畫幅の類は、今尚諸名家の庫に藏められて居る、これ何故なるかといふに、時代の風俗を描出すべき繪畫は此浮世繪派に依るに非ずんば、到底其精緻を極める事は出來なかつたからである

前記の如く、浮世繪は町繪と輕侮されて居たが爲めに、他諸派の繪畫の如く金錢上の價格高からず從つて其版物の如きは最も廉價に賣買されて居たのであるが、諸外國との交通機關開けし明治二十年前後に至つて、鑑賞の明ある西洋各國人の注目する所となつたがため從來一圓或は二三圓に過ぎなかつた繪本又は繪草紙の類が、十圓二十圓五十圓百圓と漸次騰貴するに至つた、何故斯く西洋各國人の嗜好に適したかといふに、彼等曰く「成程雪舟とか狩野探幽とか圓山應擧などの畫は、美術として價値ある物には相違ないが、其描く所は山水とか花鳥とか、又は神仙などの圖のみであつて、其畫題は殆んど千篇一律の平凡に過ぎない、特り浮世繪師の描く所は時代の風俗を察し得べき精巧又は艶麗のものであつて日本近古の活歴史と觀るべき繪畫であるから吾々は其高價にも拘はらず、之を得んことにアセルのである云々」今更ながら其烱眼に服せざるを得ない、されば其結果として日本人間に於ける賣買價格も亦騰貴して一冊の浮世繪本も三十圓五十圓にあらざれば賣買せざるに至つたのは、近古以來の浮世繪師が聞いて以て瞑すべき一大美事であると言はねばならぬ、之に就て我輩が感じたのは、浮世繪妙手の一人たる月岡雪鼎が今を去ること百四十年前即ち明和八年刊行の「金玉書府」附錄の末尾に記した一論文である

その一論文とは

或人本邦俗間の事を圖し妓女遊舞等を畫くに卑陋なりとて譏れる人あり是何の謂ぞや漢土舜擧徴明仇英が類美女を書き風流を寫すの輩あげて數へ難し然るに只仙女及び貴妃西施が類靈昭女卓文君等を圖して是を雅なりとし和畫の風流婦人妓舞等を寫すに及んでは是を俗なりといふは尤も誤れり漢土に他邦の美女人物を寫すに非ず唯西施の紗を浣ふは布晒の女にて靈昭女は籠屋の女也然る時は彼を雅とし是を俗とするの意はなしと知るべし雅俗の境を論ずる時は俗はナラハシと訓ずれば唯世上一般に書いて自他等しく玩ぶものを俗とは云ふなるべし其風俗の推移るに及んで古畫を考ふるに江口妙白女大磯の虎及び祇王祇女が類皆カザミに緋の袴を着し略官女に相類して圖せるもの也夫より土佐光信光起及び浮世又兵衛近世菱川吉兵衛尚近き頃京師の西川祐信など和畫風流に委し其筆迹を擬して尚因に當世の風俗を摸寫し古今其情は同じうして形の異なるを示すもの歟和畫は河成信實より光信光起等の古法を慕ふと雖も其風俗に至つては光信光實の世の人物を寫さず菱川吉兵衛浮世又兵衛の世の人を畫かず又何ぞ今を畫くに古の人を畫いて點頭する者あらんや古人の所謂擬規して變化するなるべし

實に當年の憤慨意志を察すべき見識ある罵倒文である、彼は正に明治の世に至つて其大知己を得たることを欣んで居るであらう

松竹梅



△磯の松風が琴の音に聞こゆるとは、古今の和歌詩文に多く詠じてあることだが、寛政十一年の版本、曲亭馬琴の著『風の神』といふ黄表紙に、風の神が松の樹の上で琴を彈じて居る畫を入れてある、美化的の形容詞を有聲の詩に現はしたものと評すべき雅致がある

風の神(男)を美人にしたのは、記者の變造であるが、今の浮世繪名家に「磯の松風」といふ畫題で、斯の樣な彩色入の畫幅でも描いて貰つたならば、實にタマラナイ情趣のあるものが出來るであらう



△竹の屋素直は信州松代の人なり、性竹を好み、常に竹の摸樣染たる衣を着し、床には竹の畫の幅物を掛け、壁には竹の押繪し、網代天井、竹の椽、竹の編戸に竹垣をゆいまはし其外すべて家具みな竹にて製せざるものなし家の四面竹藪あり、友を會して竹林の遊をなす、又笛を好む、直なると竹の如し、故に人呼で竹の屋素直といふ　文政版(狂歌水滸傳)

△友禪染といふのは、宮崎友禪が發明した摸樣の線を白く殘すイッチン描きといふ法によつて染める故の名である、由禪、友染、幽禪祐善など書いた本もあるが、友禪が眞である貞享元祿寶永の頃、京都で染物の繪を描いた人で、寶永四年版の『梶の葉』といふ祇園梶女の歌集に挿畫をかいて「洛陽畫工友禪子圖之」と奥書してある、元祿四年版の『鳴羽搔』といふ歌集の挿畫も友禪であると聞くが、署名は無い、貞享五年版の『友禪ひいながた』といふ四冊本も友禪の筆であると聞くが、巻末には「友盡齋日置清親圖之」とある、友禪の肉筆物は今に多く殘つて居るが版畫は此外にない

梶女

○人のもとへ梅花を折て遣すとて

我袖のにほひもゆかし君がため
折りつる梅のなごりと思へば



（梶の葉）

最古の浮世繪

慶長



岩佐又兵衛筆

最新の浮世繪

明治



鏑木清方筆

●月蝕さま

（天文學を知らぬ天職屋）

明治四十二年十一月廿七日發行の『大阪新報』に「今夕の月蝕」と題して

今廿七日の夕方には月蝕があります、東京では二分三厘より虧ないですが、京都では五分三厘、即ち半分以上虧るのです（中略）而して今夜は舊の十五日に該り滿月ですから、蝕した月体を見るには最も都合が好いのです、云々

日蝕は新月（朔）の時、月蝕は滿月（望）の時に限るといふ事は、天文學上定まつて居て、今は高等小學の生徒でも知つて居る事である、新月でない日に日蝕があつたこともなく、滿月でない夜に月蝕があつた例はない、そのないのが天界の定則である

然るに操觚家たる者が「今夜は幸に滿月ですから月蝕を見るのには最も都合が好いです」など云ふのは、自ら其無學を表白したものと云ふべく、天文學上の軌道とか陰影とか云ふ事をも辨へないで、臆面もなく指導らしい記事を載せるのは、天文學を知らない天職屋として笑つてやらねばならぬ

これを見ても、今は普通學の修養もない者が新聞記者になつて居るといふ事が明である

月蝕の圖



喜多川氏　月麿筆　歌麿門人

●元祿劇壇の淫風

（筆禍史の一材料）

男色をひさぐ事を職業にして居た江戸の若衆一に「カゲマ」とも云ふ非倫の淫風が、最も盛んに流行したのは元祿頃である、淫文家の巨魁井原西鶴の著書には、多く此若衆の事を材料にしてあるさうな、又菱川師宣の繪本にも多く此若衆の風俗を描いてある、



茲に示すのは、初代鳥居清信の畫であつて、猿若小山三の若衆形を寫したものである、これは鳥居風でない、菱川派の畫らしいと云ふ人もあるだらうが、元祿六年公刊の『古今四塲居百人一首』に出て居るもので、同書は鳥居清信の畫である、同人が最初菱川師宣の畫風を慕つて大いに眞似たといふことは、鳥居家の記錄にも出て居る、此畫は清信の筆に相違ないのである

『古今四塲居百人一首』は別題『色競』とも云ふが、當時風俗壞亂として發賣禁止、印本差押へ（絶版）の處分を受けたものである、如何なる點が風俗壞亂であるかと云ふに、當時の役者は生嶋新五郎の如く、將軍家其他諸家の奥女中や妻女をタラシてそれと姦通し、又女形や若衆形の役者は、男色をひさぐなどの大弊風があつた、然るに此『古今四塲居百人一首』は、其役者共の提灯持ちらしい事を記したので淫風助長の害物として絶版を命ぜられたのである、茲にその一例を摘記しやう

女形若衆形の役者中村數馬といふ美男の評判記として

男色女色二道のすぐれたること右の手にては鈴木平八と威をふるひ左にては袖岡松嶋谷嶋と押合これを業平藝ときわめ人々のいざと友をさそい女形の諸わけを見て魂を飛ばし若衆形にては心を動かして誠に武藏の花はこれぞと日本橋北へ一丁目にはひびん付めしませい白い黒い堅い柔かなる御望次第一かい半かい

人ごとにいざと心を動かして
花のむさしの香に匂ひける

これは此役者が日本橋北一丁目にて鬢附店を開いて居るから、同人の男色を愛玩したい人々は、鬢附を買ふ体で尋ね行くべしと、教唆したやうな記事であるから、即ち社會の風俗を紊すものとなるのである、寶暦頃の川柳に

惡方は油店など思ひ切り

といふのがある、これは惡方の役者は、世間の男も女も贔負にしないので、鬢附油店などを出しても、それをかこつけにして淫を買ひに來て呉る者が無いから、思ひ切るといふ意である、鬢附油店を出すのは艶形役者に限ると云ふことがこれで解る

明治維新後は「カゲマ」といふ者もなく、役者が男色を鬻ぐ事もないから、今時の人々は若衆の畫を見て、男か女かと怪む位であらう

●獨逸出版の日本美術書

（讀めざる艶文句）

「蝦茶袴の女學生　英語で艶書かく親の前、親はそれとも知らずして、大層勉强ができますネー」と云へるは、先年流行したる俗謠なるが、今此俗謠を聯想せしむべき一笑話あり

西暦千九百〇九年（明治四十二年）獨逸に於て公刊したる『日本の美術』（Fapans Bunft）と題せる書は、ジョーヂー、メスターマンと云へる人の著述にて、日本の美術、即ち建築物、彫刻物、鑄造品、陶器、繪畫等の美術品を列擧したるものなるが、其繪畫の部には、浮世繪も少からず、菱川師宣、勝川春章、西村重長、鳥居清滿、清長、鈴木春信、湖龍齋、耳鳥齋、葛飾北齋、喜多川歌麿、月麿、歌川豊國、廣重、寫樂、松好齋等の逸品をも寫眞版として多く掲出し、以て日本の精華たる浮世繪を紹介せり、尚又奥村政信、北尾重政の好色本中より、其卑猥ならざる部分をも摘出しあり、此一事は春畫を露骨に掲載せしにあらざるが故、之を非難せんよりは、寧ろ穩當として、其研究の熱心なるに敬服すべき所なれども、只一つの笑ふべきは

戀男戀女　北尾重政筆
凡そ千七百八十四年頃　（天明四年）

と註して掲出せる一葉なり、其畫面は横臥せる男子が立てる婦人に戯るの圖にして、極めて卑猥なるものにはあらざれども、畫面に附記せる婦人の言葉として、日本字にて

「もしへ、あれ、人がまいります」

と云へる艶文句あるをも其まゝ寫出しあるの一事は、日本假名を解し得ざる獨逸人には、何等顧慮する所なかりしなるべしと思はるれども「英語で艶書かく親の前」といへる俗謠を聯想せしむべき興趣あるものならずや

『右日本の美術』は東京、大阪、京都等の洋書屋にて販賣せるならん



茲に挿入せる小畫は日本浮世繪の熱心研究者英人エドワード、エフ、ストレンヂ氏の著述たる『日本の版畫』と題する浮世繪專門書の卷頭に掲出せるものを其まゝ摸刻せしなり、こは菱川師宣の繪本中より抄出せしものにして、其艶文句は削除しあれども、前記北尾重政の筆畫摘出と同一のものなり、以て外國出版の日本美術書には此類のこと多きを知るべし

●隨一歌川　豊國芳年□

俳優の市川團十郎は、自ら劇道の隨一川と稱して居たが、近古以來浮世繪は殆ど歌川派の占領となり、明治現今の浮世繪師も、十中の八九までは歌川派たる月岡芳年の門派である其芳年が「一魁齋」と號したのは、歌川家の元祖豊春が「一龍齋」と號し、其門人豊國が「一陽齋」と號し、其又門人國芳が「一勇齋」と號したによつて、國芳の門人たる芳年も亦「一」の字付の齋號を襲つたのである、浮世繪師界の「隨一歌川」とシャレても可からう

芳年の同門たる一蕙齋芳幾が、安政七年閏三月二十一日、柳橋河半樓で畫名の披露をした折の摺物を見ると、一勇齋國芳の社中として

一松齋芳宗　一秀齋芳勝　一猛齋芳虎
一英齋芳艶　一鵬齋芳藤　一壽齋芳員
一登齋芳綱　一連齋芳近　一嶺齋芳雪
一停齋芳基　一葉齋芳貞　一龍齋芳豊
一好齋芳兼　一禮齋芳信　一集齋芳爲
一教齋芳滿　一寶齋芳房　一梅齋芳春
一張齋芳廣　●一魁齋芳年　一元齋芳彦
一光齋芳盛　一雷齋芳辰　一藝齋芳富
一神齋芳仙　一鳳齋芳桐　一俠齋芳延

國芳門の隆昌察すべしである、此外に

一天齋芳政　一旭齋芳秀　一春齋芳英
一峰齋芳鷹　一梅齋芳晴　一猫齋芳榮
一長齋芳久　一盛齋芳直　一燕齋芳鳥
一鶯齋芳梅　一輝齋芳玉　一聲齋芳鶴

などあれど、此中には直門でない者もある



（噓から出た實）



●心とハート

心性作用の發動機關は頭腦中にありと云へる生理學の開けない時代には、總て腹中に神經系統があるやうに思つて居たのである、胸が躍るとか、膽が大いとか、腎張りとか、或は肝膽相照らすとか、肺腑をつく議論とか云ふ語は、今に使用されて居る、其迷想の起りは心身相關の定則として、或る感情の激した場合には、腹中の營養機關（五臟）に鼓動を及ぼすので、其鼓動の感覺によつて、心の所在は腹中と推測したのであらう、歐洲諸國にても古代にはヤハリ心は腹中にありと信じて居たらしい、英語のハートは心臟であつて、其心臟の形を畫いて、心を有形的に代表することは、現今もマダ行はれて居る、恰も今日我々が「腹が立つ」と云ふのと異らない、未開時代の迷想は東西相同じである

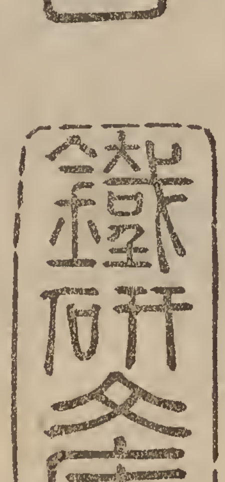
●藏書印影の賊

近頃東京大阪等の古書癖家中に、故人の藏書印影を集める者が多い、これも考古の一端と見れば、強ち咎むべき程の事でもないが、此流行の餘波として、貴重の古書を毀損する者があると聞いては一言せざるを得ない

それは、此流行のため一個の印影が一圓二圓にも賣買されるので、東京某圖書館の館員は古名家の手澤品たる珍籍奇書中より其印影の



田能村竹田



齋藤拙堂



松平定信

個所を切取りて、密に之を賣却するとの事である、是等は古書の賊たると云ふ迄もないが知つて之を買取る者の罪亦輕からずである

早咲の浮世繪師

七八歲にして書を能くすといふ神童もあるが浮世繪師界にも亦其神童少からずである

勝川春章の門人勝川春英は、天明二年十五歲の時『大阪土產大和錦』の挿畫を描いた

歌川豐國の門人歌川國直は文化二年十二歲の時『七福神屑籠』といふ本の挿畫を描いた

歌川金藏豐清十二歲の畫



(筆始日出松)

同く豐國の門人歌川金藏は文化七年十二歲の時『筆始日出松』といふ本の挿畫を描いた

同く豐國の門人歌川國次は文化八年十二歲の時『笑物黃金之嶋臺』の挿畫を描いた

お師匠樣のお手傳も幾分はあつたであらうがいづれも凡筆ではない

前記『筆始日出松』に師豐國の題詞があつて其末に「似我蜂やそだつも江戶の花の影」

呉音の名詞

日本の歷史傳記等にある名詞中には、呉音で讀むのが多い、佛典は悉く呉音讀みであるが年號でも天平、貞觀、天和、貞享と讀むのが故實である、太政大臣とか金剛山とか云ふ類でも、漢音で讀むのよりは語氣が強くてよい、又語音の汎意を避けるため、故らに呉音を用ゐたのもある、光格天皇の御父君典仁親王の御諡號は「慶行天皇」であるが、「けいかう」と讀んでは「景行天皇」と同じやうに聞こゑて紛らはしいので「きやうかう」と讀むことにしたなどは、最近の一事例である

此外書物の題號でも「續日本記」の續はしよくと讀み、「俗耳皷吹」の皷はくと讀み、「說林」の說はぜいと讀み、「萬葉集」「古今集」「今昔物語」「訓蒙圖彙」と讀むの類が多い

歌川豐國と谷素外

歌川豐國は谷素外の門人となつて、俳諧をもやつた、豐國が「一陽齋」と號したのは、素外の別號「一陽井玉池」から出たらしい、北尾重政も素外の門人であつて「一陽井花藍」といふ俳號を附て居た、素外の俳書『樂み草』に「照月の竹影を淸線舘主に乞ひ」とあるのは、挿畫を豐國に賴んだといふ意である

奇拔の出品

石疊みの摸樣を俗に「市松摸樣」とも云ふ、これは吉彌結、小太夫鹿子、宗十郎頭巾、路考茶、三升格子、小六染、傳九郎染など云ふのと同じく、役者の名をとつたのである、昔時元文五年の頃、佐野川市松といふ役者が、楠正行の役に、石疊み摸樣の社衤を着けて出演したので、當時大好評を博して、その後は石疊み摸樣を「市松」といふに至つたのである



其後も此市松摸樣が大いに流行して、文化の中頃には江戶市中市松摸樣の衣服を着ない者は無い程の流行であつたが、その頃、市松會といふのを催して、衣服に限らず器物、繪畫、何品にても、市松摸樣のあるものを出品せよとの事に、或一人は頭髮を五分刈にし、その五分刈を圖の如く市松形に剃落して出席したるに、當日寄集りたる物の中最優等なりとの好評を博して、多くの賞品を貰つたといふ話がある、熱狂もこゝまでゆけば風俗史の一材料として萬代に傳はる

乾坤一轉

葛飾北齋筆

(山彌多山)



●光線屈折の實體寫眞

享和三年の版本、曲亭馬琴の著述『珍紋圖彙』に曰く

影は形を寫して其色を寫さず、只色を寫すは鏡と水のみ、然れども、日影の五色を寫すこと又無きにしもあらず、信州諏訪の社の柱の穴に紙を押しあてれば塔の影寫る、又京都大宮通り丹羽氏の座敷の戸の節穴よりも東寺の塔寫る、いづれも畫きたるが如し、もつとも逆まに寫るなり、やつがれ去年西遊のついで、三州岡崎より一里半にしていはりの朝倉庵三笑を訪ふ、此家の納戸の節穴に紙を押しあてれば、十間ばかり向ふの築山泉水畫くが如く、これも逆まに寫るなり、やつがれ目のあたり之を見たり、庭に泉水あり草木あり、十間四方の風景わづか其紙一枚の上に鮮かに寫る云々(中略)これ日影の自然と照しあふものにして、世にたぐひあるべからず、唐土にも稀にありしにや輟耕錄に塔影の事見へたり

光線屈折の理によれる全反射たる事を知らざりし舊時代に、之を奇なりとせしは無理ならず、大阪野田の逆さ藤と云へるも亦これと同樣なれども、理學普及の今日は、誰とて之を珍とするなし



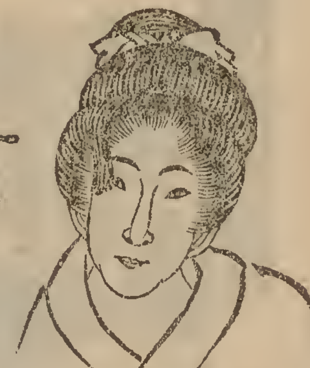
●花の魁

△浮世繪本描の元祖……菱川師宣―(延寶)
△女達磨繪の元祖……英一蝶―(元祿)
△芝居看板繪の元祖……鳥居清信―(元祿)
△染繪の元祖……宮崎友禪―(寶永)
△紅繪の元祖……奥村政信―(享保)
△打出繪の元祖……吉田魚川―(元文)
△錦繪の元祖……鈴木春信―(明和)
△フキボカシ繪の元祖……鳥山石燕―(安永)
△浮繪の元祖……歌川豊春―(安永)
△彩色摺込繪の元祖……橘珉江―(天明)
△雲母繪の元祖……齋藤寫樂―(寛政)
△草紙似顔挿繪の元祖……歌川豊國―(文化)
△組立繪の元祖……歌川國長―(文化)
△凧繪の元祖……歌川國次―(文化)
△ハメ繪の元祖……歌川國清―(文化)
△俯瞰地圖の元祖……鍬形蕙齋―(文政)
△ビラ繪の元祖……歌川國幸―(文政)
△カハリ繪の元祖……歌川芳藤―(嘉永)
△サガシ繪の元祖……歌川國盛―(嘉永)
△猪口繪の元祖……歌川國得―(安政)
△道具繪の元祖……歌川國利―(慶應)
△刺子袢纏繪の元祖……歌川國磨―(明治)
△輸出扇面繪の元祖……歌川國孝―(明治)
△新聞挿繪の元祖……歌川芳幾―(明治)

正面向美人畫



森川保之筆



溪齋英泉筆



北尾政美筆



小林永濯筆



十返舍一九筆



歌川豊春筆



北尾重政筆



歌川國貞筆



歌川國芳筆



歌川豊國筆



歌川國政筆



大蘇芳年筆



西川祐信筆



葛飾北齋筆

正面向の美人畫は實に少い、これは描きにくいからであらう、大概は左向である、右向は十中の二三に過ぎない、正面向は百中に一二もない、葛飾北齋は正面向の男を得意として多く描いたが、正面向の女はヤハリ少い、浮世繪本の元祖菱川師宣の著書數十種をしらべて見たが「月次遊」と「西行和歌修行」などに正面向の男はあつたが、女は一つもなかつた

△筆畫の原本

森川保之(女古状揃) 歌川國貞(上方戀修行)
溪齋英泉(不二の曙) 歌川國芳(逢悦彌誠)
北尾政美(親々道成寺) 歌川豐國(江戸の美圖)
小林永濯(年中行事) 歌川國政(繪草紙)
十返舍(江戸名所) 大蘇芳年(月百姿)
歌川豐春(繪本江戸錦) 西川祐信(千代見草)
北尾重政(繪本琵琶湖) 葛飾北齋(化物和本草)

●戯作者浮世繪師相撲見立番附（文化十年版行）

適切なりや否やは知らずと雖も、當時に於ける世評の一斑として見るべし、只疑ふべきは、當時盛名ありし葛飾北齋を脇行司として細書したるが如きことこれなり、これ或は撰者の私情によれるものならん乎


江戸 六樹園
作の方
画の方
行司 曲亭馬琴 葛飾北斎 歌川豊廣
勝川春英
鳥居清長
立川焉馬
北尾重政

文化十年算各年齢略表

曲亭馬琴（四十七）	立川焉馬（七十）	六樹園（六十一）	山東京傳（五十三）
式亭三馬（三十九）	十返舎（五十）	柳亭種彦（三十一）	鳥居清長（六十二）
葛飾北齋（五十四）	歌川豐廣（五十）	勝川春英（四十六）	蹄齋北馬（四十三）
北尾重政（七十五）	歌川豐國（四十五）	歌川國貞（二十八）	
勝川春亭（四十四）	鳥居清峰（二十七）	歌川國直（十九）	歌川國安（十九）
柳川重信（二十七）	歌川豐清（十七）	歌川國芳（十七）	

大久保葩雪氏の編著たる『増補青本年表』の文化二年の條に

此頃戯作者と浮世繪師との見立番附を出す者あり所載の戯作者四十名畫工四十五名

とあれども、此見立番附は文化二年頃にあらずして文化十年の六月頃なるべし、大久保氏は文化二年に歿せし喜多川歌麿の名あるを以て、同年頃の版行なるべしと想像せしならんも、表中に「哥麿」とあるは二代目歌麿（戀川行町）なるべし、若し初代歌麿なりしならんには、如何に情實を以て貶すとも、行司の末端に細書するが如きことなく、下るとも春英國直等の上たるや必せり、尚又文化二年とすれば、文化四年後に處女作を出せし東里山人山東京山、岡山鳥等を加ふることなかるべく十一歳の歌川國安、九歳の豐清、六歳の國次九歳の國芳等を加ふることもなかるべし、これより推せば、式亭三馬が「此一枚摺文化十年癸酉七月和泉町の住樂亭馬笑子が江戸橋にて求め得たりとて予に惠投、其後需るといへども絶て無し」と手記せるによつて、同年の版行と見るを正とせずや

又著名の作者市場通笑、唐來三和、楚滿人、喜三二、萬象等を缺けるは、同十年前に歿せしがため、畫師歌川豐春、窪俊滿、北尾政美等を缺けるは、隱居或は轉業のためならん

紅繪

地紙賣の風姿

鳥居清滿畫

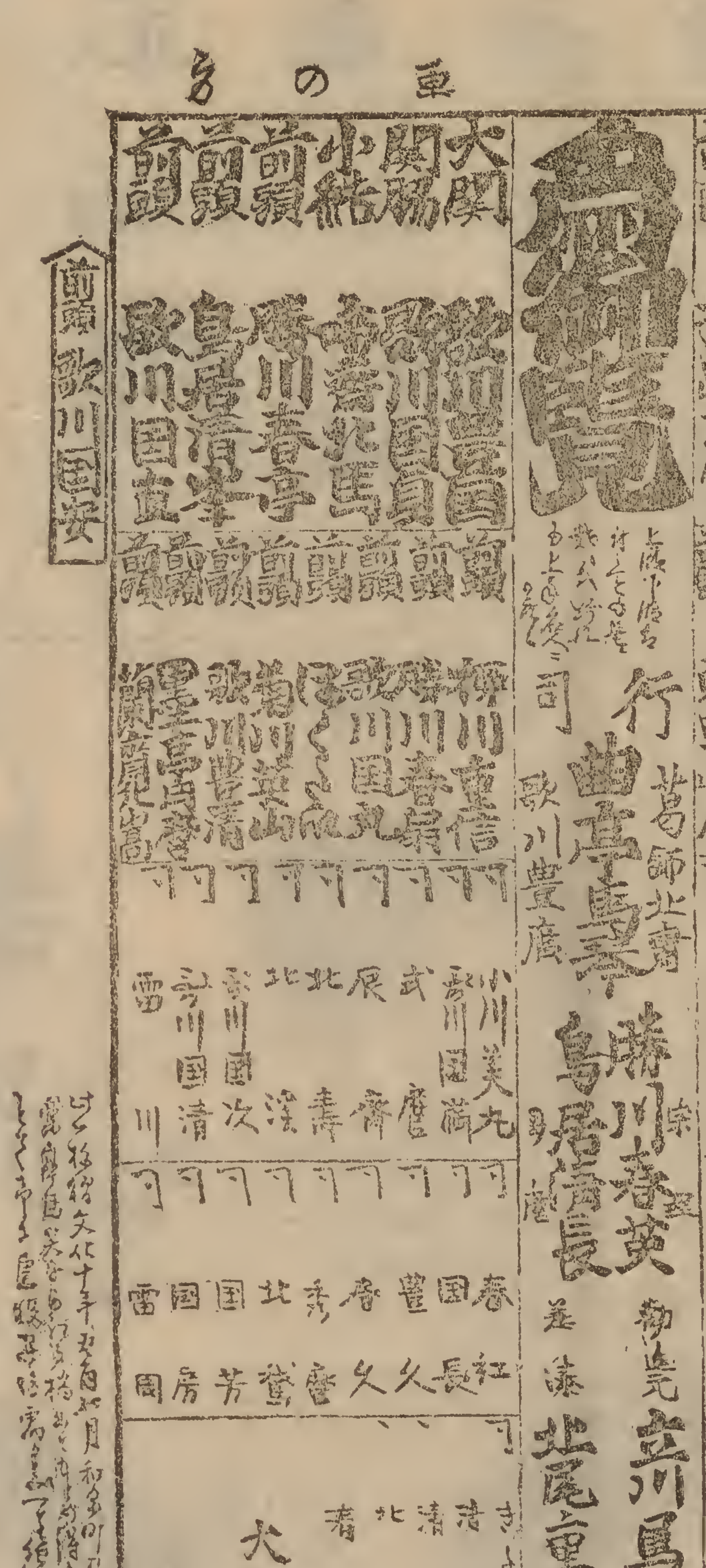
鳥居清滿は鳥居家二代目清倍の男なり、享保二十年生にして父の業を繼ぎ鳥居家三代目となる、天明五年四月三日五十一歳にて歿す、最も多く紅繪を描けり、蜀山人が古紅繪吉原遊君姿に題すといへる狂詩にも「出廓大門肩上開、奥村鋒力鳥居才、風流紅彩色姿繪、五町遊君各一枚」とあり



地紙賣とは、書畫用とすべき扇子の地紙を賣歩きしなり、放蕩息子又はカゲヤの成れの果が之を業とせりといふ、當時「地紙賣母に逢ふのも垣根越」（勘當息子の意）「地紙賣芳町以後はなどゝ云ひ」（男娼茶屋芳町に在り）と云へる穿ち川柳あり、其ニヤケ姿なるも宜なりけり

●戲作者浮世繪師相撲見立番附（文化十年版行）

只疑ふ適切なりや否やは知らずと雖も、當時に於ける世評の一斑として見るべし、當時盛名ありし葛飾北齋を脇行司として細書したるが如きことこれなり、これ或は撰者の私情によれるものならん乎



文化十年算各年齢略表

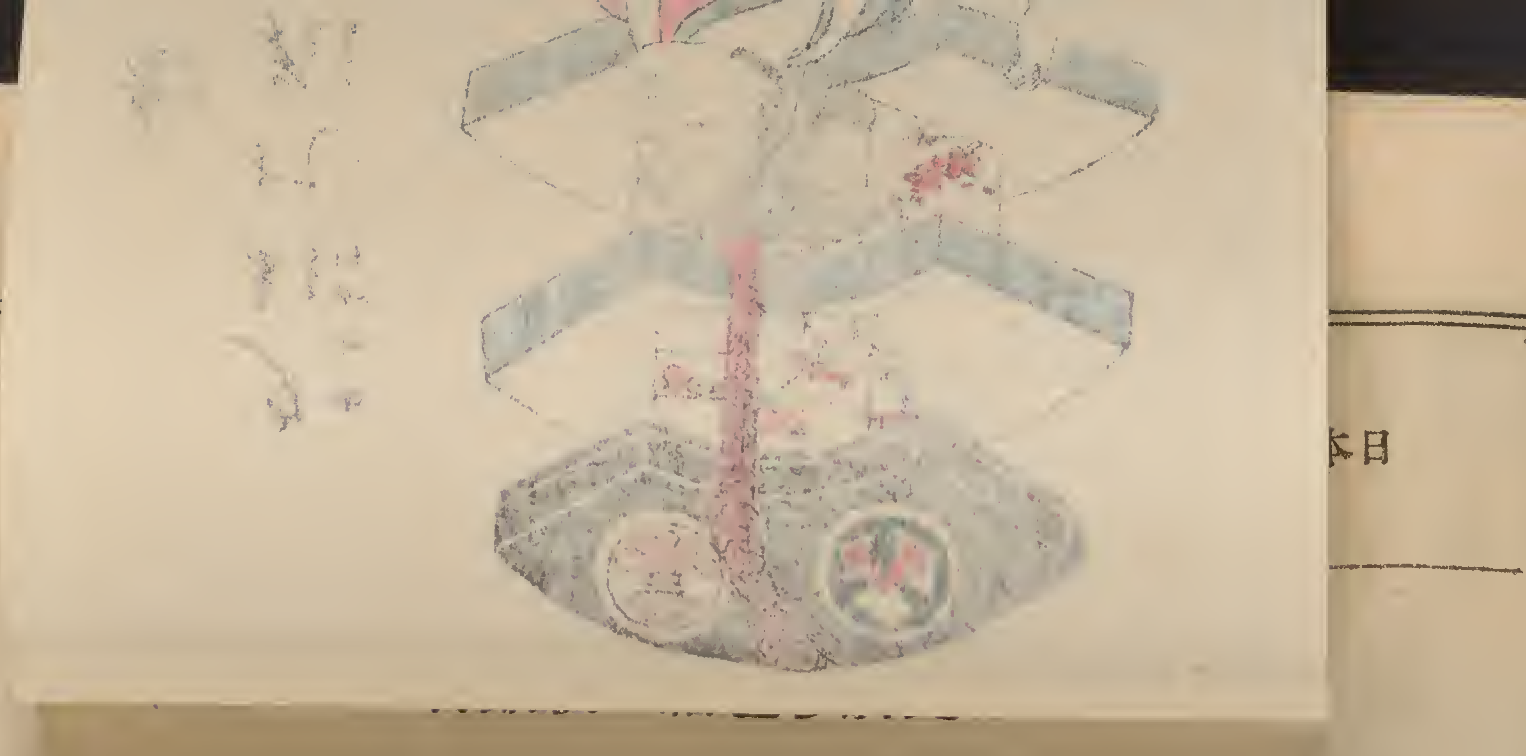
曲亭馬琴(四十七)	立川焉馬(七十)	六樹園(六十一)	山東京傳(五十三)
式亭三馬(三十九)	十返舎(五十)	柳亭種彦(三十一)	鳥居清長(六十二)
葛飾北齋(五十四)	歌川豐廣(五十)	勝川春英(四十六)	蹄齋北馬(四十三)
北尾重政(七十五)	歌川豐國(四十五)	歌川國貞(二十八)	歌川國安(十九)
勝川春亭(四十四)	鳥居清峰(二十七)	歌川國直(十九)	
柳川重信(二十七)	歌川豐清(十七)	歌川國芳(十七)	

○大久保葩雪氏の編著たる『增補青本年表』の文化二年の條に

此頃戲作者と浮世繪師との見立番附を出す者あり所載の戲作者四十名畫工四十五名

とあれども、此見立番附は文化十年の六月頃なるべし、大久保氏は文化二年に歿せし喜多川歌麿の名あるを以て、同年頃の版行なるべしと想像せしならんも、表中に「哥麿」とあるは二代目歌麿（戀川行町）なるべし、若し初代歌麿なりしならんには、如何に情實を以て貶すとも、行司の末端に細書するが如きことなく、下るとも春英國直等の上たるや必せり、尚又文化二年とすれば、文化四年後に處女作を出せし東里山人山東京山、岡山鳥等を加ふることなかるべく十一歳の歌川國安、九歳の豐淸、六歳の國次九歳の國芳等を加ふることもなかるべし、これより推せば、式亭三馬が「此一枚摺文化十年癸酉七月和泉町の住樂亭馬笑子が江戸橋にて求め得たりとて予に惠投、其後需るといへども絕て無し」と手記せるによつて、同年の版行と見るを正とせずや

又著名の作者市場通笑、唐來三和、楚滿人、喜三二、萬象等を缺けるは、同十年前に歿せしがため、畫師歌川豐春、窪俊滿、北尾政美等を缺けるは、隱居或は轉業のためならん



紅繪考

紅繪と云ふと雖も、紅彩色のみにあらずして、藍色をも加ふ、俗に藍色を「靑紅」と稱して紅の一種なりとする異說もあり、墨版のなき紅の一色にて摺りたるものを紅繪と稱するならんと云ふ人もあれど、そは紅繪といふものにあらずして「疱瘡繪」なり、紅繪には藍の外黃又は綠を加へたるものもあり、享保十九年版『近代世事談』に曰く「淺草御門同朋町和泉屋權四郞と云ふ者、板行の浮世繪、役者繪を紅彩色にして、享保の始め頃よりこれを賣る、幼童の翫びとして、京師大阪諸國にわたるこれ又江戸一ッの產となりて江戸繪と云ふ」又享和三年手柄岡持の著『後は昔物語』に一枚繪と題して「我その一枚繪を貰ひて持たりしが、漸く彩色摺の初まりたる時のもの也、されども墨と紅と草の汁と三枚板にて所々喰違ひもありき、小六が野郞帽子の紫の所は、紅と草の汁とを重ねて摺りて紫色にこぢつけたる物なりき云々」又森嶋仲良の著『反古籠』にも「享保の頃、紅、藍、黃汁の三色を板にし以て賣出せし所、餘り華美なる物なりとて差留られしが、幾程もなく許さる、寶曆の頃まで皆是なり」とあり、これにて江戸繪の原始は紅繪なりしこと知るべし、享保前に丹綠等にて彩色したる一枚繪ありしといへども、そは版行の彩色にあらず、筆にて彩色を加へたるものなりし、而して此紅繪は鳥居淸信の創意なりと云ふ者もあれど、奧村政信の發明なりとするの說多し

紅繪　地紙賣の風姿

鳥居淸滿畫

鳥居淸滿は鳥居家二代目淸倍の男なり、享保二十年生にして父の業を繼ぎ鳥居家三代目となる、天明五年四月三日五十一歳にて歿す、最も多く紅繪を描けり、蜀山人が古紅繪吉原遊君姿に題すといへる狂詩にも「此際大門肩上閙、奧村鐘力鳥居才、風流紅彩色姿繪、五町遊君各一枚」とあり

地紙賣とは、書畫用とすべき扇子の地紙を賣歩きしなり、放蕩息子又はカゲマの成れの果が之を業とせりといふ、當時「地紙賣母に逢ふのも垣根越」（勘當息子の意）「地紙賣芳町以後はなど〻云ひ」（男娼茶屋芳町に在り）と云へる穿ち川柳あり、其ニヤケ姿なるも宜なりけり

●大阪の心齋橋

東京の兩國橋、京都の五條橋と相對して、大阪の心齋橋は著名のものであるが、去月其新築落成して、立派の石橋となつた

これに就て思ひ出したのは、心齋橋といふ名の由來である、貞享三年版の「好色一代女」には「大阪眞齋橋筋呉服町角、書林岡田三郎右衛門版」との奥書があり、又元祿二年版の「本朝櫻陰比事」にも「大阪高麗橋眞齋橋筋南入、雁金屋庄左衛門板行」とあつて、今の「心」が「眞」になつて居るが、其「眞」も眞ではない、「新」が「眞」に變つたのである、と云ふのは、朝鮮即ち今の韓國が、高麗、新羅、百濟の三韓と云つた往古の頃、心齋橋の所が新羅と百濟の貿易場であつたので、新羅の「新」と百濟の「濟」の字をとつて、「新濟橋」と云つた、其新濟がいつの間にか眞齋となり、更に又心齋と字が變つたのであるとの說だが、心齋橋の所が貿易場であつたと云ふは間違らしい、「浪華上古圖說」に據ると、今の嶋の内を新羅洲と云ひ、船場を百濟洲と云つたとあるから、高麗の館に近い所の橋を高麗橋と云ふ如く、新羅人が居り、百濟人が居つた兩洲の間に架た橋であるから「新濟橋」と云つたのであらう此事は今の地誌類に載て居ない新說である

●浮世繪師の名物畫（一）



英一蝶の朝妻舟



菱川師宣の編笠美人

●暗香疎影

▲家庭と繪本　昔は家庭教育として繪本を兒童に讀ませたものである、文政十一年版の「眼前教近道」といふ本に

およそ庄屋の家にては、男子五歳より繪本を見せ、七歳より手習子屋へやるべし、早きにあらず、習はずと遊ぶとも、徒に内におくよりまし也、扨其繪本は、西川氏の描きし物おの〳〵よろし云々

▲上戸と下戸　明治の落語は天保式の地口調であるから、面白いのが無い、天明寛政頃の落語本を讀むと、獨笑を禁じ得ない趣味あるものが多い、これも其一つ

「下戸の建てたる藏はなしと云ふ、上戸は樂みが多いから、ちと酒を呑んだがよい、「そんならきさまは藏を建てたか「オヽ建てたとも、池田屋の藏も伊丹屋の藏も、おいらが寄つて建てた「エヽ減らず口ばかりおいらは酒を呑まぬによつて、大三十日が樂だ、そなたの内のやうに掛取が降るとは違ふ「イヤ藏は戯言だが、店をば方々へ出した「何店を　「小間物店を

▲豐後と繪師　歌川家の元祖豐春は豐後臼杵の人であるが、今の同派右田年英氏は豐彥といつて、同じく豐後臼杵の人である

現今浮世繪師（一）

阪田耕雪

師門　尾形月耕
俗稱　阪田萬助
年齡　四十（明治四年生）
生地　石川縣加賀國金澤市十間町
現住　大阪市東區傳勞町四丁目二十九番邸



右田年英

師門　故月岡芳年
俗稱　右田豐彥
年齡　四十八（文久三年生）
生地　大分縣豐後國北海部郡臼杵
現住　東京市芝區芝田町四丁目七番地



北野恒富

師門　故稻野年恒
俗稱　北野富太郎
年齡　三十一（明治十三年生）
生地　石川縣加賀國金澤市石阪川岸町
現住　大阪市南區鰻谷仲之町



筒井年峰

師門　故月岡芳年　菊地容齋畫風私淑
俗稱　筒井勇藏
年齡　四十六（慶應元年生）
生地　兵庫縣攝津國川邊郡伊丹町
現住　東京市赤阪區青山北町四丁目九十三番地





男女十二子の寶分算法

むかし富貴なる人子を男子六人女子六人都合十二人もつ、家に傳はる寶物十五品あり、十五品を十二人に分くれば、三品あまる、是を男子に取らすれば女子うらむ、女子に讓れば男子にいとむ、茲に於て十二人の子を並べ、端よりよみて十に當る者に一品づゝ取らせ、最後に殘りたる者にあとの三品を取らせんと申出したり、男子の中に一人發明なる子ありて、一二三、一二三と並べたり（圖の如く男一女二男三、女一男二女三と公平に並ぶ）これにては女子六人ともに先に除けられ、男子六人ともに後に殘るなり

扨よみゆくほどに、女子五人まで除けられたる時、女子の云ふやう、あまり偏頗のいたし申す間、此度は妾より數へたまへといふ、是非なく望みの通りに女子よりよみければ、一人の女子はあとに殘り、六人の男子悉く除けられ、殘りたる寶三品を女の取りたるとなり

然れば男子にも優る女子のあるものぞかし右の數へやうは、一（黑服、男）の方よりよみて十に當るを除け、又その末へよみてよみ詰まりたる所よりあとへよみ戻りて十に當るを除け、もどり詰まりたる所より又あとへよみいつまでも行き戻り數へるなり、最初の十に當るは末より三番目、又よみ戻れば二度目には始より三番目當りて除くなり、三度目には末の二番目除く、四度目には始めの二番目除く、これにて知るべし、そのすへもよみやう斯くの如し、よみ除けるほどに女子六人ともに除くなり、六人除けば勝負すみ、今一人女子のある時、此女子よりよみ行ければ、六人の男子皆除き、一人の女子殘るなり、昔より繼子だてとあり、その並べやうは二一三五二二四一一三一二二一と並べ、數へやうはくるりと廻りよみなり、是もよくしたる算法なれども、此十二人の算法は遙かに行儀よく一二三一二三と並べ、みだらならざる名算なり算術の奥儀より出でたり、童兒の慰み事に似たれども、一つは男女共に算術を知るたよりともならんかしと記しぬ

以上は寶暦頃の版本と認むべき『花鳥文章』といへる女子節用集に出たる事なり、挿畫の筆者何人なるや不詳なれども、察するに西川派の浮世繪師なるべし

記事の法式通り數へ見んとすれば、その十目に當りし人物畫の上に、碁石の類にても載せ、その碁石の載りたる者を除きて、行き戻り數ふべし、古き事なれども、童蒙啓發の一端たり



●雁金文七の畫

「梅の難波に香も高き、五人男の眞先へ立つや霞の朝ぼらけ、御贔負といふ日の影に、揃ふ大樹の眞中へ、まだ正月の花早く、いはゞ莟の若衆形、實ばへ上りもお惠みに、思はぬ此身に花が咲き、つらねも初音の藪鶯、ホウほけきやう」云々とは『此花』にゆかりある文句なれども、こは破戸漢を俠客に變作したる浪華五人男の一人たる雁金文七の臺詞なり、文七は無賴の惡徒にして、風雅の心得などあるべしとは想はれざれども、安永七年の版本『名物浪華のながめ』といへる繪本中に



天王寺元三大師の藥師堂に壽永忠度の繪馬あり、雁金文七の畫のよし、其昔の一ふしに、相手かはれどぬしさまはと謠はれしぬしも、かゝる佛緣を結びしとてにや、貞享五年と繪馬に書しより、凡そ九十餘年に當る今年まで、筆のはこび消ねず、只よきみちには近よりたきものならんかしとあり、二百二十二年を經過したる今日は、其繪馬存在せずといへども、貞享五年とありしなれば、彼が獄門の重刑に處せられし時より十四年前の奉納なるべし、果して雁金文七の畫なりしや否やは不詳なれども、近き頃諸新聞紙上にて大色魔と呼ばれし鼠賊、電小僧こと西尾柳喜が美人畫など描きしに想ひ合はすれば、文七は雁金屋といへる金持後家の寵愛息子たりし十四五歳の時に、繪畫の修養ありしやも計られざるべし

●珍にあらざる珍

料理法の古版本に、豆腐百珍、蒟蒻百珍、玉子百珍、長芋百珍、海鰻百珍など云ひて百種の調理法を記したるものあり、近頃其類本として『鯛百珍料理』といふを見しに、「珍」の字を左の如く「寶」の略字に誤書せり

本朝古錢の第一たる「和同開珎」を開ちんと音讀する人多しと雖も、「同」は「銅」、「珎」は「寶」の略字なりとは成嶋柳北の著『明治新撰泉譜』にも記す所にして「珍」にあらざるなり

鯛百珎料理。

寶 寳



●版畫考（一）

「此花」記者曰く、本篇は日本浮世繪の研究に熱心せる某外人の囑に應じて、無名氏が述作したるものなりしを、幸田露伴子がこれに校訂を加へられたるものゝ由にて、同子より其草稿を寄贈されたるものとす、浮世繪の版畫に就ての考證にして、未だ世に公表せられざるものなれば、茲に之を續載する事とせり。

總説

凡そ事物の起因する所を廓然斷定せんことは頗る難し。假令ば某の瀑泉下つて某の川になるといひ、某河は源を某湖に發すといふが如し。共に水源の某瀑泉若くは湖瀧にあるを知ると雖も、湖瀧の水更に何所より來るかを知らず。歷史に於て或技に付其最初を斷定せんとするが如きは至難の事に屬す。我國繪畫の版行の起因また然りとす。

●●●菱川師宣以前の版行繪

（一）彫刻の技と刷方の初

萬治寛文より貞享元祿に至るの間、菱川師宣出で、所謂大和繪なるものを創始し、盛に版物を出して繪畫版行の事これより大いに見るべきものあるに至りたるは、我國印刷畫の歷史上に一大界線を劃するものなり。翻つて思ふに、繪畫の術、彫刻の技、共に幾多の變遷を重ね來つて、世運の要求已む可らざるに及び、遂に時勢は師宣の如き者を出しゝ也。

彫刻の技は遠く神代に其源を發す。今稀に見る所の五鈴鏡の如き、裏面の摸樣頗る見るべきものあり、勿論是等は鑄造に係るものなりと雖も、其鑄型を彫刻するの技、大いに進歩したる者あらざるよりは能はざるなり。

斯の如くにして、遲々と進歩したる彫刻の技術は、佛法の渡來に依つて大いに其面目を更め、六百年後に到つては、佛像を始め動植物等の立体丸彫刻及び平面板目彫刻、共に長足の發達を遂げしことは、法隆寺其他の寶物に徵して明かなり。

佛法の興隆に依つて促されたる物質的文明の餘波は、上下を通じて大いに奢侈の風俗を助長し、當時の衣服の法令によつて定められたる服色の外、動植物の摸樣を摺り紋にしたる所謂「摺衣」を要求したり。摺衣は何時の頃より起りしものなるかは、詳かに知る可らずと雖も、大東寺に現存する花紋布に天平勝寶の年月を記せるものありといへば、八世紀の中頃に於て已に行はれしものならん。摺衣は梅柳、蝶、小鳥の類を平面の板に彫刻し、此を形木と稱し、糊を以て布を形木の面に貼付し上より物をおほひて踏固め、其文を凸出せしめ、揉潰したる山藍、其他植物の葉を碎きて搾取りたる汁を凸出の部分に塗り、乾いて後剝して用ひたるものなり。其後衣服を飾りし摺文が、襖障子の類を飾るに應用せらるゝに及んで、摺文は紙に向つて試みられたり。東北院職人盡歌合に「すりし」といへる者ありて「梅の花ばかりする程に易き」といふ詞書と「葡萄ずりの花田にまじる實紫、いづれにうつる人の心ぞ」といふ歌をも見、挿畫に刷毛を描き添へあれば、此時には草繪具を鉢に溶きて、刷毛に含ませて用ゐしことを知ると同時に、二三色の摺交も已に此時ありしや知るべきなり、只完全の水繪具を得ざりしのみ。

（二）公刊の沿革

繪畫の刊行は其源泉を書籍の挿畫に發したれば、挿畫を入るゝに至りしまでの書籍刊行の沿革は略こゝに記さゞる可らず。寶龜元年に百萬塔なるものを作られたる事あり、時の陀羅尼は已に木版摺なり。其後絶えず刊本のありしや否やは不明なれども、百錬鈔、山槐記等の古き記錄に「摺本」の名の普通名詞として用ゐられたるによりて、十一世紀及び十二世紀頃、摺本の名は公知せられ、木版印刷によりて作られたる書籍の存在したるを證すべし、されど繪畫の木版を書籍に挿入せしや否やに至つては何等徵證とすべきものなし。

●浮世繪師の狂畫

日本の狂畫として最も古いのは覺猷僧正の鳥羽繪であるが、浮世繪師の狂畫として最も古いのは奥村政信の描いたものであらう、畫系曖昧の大津繪は別物として此處に云はない、英一蝶の畫譜中に、狂畫らしいもの二三見ゆるが、單に滑稽的動作を描いたのみで、眞の狂畫とは云へない、菱川師宣及び同派の繪師中には、小形赤本に滑稽的動作又は妖怪物とか擬人物とかを描いたものもあるが其他は何處までも眞面目に風俗世態を寫すといふにあつて、狂畫と稱すべきものはない、鳥居清信、宮川長春、西川祐信等も亦眞面目物のみである、好色本中にも狂体のものは一つもない、奥村政信の『女酒呑童子枕言葉』といふ繪本中には、と、茲に摸出せるが如きもの數葉ある、是等は稍、狂畫に近いものと云つて可からう、其後竹原春朝齋、宮川長喜等は、鳥羽繪に擬似したものを多く描き、松屋耳鳥齋は狂畫專門として特技を示し、近くは猩々曉齋なども多くの狂畫を描いた、葛飾北齋、溪齋英泉、十返舍一九、北尾政美たりし鍬形蕙齋などの畫にも、往々狂態のものがある、其筆力技量の點から云へば、猩々曉齋の狂畫が第一等であらう



●犬百人一首

予は十五ヶ年間の苦心で、異種の百人一首を現今百二十一種蒐集して居る、モー此外に珍なものは無いとなれば、考證と各一頁の見本を附けた一冊物を發行するツモリだが、名ばかり聞いてマダ手に入らぬものが二十種程ある、元祿版の『吉原百人一首』なども欲しい部分だ、さて百二十一種中に『犬百人一首』といふのがある、元祿五年版の「廣益書籍目錄」に「犬百人一首幽以庵作」と出て居るから、古い物には相違ないが、刊行の年代は記してない、版式は寛文頃のものらしい、古雅な風俗畫が百葉入つて居る、年代不詳前持主の奥書に「此犬百人一首は二百年以前の戲作なり骨董集の見世棚の條に此本を引もらせるは惜むべし、文圖岡田啓珍藏」とある、犬年の正月だから、これだけの事を記して置く

●珍書解題　一　（永田文庫）

關西第一の軟派藏書家たる有田有翠氏の藏本中にて世に多く見ないものを漸次紹介する

浮世繪本の蒐集は、我雅俗文庫自ら日本一を以て任じて居るのであるが、軟派文學の古書は、永田氏に及ばざること遠く、其十に對する一二にも足りない、さらばとて、徒らに羨むの愚を演ぜんよりは、寧ろ借覽して其解題を施し、以て自ら樂むの賢なるに若かない

▲昨日は今日の物語　大本二册　寛永十三年版

猥褻の事も多いが、兎も角面白い話を集めたものである、寄せ判といふ木字活版で印刷したもの、我自刊我書に「斯書作者と年代と共に逸す、されど天正文祿ころの事多く、寛永に止まれり、昔稱するおちの咄、今いふ落しばなしにて、當時の著なること疑ひなし、これを支那の笑林廣記等の諸書に比すれば早きも遲かるべからず、舊本活字本あり、未だ一見せず、予が得るもの誤謬頗る多し、刊年にして文政十二うしどし三月高屋種彦校と奧書せし寫本を得たり、依て後半はそれにて補正すと云、明治十五年十一月甫喜山景雄識」とあるが、右の原本と對照して見ると誤字が夥しくある、有名の藏書家たりし故甫喜山氏すら藏せざりしもの、考證該博の柳亭種彦も亦原本を知らざりしもの、之を珍中の珍とせなければなるまい、又文化十年版浪華一九著の「古新戲話」にも「昨日は今日の物語は上下二册の咄し本なり、友人何某上の卷ばかりを珍藏せり、尾州名古屋中村何某全部藏せるらゝを遥に求て年曆を知り透寫す、此本寛永十三丙子年正月とあり云々」と記してある、二三ケ月前に名古屋の其中堂書店に、落丁あり毀損ある二册、賣物ありと聞いたが、それは右の浪華一九が遙々借覽したといふ本であるらしい

▲しんとく丸　中本二册　寛文元年版

金平本の一種である、卷尾に「寛文元年辛巳九月吉日山本九兵衛板」と署す、十數葉の挿畫は菱川師宣の筆たること疑ひなきもの、例の豪壯な面貌と素樸な姿態は、師宣外の者には迚もかけない筆致である、これを見て思ひ浮かんだ、元祿の頃鳥居清信が獨特の役者繪を描き初めたといふのも、實は清信が金平本にある師宣の畫を摸倣したものに相違ない

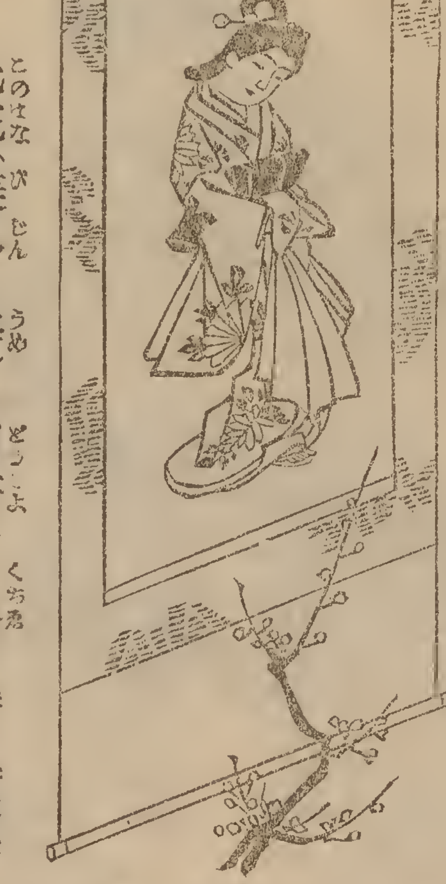
●勝川春章の錦百人一首

大阪毎日新聞の新年附錄

虚僞と俗惡の手段のみを以て販路の擴張を計りし大阪毎日新聞社が、今回勝川春章の錦百人一首を小形に翻刻して新年附錄とせしは、浮世繪熱心の我輩より云へば、大いに喜べき所なれども、其廣告文と實物とを對照し見て相變らざる同社の慣用式なるに呆れざるを得ず、「空前の大繪附錄、百三十五年前の古美術小倉百人一首かるた」と題して同附錄の廣告文を掲げ

繪畫は浮世繪の名家勝川春章が百首百樣に意匠を凝らしたる安永三年初春即ち百三十五年前の揮毫に係る艶麗無類の古書を寫眞にて縮め更に精版したる美術家の參考となるべきものなり、文字は當時の名筆渡邊寛氏の筆に成り、用紙は舶來三百斤紙を用ゐ彩色石版十度のもの云々

と記せり、これに付其誤謬と虚僞の點を擧げんに、先づ「文字は當時の名筆渡邊寛氏の筆に成り」とあれども、渡邊寛は同書の序文を書きしのみ、歌の文字は猨山周之(赤城と號す、大橋流の名書家猨山龍池の二男)の筆なり、此別を知らずして輕卒に斷言を下す所、笑ふべきの至りとす、次に「用紙は舶來三百斤紙」とあれど、實物は六七十斤の洋紙に馬糞紙の如きを裏打したるに過ぎず、又「彩色石版十度のもの」とあれども、赤、青、黃、黑、茶の五度印刷にて複色を出せるものなり其彩色も彼が云ふ如く、古美術の雅趣淸韻を味ふべきものには非ず、そは何故なりやと云ふに、抑も此「錦百人一首」の版本には四種あり、一は安永初版の彩色本(時價廿五圓內外)、二は其無彩色本(時價五圓內外)、三は後摺の彩色本(時價二圓內外)、四は其無彩色本なり



此花(美人と梅)は同書の口繪　勝川春章筆

大毎社は右四種中の無彩色墨摺本を寫眞にて縮寫し、其縮寫に石版屋の畫工が自己流に彩色を施したるものなるが故に、勝川春章が筆を下したる彩色とは全然別樣にして、見比ぶべくもなき野卑醜劣と化し、古美術の雅趣淸韻を躰現せざるのみか、寧ろ古名家を毀傷するの甚だしきものたり、同社が斯くの如く無責任且つ虚僞的の行爲に出るは、浮世繪界のためにも亦喜ばしからざる事なり

●春告鳥

▲浮世繪流行の兆　「大阪新報」も亦古名家の浮世繪モドキを石版彩色印刷に附して新年附錄とする由、又「神戸新聞」は「新年の繪附錄は戌年の春と題し、古人喜多川歌麿が心血を濺げる名畫にして、某大家の珍藏せられたるもの、艶麗花の如き五美人、新春の盛裝目も眩ゆき許り、門松祝ふ所、泰平の春に遊ぶ春意畫面に躍動して、麗天和風の面影を示し見者をして恍惚として醉はしむるものなり」と豫告せり、艶冶の嬌態を得意とせる歌麿の畫に對し、春意畫面に躍動すとは、適當の新評語なるべし

▲「此花」は木の花　難波津に咲くこのはなとは木の花(梅)の意なりしを、いつとなく此花と誤書するに至りしなる事は知れり、されど古實に拘泥せんよりは、此花といふ雅俗趣味ある字を採るに若かすとせしなり

▲Japans Kunst　前葉の「獨逸出版の日本美術書」と題せる記事中、原書名を獨逸字にて書せしを、印刷所に於て誤謬ある英字を挿入せしに付茲に訂正す

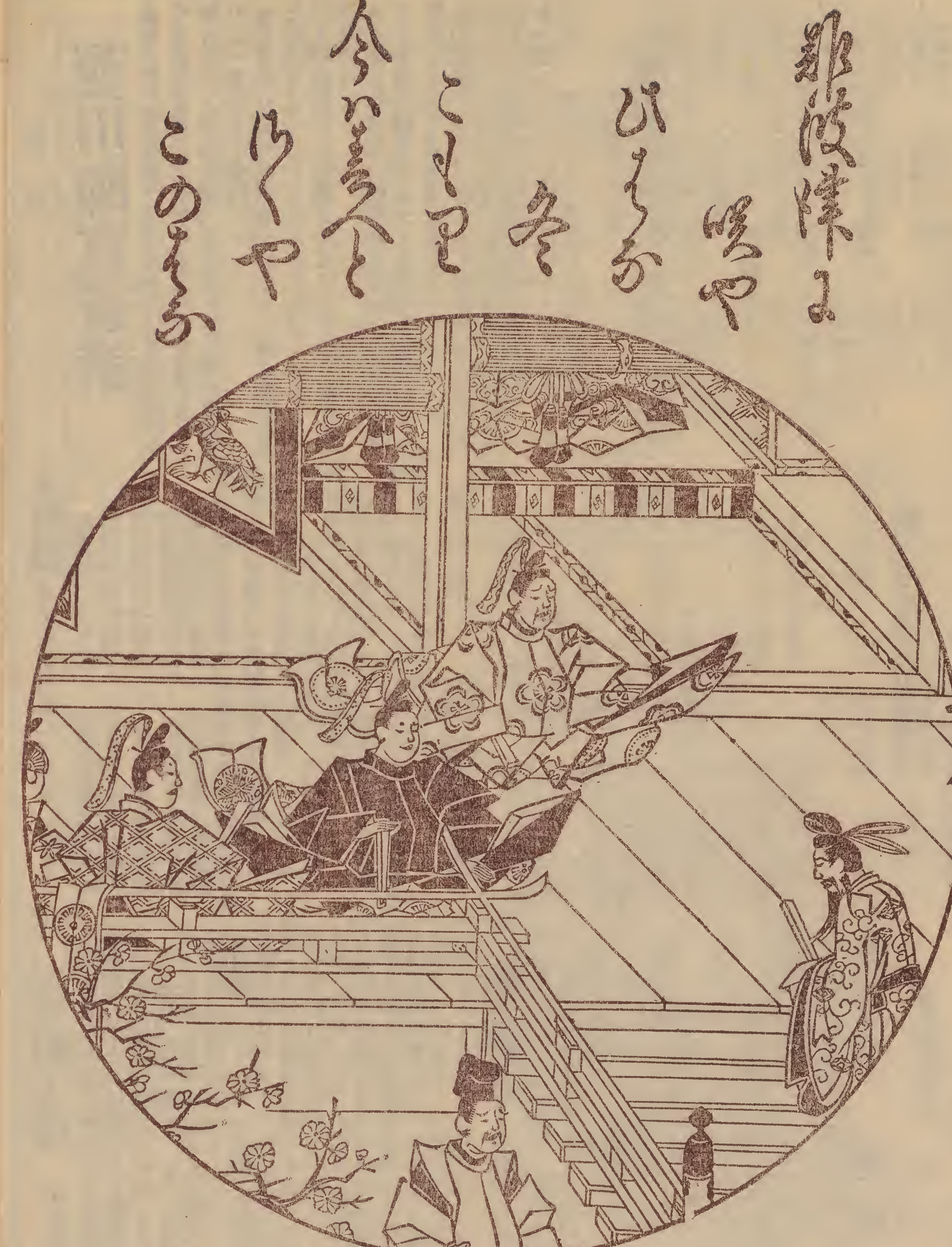
▲みだれ咲　本誌初刊は一月十五日の豫定なりしを繰上げて一日とし、忙中倉卒の編輯自らも滿足せざる記事多し

○此花(毎月一回發行)　定價一冊金十五錢
六冊前金八十五錢　十二冊同一圓六十錢
郵送料は當方にて支辨す
收支不償にて如何に損失あるも第十二號までは必ず繼續發行す
○郵便振替口座番號　大阪九三二三番
○廣告料　五號活字一行金五十錢の割
書籍繪畫等に關する廣告に限る

明治四十二年十二月廿五日印刷納本
明治四十三年一月一日發行
大阪市西區江戸堀南通四丁目十番邸
發行所　雅俗文庫　(電話西千八百六十一番)
編輯兼發行人　宮武外骨
印刷人　太田彌八



「此花」第一枝附錄（明治四十三年一月一日發行）



（仁德天皇難波高津宮）　王仁の參朝　（延寶三年版行畫分船）

裸体畫苑

二

田家

鈴木春信筆

（繪本千代の松）明和四年版



裸躰畫苑

西洋畫家が曲線美と號して不自然なるキヮドキ個所を描くは究竟するに卑怯なる肉感挑發的の手段にして所謂夷狄の蠻風に過ぎざるなりされば彼を愛するは寧ろ淫畫の露骨的なる所を愛するに若かず若し彼を美術の神聖と稱すべくんば淫畫は玄の叉玄たるものと云はざるを得ざるべし我輩之を採らず

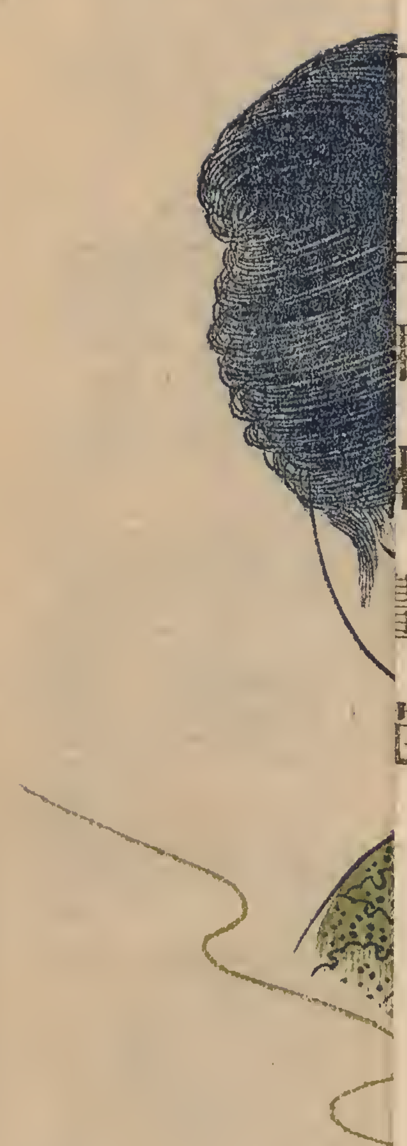
日本浮世繪師の描く所にして公然發刊せしものには未だ彼の如き醜陋なるものを見ずこれ我輩が日本精華の一として茲に之を蒐集する所以なり

明治四十二年十二月吉日



（仁德天皇難波高津宮）　王仁の參朝　（延寶三年版行畫分船）

雅從文庫序



裸体畫苑



三

入浴
西川祐信筆
（玉かつら）
享保十一年版

懲戒
歌川國貞筆
（新編金瓶梅）
天保九年版



裸体畫苑

二

難波津よ



（仁德天皇難波高津宮）　王仁の參朝　（延寶三年版行蘆分船）



妖狐

歌川豊國筆

（嫁入桐長持）

寛政七年版



妊婦

橋本周延筆

（懐妊寫眞鏡）

明治十三年版



（仁德天皇難波高津宮）　王仁の参朝　（延寶三年版行畫分船）



第二枚

明治四十三年二月一日發行



洪水

山本松谷筆

（風俗畫報）
明治二十九年刊



（仁德天皇難波高津宮）　王仁の參朝　（延寶三年版行蘆分船）

例言

△本誌は、萬國に於て、畫壇の精華と評されつゝある、日本浮世繪の研究と鼓吹を目的として、毎月一回發行するにあり

△されど俗耳に容り易きを主として、高尚の論説等は、當分これを避け、低きを先とす

△又浮世繪に關係なき事項を記すこともあり、これ浮世繪の趣味を解し得ざる人にも本誌を讀ましめ其間漸次に牽引して同化せしめんとする一種の手段たり

△浮世繪師個人に就ての專門的研究の結果は、其記事を本誌に登載せず、浮世繪鑑、浮世繪師全傳等の別著として發行す

△以上の主旨に反せざる研究家の投書は歡んで迎ふ

編輯發行者

●平民的と貴族的

浮世繪は時代の卑近な風俗を描いて、之を庶人に見せやうとした繪であるから、土佐派や狩野派の畫家の如き、貴族的のものとは相反して、之を平民的の繪畫と稱すべきものであつた、他諸派の繪畫は平民が容易に見ることをも得なかつたのであるが、浮世繪は五文か十文の錢を投ずれば、直ぐに我所有とすることが出來、又肉筆畫幅の類でも廉價で注文し得られたのであるから、平民間一般に愛玩されて居た、これに反して貴族は浮世繪を下賤のものとして大いに卑しんじたのである、それは威嚴を示すといふ階級的思想によつて、浮世繪師の無官無位なるを蔑視し、又其畫題とせる農工商人を蔑視して居たにも因るが、又一つには貴族に接近して居た他諸派の畫家が、自己の地位を持續せんがために、浮世繪師を侮蔑したなどにも原因するのである

斯くの如く平民的の繪畫であつた古い浮世繪が、今は其反對となつて、貴族でなければ買ひ得られないやうな事になつた、東京で浮世繪の高價なものを所有して居るのは、大概上流の人である、關西でも大阪の住友家とか、兵庫縣の服部知事とか、又川崎家といふやうな貴族富豪が多くの浮世繪を所有して居て、平民は廉價な浮世繪の版物を愛玩するに過ぎない、此點から云ふと、平民的の繪畫が、今は貴族的の繪畫となつたのである、これは浮世繪が西洋各國人の鑑賞を得たので、其價格が暴騰した結果であるが、又美術好尚心の發達、階級的思想の薄弱、古風俗研究の必要といふ科學の進歩に伴ふ點もあるであらう

然しながら、これは現存する古い浮世繪に就ての事であつて、當世の浮世繪はヤハリ平民的の繪畫である、日々各地に於て發行する多くの新聞紙上に、浮世繪入りの小説又は講談を載せないものはない、新刊の通俗的讀本も亦然りである

されば、今日は貴族も平民も共に浮世繪を愛玩し研究するのであつて、昔の如く一方に偏したものでは無い事になつた、只平民は高價の古い浮世繪を蒐集することが出來なくなつたに過ぎないのである、之を普及せしめて平民も共に古い浮世繪を愛玩し研究し得られるやうにするのは、古い浮世繪を翻刻して廉價に販賣する者があればよいのである、記者曩に浮世繪鑑第一卷『菱川師宣畫譜』を發行して、比較的高價に賣つて居るが、其後右の感が起つたので、可成廉價に販賣し得られるやう、近日再版の際には、用紙其他を節儉して前定價の半額位にてよき安値のものを拵へるツモリである、同第二卷の『奧村政信畫譜』も亦、貴族にも平民にも適するやう、上製と並製の二種に別つ筈である、尚追つては古い繪草紙の翻刻もやるが、これは既に先年來東京の酒井好古堂が實行して居るから、希望の人は同店にて購求せらるべしである

これでは論説だか廣告だか分らないことになつて了つたが、要するに、明治に於ける浮世繪は、時代の進歩のために、愛玩者も增加し研究者も增加したのであるから、現浮世繪師は一層の奮勵を以て現代人を滿足せしめると共に、後世明治の寫眞などでは到底研究し得られない機微の點を描寫したものを殘し、又昔の浮世繪師は、平民的のものが貴族的にもなつたのであるから、我時來れりとして、地下に於て大いに喜ぶべしである

あねさま



（茶番頓智論）

●浮世繪と日本醫學史

『此花』第一枝「浮世繪の眞價」中に記載されしが如く、時代風俗を描寫せしもの浮世繪以外に之あるなく、今にして是が研究に盡瘁さる單に趣味、美術を以て目す可からざるものあり、昨年富士川ドクトル等の主唱にて醫科大學内に開かれたる醫學書展覽會中に、陳列されたる珍書中、浮世繪師の手に成れる種々樣々の寓意畫を目擊した、勿論醫學の幼稚なる時代であるから、抱腹絶倒すべきものも少なくないが、痘瘡に對する當時の迷信を圖して傳へしもの〻如きは、頗る見る可きものが有つた、之は慥に我國醫學の沿革を知る唯一の材料たるものである、痘瘡のみでなく麻疹、腸窒扶斯(傷寒)等に關する當時の感想が皆分かる、疫病神として一般に傳へられて居たのは、誰も知る所なるが、病氣の原因を一種の蟲として說明せしもの〻中、肺結核を蟲の所爲として書き付けてある抔は、最も進むだ圖說である、肺結核が傳染病中に記載されたのは、ストリユンペル氏に始まる、然るに我國の浮世繪師が(勿論當時の蘭學者抔から聞き傳へたのでもあらうが)こんなことを畫ひてあると云ふことは、我國の醫學沿革を知るには見免すべからざる材料である、殊に其豫防法を圖にて示し、且つ節面白く當時の文學者の筆になれる義太夫の如きは振つたものである、今具體的に玆に紹介するを得ざるも、浮世繪研究の方針が科學的の部面にまで及び、種々なる範圍に度りて講究すれば有益なこともあらうと思ふ

病氣と迷信は今に始めぬ昔からの附物であるが、其迷信中にも一種の眞理が籠つて居て、取分け繪畫で現はしたものには云ふ可らざる味がある、自分も心懸て置て適當な材料を發見したら投寄を怠らぬが、江湖の諸彥も幸に浮世繪研究の機關雜誌を利用して、其利益をより弘くせられん事を望む

藻城外史

●風俗畫としての取捨論

今世(天保嘉永)の浮世繪師は專ら劇場の扮を旨とし、之に交ふるに當世の正風を以てし、又之に加ふるに己が意匠を用ひて畫く、故に近世の畫圖を以て眞の風俗とする時は、自から誤謬些からず、後世の人宜しくこれを辨別すべき也、今江戸の女の簪を長く畫くは意匠なり、又素袍大紋等を太だ大形に描くは劇場の扮なり、又衣服の小紋を描く素より細微なるが故に、人物に應じて之を細畫し縮すること能はざる等は、人物の大小を選ばず筆の及ぶ限り細書するにあり、又三五寸の人物にも眞の小紋形のまゝを畫くもあり、是れ止むことを得ざるものなり、又社杯の小紋等地黑に紋白のものも之を畫くには眞に反て地白に小紋を墨書するの類あり、筆勞を省くのみに非ず、是亦止むことを得ざるあり、見る人之を察して辨別すべし、又三十歲以下二十歲以上の婦は今世の風として必ず眉を剃ると雖も、圖畫には意匠を以て眉を描く、是無眉のときは畫面四十餘に見ゆ、故に意匠を以て此の如きなり、後世これに據て證するときは必ず誤らん、今畫工二三十歲の婦を畫く、處女と髷を異にし、齒を染るを圖するも眉あり、四十以上の者には眉を描かず、是大略のみ

又古畫に據て髻髮衣服の制は之を知ると雖も紅粉白粉の濃淡等に至りては之を詳かにし難し、是亦時々の沿革あり、(男女圖畫の髮形、眞よりも甚だ大なり、是れ大ならざれば美ならず、芝居の鬘は眞髮よりも大なるを寫す故もあり)畫圖を以て考証することは、古は人心も淳朴質素なる故に、畫圖も自ら其眞を寫す歟、今世の畫工は或は眞を寫し、其眞の美ならざるは意匠を以て之を畫く、又諺語に云ふ繪空事も交ることあり

されば畫圖は信じて證とすべき物なれども、取るべき所あり、捨つべき所あり、能く心を用ひて取捨せざるべからず

(守貞漫稿)



菱川師宣

延寶五年版(江戸雀)



杉村正高

元祿十年版(御成敗式目繪抄)



菱川師房

元祿十一年版(壺の碑)

浮世繪三幅對(一)

●古本の中に百圓札

此花記者が先月七日に某古本店で、文化十年の版本、式亭三馬の戲作『人間萬事虛誕計』といふ滑稽本を二十五錢で買つたが、表紙が酷く汚れて居るので、それを取換へやうとして表紙を引剝がして見ると、其表紙の間に現今通用の百圓紙幣が一枚挾まつて居た

前持主が何かの機會此紙幣を密かに隱して置いて、それを忘れたまゝ古本屋に賣つたのであらうが、前持主の誰であるかを調べて、返してやつたならば、嘸喜ぶであらうと思つたが、又更に考へて見ると、勿体なくも天下通用の大紙幣を、古本の間に挾んで置いて、それを忘れて了ふやうな迂濶者は、金の難有味を知らない奴に違ひない、そんな奴に返してやるのよりは、寧ろ貧民にでも施した方がよいと思ひ直して、大阪孤兒院へ寄附した、と云ふと實話のやうだが『人間萬事虛誕計』、これも虛の一つである

●浮世繪師の渾名

勝川春章は印章によつて「壺屋」と呼ばれ、春好は「小壺」、堤等琳は「聾等琳」、鳥居清長は「新場の淸長」、泉守一は本鄕一丁目に住し俗稱吉兵衞といふので「目吉」、歌川艶豐は醜面善心なので「鬼佛」と呼ばれた

●明和伎鑑（發賣禁止印本刻版差押）

太田南畝（蜀山人）の隨筆『半日閑話』明和六年の條に「十月、此節役者評判記を武鑑になぞらへて梓行す、明和伎鑑と名づく、公より是を禁ず、實は塗師方棟梁栗本兵庫の作、手代かはりて遠嶋せらるといふ」とあり

是は當時江戸三座と稱せられた中村座、市村座、森田座の役者及び狂言作者、囃子方、芝居茶屋等を武鑑に擬して著作出版したのを、幕府にては河原乞食の事を天下鎭撫の武鑑に擬して述作するなどは、公儀を畏れざる不屆至極の者なりとて、出版即時に禁止を命じ、作者淡海の三麿とは何者なるかと糺問し、實は栗本兵庫の著作なれども、手代何某主人に代つて其罪を受ける事になり、その何某が遠嶋流刑に處せられたと云ふ事である

此『明和伎鑑』といふのは半紙四ッ折の小形本であつて、總紙數七十四枚ある、畫者の名は署して無いが勝川春章らしい、其初葉表面に

猿若座

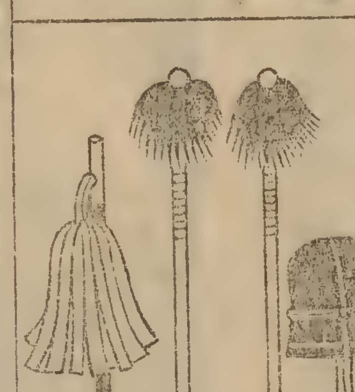
元祖勘三郎 号ス猿若ト
万治元戊戌年死

二代目 明石勘三郎 幼名明石
年十二歳ヨリ二十余年迄
万治元戊戌年ヨリ延宝二甲寅年迄の座元

三代目 中村勘三郎
延宝二甲寅年ヨリ同六戊午年迄五年の座元



芝居 さかい町
中村勘三郎雀童
内方
寛延三午年ヨリ大夫元



右の如く猿若座（中村座）主を掲出してある、明和六年十月に出版して同月直ちに絶版を命せられたのであるから、百三十四年を經た明治の今日まで存在して居る本は多くない

●上戸下戸の語原

酒好を上戸と云ひ、酒嫌ひを下戸と云ふことは誰でも知つて居るが、其語原を知らない人は多い、三五園月麿の『酒茶問答』には酒に就て該博らしい考証を多く並べてあるが、上戸下戸の説明はして無い、明和七年の版本、飯袋子の著『赤本智惠鑑』巻の五、飲酒家が大氣焰を吐く條に

博物志に王肅張衡馬均の三人伴ひ早朝に霧を冒して遠路に行きけるに一人は酒をのみ一人は飯をくひ一人は空腹なり空腹の者は悪氣に中りて死し飯をくひたる者は病ひ酒をのみたる者は健なり是酒の悪氣を避ると食よりも勝れる効なりといへり。されば感陽宮の鴈門高きこと空を凌ぎ霧深くして戸を閉る人酒をのまぬ人は濕にあたるゆへ昇ること叶はず依て下の戸を閉るを役とし酒をのむ人は上の戸を閉るを役とす故に下戸上戸の名茲に起る云々

と記してある、我輩も之を讀んで初めて知つた、尚同條に「酒は百藥の長たるを以て古は病を治するに酒を以てす故に醫者の醫は醫の字に酉の字をかく酉の字は古の酒といふ字なり云々」とあるが、ナルホド酌、酩、醉、醒、醴、釀などは皆「酉」即ち酒に從つて居る

●お軽が切腹

東京の『無名通信』といふ雜誌は、本年の初刊として「美人號」といふのを發行した、喜多川歌麿の美人畫を寫眞版として一葉掲出し、伊原青々園の美人と浮世繪と題する論、佐々醒雪の德川期の美人描寫論など、浮世繪に關する有益の事もあつたが、「勝川春章の美人」と題する佐竹永陵といへる人の一文は、實に笑ふべき杜撰のものである

先づ其冒頭に大阪の懷月堂云々とあるが、安度は勿論、度辰、度秀、其他懷月堂と號した繪師は悉く江戸人である　次に浮世繪を初めてかき、遊女の艶姿を初めて描いたのも勝川春章であると云ふなど、古い浮世繪を見た事の無い人らしい、又春章以前に助六といふ繪師があつたと記してあるが。慶長以來明治の今日まで助六といふ繪師はない、特に最も臍茶の至りなのは「西鶴の五人男の挿繪は春章の筆なり」といふ一事である、西鶴は貞享元祿頃、春章は明和安永頃であつて、六七十年時代が違ふ、遺稿の挿繪としても、西鶴に五人男といふ著作はない、春章が役者の似顔で好評を得た白浪五人男の聞違ひであらう誰でも多少の誤見は免れないが、是はあまりヒド過ぎる

●別嬪の針仕事（鈴木華村筆）

「お前はお店へ通はんせ、妾は家で針仕事」といふ如き粋筋ではなく、良家の處女と見るべき別嬪さん、此繪は今より十年ほど前の『報知新聞』に出たもので、鈴木華村氏の畫である、之を茲に掲げるのは、別に意味がある譯ではない、只古い浮世繪のみを出すと、誤解する人があるやうだから、明治の新しい所を配合して置くに過ぎないのである、或人が「此花の表紙にハイカラ髷の美人は不相應ぢやありませんか」と云つた、浮世繪といふものは明治前の古い美人繪のみを云ふのであると思つて居るらしい、時代の風俗を描寫するのが浮世繪であると云ふことを知らない人もあるらしい





●暗香疎影

▲岩佐又兵衛畫の版本　浮世繪の元祖と呼ばれて居る岩佐又兵衛勝以は、挿畫ある讀本又は繪本と稱すべきもの丶版行がマダ盛んでない天正、慶長、寛永の頃、肉筆物のみを描



いて居たのであるから、又兵衛の描いた繪入の版本は一冊もない（版行の大津繪は岩佐又兵衛の筆でないとの説がある確らしい）これを言換へれば、又兵衛は版下としての繪は一枚も描かなかつたのである

されど、後世の者が編纂した畫譜の類に、其筆蹟を摸刻して載せたのは四五種あるが、それは、いづれも卷中の二三葉に過ぎない、然るに予は全冊悉く又兵衛の筆畫に相違ないと見るべきものを昨秋發見した

それは『繪抄女歌仙』と題する女三十六歌仙である、大判紙形の大本であつて、三十六女の繪姿を十八枚の表裏に描いてあるもの、畫者の署名はなく、刊行の年代も不詳であるが、版式によつて判斷すると貞享頃のものらしい、三十六女の繪姿は、各々異つて居るが、いづれも又兵衛筆の特徴とすべき豐頰長頤の容姿を圓熟せる筆致で描いてあつて、又兵衛後の繪師が擬似すべからざる典雅の妙趣を具へて居る、察するに、これは何時の頃か、又兵衛の肉筆物たる女歌仙の繪卷物又は冊子に據つて摸刻したものであらう、尙浮世繪專門家の研究に供したい

▲鳥文齋榮之の門人　「浮世繪類考」その他浮世繪師系傳專門の書には、鳥文齋榮之の門人として榮理、榮昌、榮龜、榮笑、榮水の五名しか擧げてないが、書畫會の摺物及び筆畫の記名には、榮之の門人と署して、榮月、榮雅、榮京、榮節、榮凉、榮樹、榮甫、榮暉、榮尙、榮綾、榮波、榮鳥、さ丶はら女など數多ある、尙此外にも無いとは云へない

浮世繪師系傳取調べの餘地が多いことは、此一事を見ても明かである

▲歌川國芳と國貞　天保初年の頃、江戸で「よしが甍つて渡し場の邪魔になり」といふ狂句が喧傳された、これは一勇齋國芳（芳）が人氣を揚げたので、五渡亭國貞の妨害になるといふ意である、當時國貞は評判が好くなかつたと見へ、後年（天保十四年）國貞が二代目豐

あねさまたて



榮松齋長喜畫

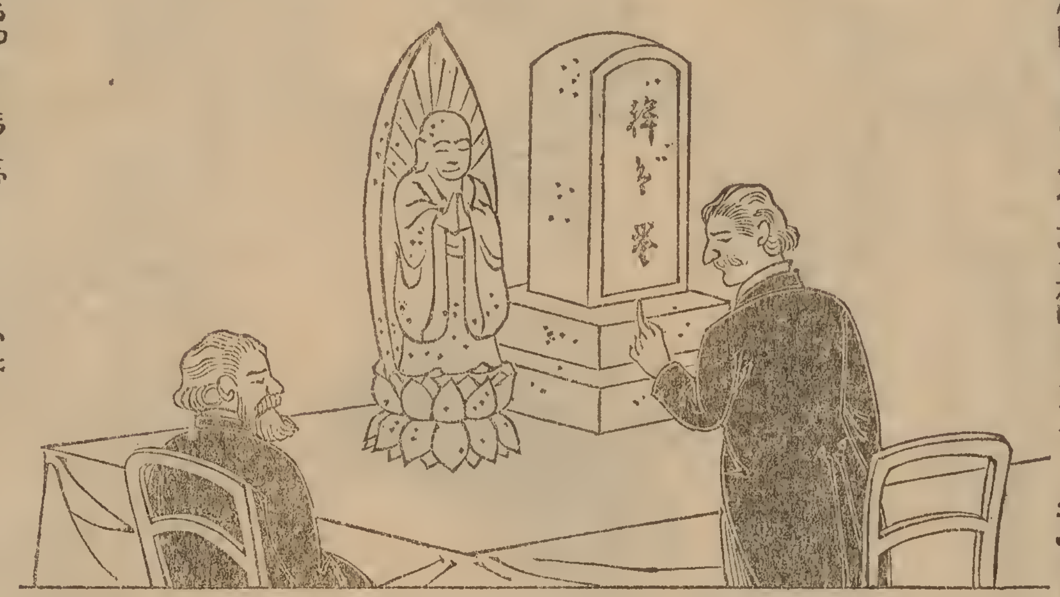
寛政十年版（間合俗物譬問答）

國を名乘つた時にも、既に國重が二代目豐國を名乘つた事もあるにとて「歌川を疑はしくも名乘り得て、二世の豐國、僞の豐國」と囃された、或は國芳贔負の者が國貞を罵つたのが原因かも知れないが、又國貞には非難されるだけの缺點があつたらしい



古美術品の輸出

近頃英佛地方へ、日本の古い墓碑や石地藏の類を輸出する者が多くあるので、各港の稅關が困つて居るとの話を聞いた、それは日本の關稅法中に「墓碑」とか「石地藏」とかいふ項目はないので、課稅上これ等を如何に取扱かつてよいかに當惑したとの事である。今や諸外國人は、日本の古美術骨董品を大概サラヒ盡したので、更に方向をかへて、石刻美術ともいふべき墓碑や石地藏の類を蒐集するに至つたのであらう、金になるからとは云へ、祖先の崇拜せし靈物を毛唐人に賣渡すのは、實に淺猿しい量見と云はねばならぬ



明治維新後、日本の古美術骨董品の類で、海外に輸出された數は少くないのである。特に古い浮世繪は、今我國に現存して居るのよりは、諸外國に輸出された方が、遙かに多數である、九鬼成海翁の論評中にも

浮世繪の名は、久しく歐米の藝苑に喧傳せられ、肉筆版畫共に熱心に賞玩せられ、苟くも鑒賞の眼を具ふる者は、競つて之を蒐集し、精密なる研究を加へ、既に之に關する幾多の著書を出し、其書壇も亦之に依て一種の暗示を提供せられ、延て多大の感動を惹起せるは、著明の事實なるに、其本國たる、我邦に於ては、却て甚だ重視せられず往年余輩の之が研究の要を唱へ、其優品の類に海外に散逸して本邦の者無に歸せんとするを慨きたる際の如き、殆ど之を傾聽する者なかりしが、其後歐米に於ける聲價の益々騰貴するに及んで、漸く其價値を認めらるゝに至れり云々（審美書院發行目錄）

とあるが如く、海外に輸出された數は少くない、九鬼翁の獎勵で、遲蒔ながら東京の博物館が、浮世繪の畫幅、繪草紙、繪本の類を集めて置かなければならぬと氣附いて、買收に着手した頃には、早逸品の海外に輸出し盡して、日本に存在しないのが多かつたのである

實に殘念至極の事ではないか

今日我國に如何程熱心の好者が多くあつても富の程度が相違して居るから、外國人相場で幾許でも買ふといふ事は、迚も出來ないのであるから、所有して居る人々が、再び取返しのつかぬ外國人などに賣渡すことの無いやう少し顧みて貰ひたいのである

外國出版の美術書美術雜誌等に、日本の浮世繪を多く掲出してある中に「林忠正」といふ印章があり〳〵と寫眞に現はれて居るのがある我輩は其印章を見る每に、故人林忠正其者の性格如何、境遇如何なりしかは知らないが、利のためにアタラ日本の古美術品を、外人の手に歸せしめた罪を責めたい感が起る



因みに云ふ、林忠正一人が浮世繪の輸出者では無い、東京にも大阪にも其他橫濱にも神戶にも京都にも、今尙專業者が多くあつて、日夜蚤取眼で品物の掘出しにあせつて居るそれ等の人々に告げる、新製の美術品ならば大いに輸出するもよいが、再び日本で產出することの出來ない古い浮世繪の輸出は、愛國の一端として止めて貰ひたい、今日如何に金錢上の利益を得ても、後世子孫に墓碑を賣られるやうな報ひを受けるかも知れないよ

有害のお伽草紙

教育の法式が如何に進歩したものであつても社會の訓化が惡ければ、完全な人物を造ることは出來ない、さりながら又「氏より育ち」と云ふ如く、家庭に於ける幼時の訓育が、人物を形成するに與かつて大なる力あることは非認されない、然らば、他を害する侵略心、私怨を報ずる復讐心などは、現代の道德上罪とすべき事とすれば、お伽草紙の桃太郎や猿蟹合戰の如きは、兒童に侵略心復讐心の非道德的觀念を注入する有害のものではないか



妖怪魑魅を談じて敎訓の一手段とせし昔時は兎も角、文運隆昌の今日、お伽草紙に於て、兒童に非科學的の談話を聞かしめる事は、單に德性上のみならず、理性の修養上にも幾分の妨害となるであらう

我輩はお伽草紙を非認する者ではない、只時代に相應するものを採れと云ふに過ぎない

別荘の貼札

人間は多くの財産を所有してさへ居れば、一生氣樂に暮らせると、誰でも思つて居るやうだが、それは貧乏人の偏見である、財産が多くあれば、勞働せずして衣食を得られるから身体は安逸であらうが、心に安逸のヒマは少しもない、火事がなければよい、盜賊が來なければよい、息子が放蕩者にならなければよいがと、我所有財産のために、日夜氣苦勞が絶えない、死後の心配までもする

播州須磨から舞子までの間に、財産家の別荘が多くある、其表面を見て「こんな立派な別荘に住んで居る人は、嘸氣樂であらう」と誰でも思ふだらうが、其門の柱に

此内かみつく犬有り用心

と貼紙した家が幾軒もある、人に噛みつくやうな惡犬ならば、殺すとか、放逐するとか、或は檻に入れて置くとか、相當の處分をしなければならぬものぢやないか、然るに此家に惡犬ありと廣告するのは何故であらう

これは云ふ迄もない、惡犬廣告の貼札は、物貰ひ除け、盜賊除けのお守りである、「ア、金持にはなりたくない」と、賢さうな或る貧乏人が云つた

うき川竹の身



貞享元年版「諸艶大鑑」中　永田文庫藏本

美人のお仙　江戸の評判娘

今でも東京の童謡に「向ふ横町のお稲荷さんへ、惜いけれども一錢あげて、ざつと拜んでお仙の茶屋へ、腰をかけたら、澁茶を出した云々」といふのがある、此お仙の茶屋と云ふのは、明和の昔、江戸谷中の笠森稲荷の前にあつたのであるが、お仙といふ娘が頗るの美人であつて、江戸中誰知らぬ者の無い評判を博したのである、蜀山人の記、明和六年の條に

谷中笠森稲荷地内水茶屋お仙(十八歳)美なりとて皆人見に行く、家名鍵屋五兵衛といふ、錦繪の一枚繪、或は繪草紙、双六讀賣等に出る、手拭に染る、飯田町中阪世繼稲荷開帳七日の時、人形にも作りて奉納す、明和五年五月堺町にて中嶋三甫藏が臺詞に云ふ「采女ヶ原に若紫、笠森稲荷に水茶屋お仙」と、是よりしてます〱評判あり、其秋七月中村松江お仙の狂言あり大當り　(半日閑話)



右の錦繪といふのは、當時の浮世繪名家鈴木春信が描いたのである、『浮世繪類考』に「鈴木春信は谷中笠森稲荷の茶屋鍵屋の娘お仙、淺草楊子店柳屋仁平次の娘お藤、淺草の茶屋蔦屋のお芳(之を當時江戸の三美人と稱す)の姿を錦繪にゑがきて出せしに、世人大に持て囃せり」とある、又福内鬼外(平賀源内)の作『神靈矢口の渡』といふ院本の中、船頭六藏がお船といふ女に戯れる言葉として「笠森のお仙とお前ほどなは何處にもござりませぬ」とある、尙此外當時、川柳狂歌狂詩などにも詠まれて居る、又明和六年版の『飴賣土平傳』にはお仙をほめた狂詩や漢文を載せ、神仙中のお仙なりとて、鈴木春信筆の右の如き繪をも入れてある

當時此美人を口説いた連中も多かつたが、お仙は浮いた心を出さず、許嫁の幕士倉地某の妻になつたといふ

浮世繪師の名乘

浮世繪師の名乘は師匠の名の一字を貰つて付けることになつて居るやうだ、菱川師宣の後に師房、師永、師重等あり、西川祐信の門弟に祐尹、祐代あり、勝川春章の門弟に春潮、春英、春朗、春好、春童等あるの類であるが歌川豐春の門弟たる初代歌川豐國以來は、師匠の名乘の頭字を附けるのは師匠に對する敬意を缺くものなりとの説が出て其頭字を取らない事になり、豐國の門弟は國の字を貰ひ、國貞の門弟は貞の字を貰ひ、貞秀の門弟は秀の字を貰ふといふことになつた

- 豐國
  - 國貞
  - 國重
  - 國芳
    - 芳虎
    - 芳艶
    - 芳年
      - 年方
      - 年英
      - 年恒
        - 恒富
      - 年延
      - 年峰
    - 芳盛
    - 芳幾
  - 國丸
  - 國政

此他の浮世繪師も亦大概は此類であるが、中には師匠の一字を師匠の如く下に付けたのもある、水野年方の門弟が清方、秀方、直方、靜方、輝方など名乘るの類である

是に據つて、古い浮世繪に知らない名乘のものがあつても、其畫風と名乘を見て「これは何某の門弟が描いたものであらう」といふ鑑定を附け得るの便がある　記者舊稿「渉書趣味」

●繪師と作者（上）

▲喜多川歌麿と十返舍一九　吉原年中行事は大ひに流行す、作者一九が云、吉原の事を委しく書きしゆへ行はれしといひければ、歌麿は左にあらず、繪組ゆへ行はれしなりと互に爭ひ、大ひに取合し事ありしとぞ、これを以て其氣質を察するに、大ひにほこりし人と見ゑたり　（浮世繪師系傳）

▲歌川豐國と式亭三馬　三馬が阿古義物語を著はすや、其插畫を豐國に依賴せしに、畫工の常習として、豐國は急に筆を執らず、永く之を放棄して顧みざりしかば、性急の三馬は忽ち憤怒し、彼れ日頃の交誼を忘るゝことの如きかと、自ら豐國を訪ね、大に之を詰責し、其百方陳謝するにも拘はらず、益々罵言を極めしかば、豐國も亦勃然として憤怒し、玆に一場の闘爭を惹起し、互に往來せざるに至りしが、書肆文龜堂の調停を以て、終に雙方和解するに至れり、文化七年文龜堂より發賣せる一對男時花歌川（全十二冊）には再び作者三馬と畫工豐國との名稱をば並著するを見るにいたりぬ　（戲曲小說通志）

▲勝川春亭と式亭三馬　文化八年四月十九日、兼て內談ありけるが一昨日より企て、勝川春亭と和睦す、但し山本長兵衛殿仲人也、和睦の會亭は通油町新道若菜屋といふ料理家此子細は、先年近江屋權九郎殿開板繪草紙合卷に、力競稚敵討全部八冊ものにて、趣向は牛子魔馱六關戶矢治郎といふ者の强力物語、ひたすら嬰童の觀を重とする作意なりしが、おもはずも其年の大當りにて、部數他の草紙に比しては當年の冠たり、尤も春亭畫圖拙くして、予が心にかなはざる所は、板下をも一直して、悉く摸寫を添削したる故、大當りとなりぬ、その翌年お竹大日（七冊物）をさかべ姫（八冊物）此二番五月前に著述、全部畢て春亭方へ賴み置きたるを、兎の角のとて捨置き僅一冊づゝ草稿のわたるを出精して認め、予が著述の滿尾したる方をば、後にまはしたる上、お竹は二年におくれ、をさかべは泉市より後に賣出したり、此已前春亭に詞をつがひ置きたる事あり、予が作は早く出來あれば、一日なりとも京傳作の前日開市になるやうにすべし、是れ則ち順道なり、若しおくれたらば以後春亭絕交なりといひ置きしが、果して予が方おくれて開板となりし故、再び春亭が方へ行かず（春亭はたて引なく恩を知らぬ男故なり）これに仍て山本長兵衛は仲人にて、今晚和睦、何事も不言、尤も當年まで三ヶ年餘絕交の間、草紙問屋兩三人も和睦のあつかひありしが、予用ゐず、三年を經て今和睦するは無據義理なり、山本長兵衛は富川房信がため吟雪の孫也　（式亭雜記）

●光線直射の現象

○「此花」初號十頁「光線屈折の實體寫眞」と題する說明に、光線屈折の理によれる全反射云々とあるが、彼の如き現象は、光線波及の現象たる事を知らざる舊時代云々とせなければなるまい、全反射とは彼の如き場合を云ふものではなからう、海上に於ける船舶又は熱地の平原に於ける樹木等の空氣鏡映などを云ふのである、（水晶の粉末、硝子の粉末、雲泡末、すりガラスの透映体となるなども、全反射の現象である）依つて說明することを左の如しとでも云はふかネ　東海口十生

小孔より暗室内に光線を射入せしむれば、小孔に相對する所の壁上に、室外の光景の倒象を生ず、是れ光線小孔に集ると雖も、屈折する事なく直射するが故に、外物の下端より發して室內に射入する所の光は其上方に、外物の上端より入る光は其下方に至り、各自に其點の影像を爲せばなり、穿孔若し大なる時は物体の各點より射入する光線各々符合する一點にのみ束聚せず、彼此紊亂し共に相重疊するを以て、著明の影像を生ずる事なし

窓美人


石川流宣筆
元祿（好色俗紫）


西川祐信筆
元文（繪本千代見草）


鏑木清方筆
明治（新小說）


竹原春泉齋筆
寛政（百人一笑）


勝川春潮筆
寛政（繪本榮家種）


歌川國芳筆
天保（逢悅彌誠）


北尾政演筆
安永（新版落噺）

窓から覗いて居る美人繪は此外にマダ多くあるが同じ樣だからこれだけにして置く　茶屋女郎屋の店格子は窓といへないから茲には一つも採つてない

●草雙紙（臭草紙とは後の駄洒落語）

今は「草雙紙」といへば、合巻の小説本のことであるが、昔はお伽草紙の行成表紙本、赤本黑本、青本、黃表紙、合巻物等を總稱したものであつて、延寶天和の頃には行成表紙本の『猿蟹物語』とか『桃太郎一代記』などを草雙紙と云ひ、其後赤本が出來、黑本其他が出來てそれをも「草雙紙」と云つたのである

然るに雙木園主人の『江戸時代戯曲小説通志』に「草雙紙」は最初「臭草紙」といつたのであるとの説を記してある

初め草雙紙の製本は。至つて粗末なるものにして。謂はゆる淺草紙と唱ふる。漉返の薄きものを二切りになし。之に灰墨を以て摺りしかば。手に把り繙く時は。一種の惡臭を放てり。されば臭草紙とは名けたり。其の草雙紙と書くは。後世の事にして。書肆等が臭の字を忌みて。草といふ字に改めしに因ると云へり

予思ふに「臭草紙」といふことは、漉返し紙などに摺つた黑本などから起つた名であつて、從前「草雙紙」といつたものを「今の草雙紙は臭雙紙である」との駄洒落が語原になつたのであらう、「草雙紙」といふことは初めて草雙紙の出來た延寶天和頃に起つた事に違ひない

其一證とすべき事が茲にある、前號にも略記した幽以庵作の『犬百人一首』は、元祿五年前の版本であつて、世間で「臭草紙」といつた黑本黃表紙本などのマダ出來ない前の戯作であるに、其十一葉目に『四書大全』『源氏抄』などの看板をかけた書肆店頭の圖を載せ、其上に「本屋安賣」と歌人の名らしく記して

賣からに草双紙でもやすければ　むべかふ人のうれしと云らむ

と「草双紙」の三字を本字で記してある、これで「草雙紙」と書くは後世（文化頃）の事といふのは誤謬であることが確であらう

●浮世繪師の狂歌戯號

浮世繪師であつて、狂歌をやつた者は多くあるが、其戯號の明かに傳つて居るのは

桑楊庵頭光……………一筆齋文調
一節千杖……………尙左堂俊滿
身輕折助……（山東京傳）北尾政演
筆の綾丸……………喜多川歌麿
三條茂佐彥……………長山孔寅
遲道……………丹羽桃溪

此外著作家兼浮世繪師の戀川春町は「酒の上不埒」と號し、曉鐘成は鹿の舎眞萩と號し、八嶋岳亭は堀川太郎と號し、いづれも著名の狂歌師であつた

●梅に鶯



源の龍武丸九歳の時。磯野善兵衛といふ者。三光を鳴く鶯をとりて籠に入れ。まいらせければ。心ざしはうれしけれども。さりながら人を故なく捕へて籠に入れ。それに謠などうたはせて聞くに異らず。たゞ鶯は竹の林。又は梅の枝などにとまりて。おのれと鳴くこそ面白けれ。籠の内に居て外を思ひなげくの聲を聞きて何かせんとて。磯野が去りて後。放ち給ひしとなり。此事を近衛關白信尋公聞き給ひて深く感じ給ひ。皇聞にも達したまひしとなり（かなめ艸）

刀の鞘に映して見る繪





こんなに扁平い變テコの繪ではあるが、下部の平丸形の所へ蠟塗の刀の鞘を立てゝ、一方から覗いて見ると、普通の女が雨中に傘をさして歩いて居るやうに映るのである、鞘の代りに黑い壜か又は光のあるブリッキ板を少し曲げて使つてもよろしい

ツマリ平面のものでなく、曲つた面に映したならば、普通の繪に見へるやう角度に合はして描いたものであるから、鞘の形に似たものであれば完全に映る

此原版畫は縱七寸横一尺ほどのものであるのを、寫眞で縮めて摸刻したのである

●草雙紙（臭草紙とは後の駄洒落語）

今は「草雙紙」といへば、合卷の小說本のことであるが、昔はお伽草紙の行成表紙本、赤本黑本、青本、黃表紙、合卷物等を總稱したものであつて、延寶天和の頃には行成表紙本の『猿蟹物語』とか『桃太郞一代記』などを草雙紙と云ひ、其後赤本が出來、黑本其他が出來てそれをも「草雙紙」と云つたのである

然るに雙木園主人の『江戸時代戯曲小說通志』に「草雙紙」は最初「臭草紙」といつたのであるとの說を記してある

初め草雙紙の製本は。至つて粗末なるものにして。謂はゆる淺草紙と唱ふる。漉返の薄きものを二切りになし。之に灰墨を以て摺りしかば。手に把り繙く時は。一種の惡臭を放てり。されば臭草紙とは名けたり。其の草雙紙と書くは。後世の事にして。書肆等が臭の字を忌みて。草といふ字に改めしに因ると云へり

予思ふに「臭草紙」といふことは、漉返し紙などに摺つた黑本などから起つた名であつて、從前「草雙紙」といつたものを「今の草雙紙は臭雙紙である」との駄洒落が語原になつたのであらう、「草雙紙」といふことは初めて草雙紙の出來た延寶天和頃に起つた語に過ぎない

其一證とすべき事が茲にある、前號にも略記した幽以庵作の『犬百人一首』は、元祿五年前の版本であつて、世間で「臭草紙」といつた黑本黃表紙本などのマダ出來ない前の戯作であるに、其十一葉目に『四書大全』『源氏抄』などの看板をかけた書肆店頭の圖を載せ、其上に「本屋安賣」と歌人の名らしく記して

賣からに草双紙でもやすければ
むべかふ人のうれしと云らむ

と「草双紙」の三字を本字で記してある、これで、「草雙紙」と書くは後世（文化頃）の事といふのは誤謬であることが確であらう

●浮世繪師の狂歌戯號

浮世繪師であつて、狂歌をやつた者は多くあるが、其戯號の明かに傳つて居るのは

桑楊庵頭光……………一筆齋文調
一節千杖……………尚左堂俊滿
身輕折助……（山東京傳）北尾政演
筆の綾丸……………喜多川歌麿
三條茂佐彦……………長山孔寅
遲道……………丹羽桃溪

此外著作家兼浮世繪師の戀川春町は「酒の上不埒」と號し、曉鐘成は鹿の舍眞萩と號し、八嶋岳亭は堀川太郞と號し、いづれも著名の狂歌師であつた

●梅に鶯



源の龍武丸九歳の時。磯野善兵衛といふ者。三光を鳴く鶯をとりて籠に入れ。まいらせければ。心ざしはうれしけれども。さりながら人を故なく捕へて籠に入れ。それに謠なぞうたはせて聞くに異らず。だゞ鶯は竹の林。又は梅の枝などにとまりて。おのれと鳴くこそ面白けれ。籠の内に居て外を思ひなげくの聲を聞きて何かせんとて。磯野が去りて後。放ち給ひしとなり。此事を近衛關白信尋公聞き給ひて深く感じ給ひ。皇聞にも達したまひしとなり　（かなめ艸）



鞘繪考

文政十三年（天保元年）喜多村信節の著『嬉遊笑覽』には「鞘畫といふ物も和蘭より渡りし物なり（中略）『寢惚文集』詠二鞘繪一詩に二八頭似二鉢瓠瓜一。背曲未伸著レ物斜。笑此一枝京土產。皆々映レ鞘更相誇。と、同文集は明和四年の撰なり、其頃珍らしかりしものと見へたり」とあり、又天保十一年山崎美成の著『三養雜記』に「鞘畫といふもの、昔はやりしことのあれど今はさることありしと知らぬ人もあり」と記し次に「藝苑日涉に池北偶談に曰く（原漢文）西洋にて製する所の玻璃等の器には奇巧なるもの多し、曾て其畫く所の人物を見る、之を視れば初めは頭目手足を辨せず、鏡を以て之を照らせば即ち眉目宛然姣好たり、鏡は鋭にして長さ卓筆の形の如し云々、按するに今西洋畫に初めは何狀たるを辨ぜざるものあり、光澤ある刀の鞘を以て之を照らせば、即ち人物鳥獸宛然生るが如きもの、俗に之を鞘繪といふと見ゑたり」とあり、又飯嶋虛心の著寫本『日本繪類考』には前記蜀山人の詩により「京土產とあれば先づ京都に行はれ後に江戸に來り流行せしものなるべし」とあり

以上の諸書に據ると、鞘繪は今より百三四十年前和蘭から初めて渡來したのであつて、天保頃には其流行の廢れて居た事が明かである、明和安永頃大に流行した際には、舶來畫のみでなく、日本の浮世繪師が遊女、役者、町娘などの姿を描いて盛んに賣出した、現青森縣弘前中學校長和久正辰氏は、此鞘繪の蒐集家であつて既に數十枚所有して居る

こんなに扁平い變テコの繪ではあるが、下部の平丸形の所へ蠟塗の刀の鞘を立てゝ、一方から覗いて見ると、其鞘に普通の女が雨中に傘をさして歩いて居るやうに映るのである、鞘の代りに黑い邊か又は光のあるブリッキ板を少し曲げて使つてもよろしい



ツマリ平面のものでなく、曲つた面に映したならば、普通の繪に見へるやう角度に合はして描いたものであるから、鞘の形に似たものであれば完全に映る

此原版畫は縱七寸横一尺ほどのものであるのを、寫眞で縮めて摸刻したのである

浮世繪師の名物畫 （二）

鳥居清信の市川團十郎
（古今四場居百人一首）

奥村政信の志道軒
（志道軒夢物語）



●浮世繪師辭世集（上）

△雛屋立圃　寛文九年歿享年七十一
月花の三句目を今知る世かな

△英一蝶　享保九年歿享年七十一
まぎらはす浮世の業の色どりも
ありとや月の薄墨の空

△羽川珍重　寶曆四年歿享年七十餘
たましひの散り際も今一葉かな

△勝川春章　寛政四年歿享年六十七
枯れゆくや今ぞいふことよしあしも

△岸文調　寛政八年享年歿七十
一聲はまるでは聞かぬ杜鵑
半分夢のあかつきの空

△歌川豐廣　文化九年歿享年四十九
死でゆく地獄の沙汰は兎も角も
あとの仕末は金次第なり

△歌川豐春　文化十一年歿享年七十八
花は根に名は櫻木に普賢像
のりの臺も妙法の聲

△歌川豐國　文政八年歿享年五十七
燒筆のまゝかおぼろの影法師

△柳川重信　天保三年歿享年五十五
投げ入れの水もとゝかず柳かな

△葛飾北齋　嘉永二年歿享年九十
人魂でゆく氣散じや夏の原

現今浮世繪師 （二）

武内桂舟
師門　月岡芳年
俗稱　武内鉎平
年齡　五十（文久元年生）
生地　江戸
現住　東京市麴町區四番町一番地

川崎巨泉
師門　中井芳瀧
俗稱　川崎末吉
年齡　三十四（明治十年生）
生地　和泉國堺市神明町東二町
現住　大阪市南區鰻谷西ノ丁卅三番地

榊原蕉園
師門　水野年方
俗稱　榊原百合子（女）
年齡　二十七（明治十七年生）
生地　大阪
現住　東京市下谷區根岸元金杉二六六番地

尾形月耕
師門　（無）
俗稱　田井正之助
年齡　五十二（安政六年生）
生地　江戸
現住　東京市京橋區築地二丁目三十六番地



●古版浮世繪の僞物

予が先年來別刊物紙上で、浮世繪皷吹の記事を連載したが爲め、漸次各地に同好者が增加して、今は少からぬ數になつて居るやうだ、隨つて予の許へ繪本の事について疑問照會なども多く來る、又此江戸繪を買入れたいと思ふが、眞僞如何、價額如何など、實物を添へて鑑定を乞ふと云ふのが、當市内は勿論、和歌山縣、奈良縣、遠くは東海、山陽、九州などからも多く來る、そして其實物を披けて見ると、十中の七八迄は僞物であつて、東京新版の歌麿美人三枚繪とか、大阪製の奥村政信長繪とか、名古屋製の北齋名所繪などが多いのである

抑も書畫骨董の類には、古今とも僞物が多くて眞物は少いものである、そして其僞物も年代を經ると眞物に見紛らふやうになるが、浮世繪の版行物は、明治二十年後、西洋人が高價に買ふやうになつて、其僞物が多く出來たのであるから、眞僞の鑑定は比較的容易く出來る、紙質、色合等を見れば一目瞭然たるものも多いのであるが、素人には其鑑定が附かないらしい

東京、大阪、又は名古屋等には浮世繪の僞物師が多くある、又僞物といふ本旨ではなく、翻刻新版物と明さまに銘を打つて賣出す東京の酒井好古堂の如きものもあるが、其翻刻新版物を買入れて、古版物らしく古色を附けて



賣る奸商が各地に多くある、大阪の山中某などは、僞物としての浮世繪を盛んに製造して居る、同家二階の一室には、書畫骨董類の僞物のみを澤山並べ置き、竈の煙出しの一部を其室に通ずるやうに仕掛け、晝夜煤煙イブシにかけて巧みに古物らしく仕立てゝ居る、又各地には翻刻物を松葉イブシにしたり、藥品をかけたりした上、長い竹べラでパチ〳〵たゝいて、紙を古物らしくボヤケさすなどの奸策を廻らす者もあると聞いた

右の次第であるから、此鳥居清信の漆繪は眞物に違ひなからうとか、此鈴木春信の細繪は僞物であるまいなど、自分鑑定で以て買被らないやうにしなさい、予は同好者諸氏に忠告をする、自分で眞僞の鑑定をして、毫も間違ひの無いやうにならない間は、古版の高價な物は一切買はない事にするがよろしい、菱川師宣の版行墨繪は時價一枚三十圓以上と聞いて居るのに、それが五圓で買へるとは掘出物であるなど慾心を起すのは、詐欺にかゝる基であると知りたまへ

翻刻の新版物でも、巧みに出來て居るのは、古い原版物と寸毫の違ひもないのであるから愛玩するとか、研究するとか云ふことには、少しの支障もないのである、イヤ啻に支障が無いのみならず、新版物の方が寧ろ手汚れなどが無くて奇麗でよいと云つても構はない、故らに高價の古版物を珍重がつて、これは天下に少い品であるなど誇るのみでは、所謂玩物喪志の譏りを免れない

●禁令の餘波



今は諸新聞雜誌上に藝妓や娼妓の寫眞を掲出して何屋の何某と明記してあるが、昔は似顏繪として其名を署するのは、風教上に害があるとて禁止された時代もあつた、「江戸會誌」に「寛政の初めまでは藝者の事未だ法令にあらはれず、同八年八月十四日、草雙紙錦繪の事に付き申渡しの内に、以來町方女藝者其外茶屋女等の名前を顯はし候義は勿論、繪樣などに認め候類の義も有之候はゞ當人は勿論、名主共迄も急度罪科可申付候云々」とある如く、其名前を顯はすのは、遊蕩奬勵の弊を生ずる有害事と認めたからである

享和二年の版本、歌川豐國の著畫たる『繪本時世粧』には茶屋女、矢場女、藝妓娼妓の姿繪を彩色入りで多く描いてあるが、其色版中に、上に抄錄せるが如く、短冊形の白地がある、これは版行當時には右の禁令が無かつたので、各々名前を記入してあつたが、後摺の時禁令に基いて削除したのであらう

一冊の繪本、一枚の錦繪でも、それを綿密に見たならば、啻に時代の風俗を察し得るのみならず、種々の研究資料にもなるものであると知りたまへ

●夜景の奇拔畫

畫法に晝景といひ夜景といふことはあるが、漢畫は勿論、日本畫にも其晝夜の區別のハッキリせぬのが多い、月を描いてあるから夜景だらうとか、行燈があるから夜のつもりだらうとか、見る人が判斷しなければならぬやうなのが少くない、浮世繪師の描く所も亦其晝夜の區別が甚だ不明瞭である

然るに、寛政十二年(百十一年前)紀州和歌山の書肆山崎屋嘉兵衞版行の『膽太郎』といふ繪本には、浪華の環玉江といふ浮世繪師の繪を數十葉挿入してあるが、其中に遊客が茶屋女を連れて夜間散歩する圖が二葉あつて、いづれも左の如く夜景たることを明瞭に示し、燈火の達せない個所は黑々の影畫にしてある



これは洒落のつもりで描いたのであらうが、近世紀の西洋畫に類した妙趣がある

今は西洋畫に倣つて、晝夜の區別をハッキリ描く浮世繪師も多いが、百年前に斯様なものがあつたのは奇拔と云はねばならぬ

●版畫考（二）

故小島蓬城

版畫考は數年前物故したる小島蓬城といふ人の著はしたるところ、僕が助力したるは事實なれど、校訂とまでは屆き居らず、餘白もあらば右の旨と故人の名だけドコにか御出し被下度候　幸田露伴

（三）慶長の出版

正平十三年に版行したる論語の跋に「堺浦道祐居士重新命工鏤梓」とあれば、其前該書の刊本は世に行はれしなり。尤も鎌倉、室町兩將軍の時代にありては、所在の豪族雄を一方に張る者、境內永く無事なるに及んで其手を文事に染めし者なきにあらず、大內義隆が命じて刻せしめし山口版の如き卽ち之なり。

書畫を愛せしむるは强ゆべきにあらず、必ず嗜好に訴ふるなり、故に之を弘く公行して益々嗜好を增進し、嗜好增進して、愈々之が公行を促す。時代の要求は漸く多大に且つ複雜にならんとせり。此に於いてか插畫入書籍の刊行を見る。插畫入書籍は何時の頃より刊行せられしにか、傳ふる所に依れば應永年中已に之ありしといふ。然れども今に於いて容く其書を見るを得ず、現在屢々吾人の眼に觸るる所のもの、之を慶長版となす。

慶長には德川家康命じて活字を造らしめ、七書其他多くの書を刊行せしめしが、此時に於いては已に一般讀書力は增進したり。所謂官版の外、多くの刊行を促して已まず。知人が藏する慶長版插畫入伊勢物語の跋に曰く「伊勢物語新刊（中略）更圖畫卷之趣分爲上下云々」と、然れば該書は從來ありし所の刊本に世に行はれつゝありし畫卷物を加へて、更に畫入本として翻刻したるものなること明なりと雖も「更に畫卷之趣を圖し云々」と輕く言ひ去りし所、凡そ畫入本なるものが此時の新發明にはあらざるべき書振なり。慶長版に就いて見る注意すべき現象は、其畫の直線と陰影とに多少西洋畫の影響を受け居らざるやにありとす。蓋し個國其他の外人の往來したりしより、畫人或は彼に負ふものありしならん。

（四）浮世繪

繪畫が日本に發達したるは最も古きことなりとす。大和國法隆寺なる金色堂の壁畫の如き筆力の雄渾後世の及ぶところにあらず、平安の朝になりては、清涼殿の艮の妻戸に怪物を描きしこと枕草紙に見ゆ、貴族の家庭に長恨歌等の畫卷物が珍重され「亭子院の書かせたまひて云々」と源氏物語にも記さる。亭子院は宇多天皇、而して巨勢金岡は宇多天皇の朝に事へし人なれば「いみじき畫師」と、源氏にいへるは金岡一輩の人にして、此時盛に畫卷物を作りしにや。

後堀川天皇の御宇に藤原信實醇粹の大和風を創始し、其末孫土佐守經隆土佐派の開祖となりてより、行光、光重、廣周相繼ぎ、光信に至つて其業を大成したりしが、光信の門人元信別に狩野の一派を起し、是より盛に日本畫の神髓を發揮せり。而して浮世繪なるものも亦此間に胚胎して成りしものといはざるべからず。

抑も日本畫は唐畫に對して起りしものたるや言ふを待たずと雖、畫人多くは俸祿に衣食したれば、畫風も自然上流の嗜好に局しぬ。此時に當つて民間の讀書力進み、美術心も亦增進す、浮世繪一派の起る、固より其所なりと言はざるべからず、浮世繪最初の大家を岩佐又兵衛となす、又兵衛は足利氏の末の人、畫風は狩野、手訣は永德以前の其に似たりといへり、當時若し世話小說の行はるゝこと王朝時代の如くならんには、或は是等の人の筆に成りたる插畫入本の刊行を見しならんに、戰亂の餘、人情其所に赴かざりしは惜むべきことなりとす。又兵衛の勢力は德川氏の初年、明曆萬治までも殘りしが、寬文に菱川師宣出るに及び、浮世繪に向つて一大革新を來すと共に、繪畫版行に對して一新紀元を開くに至れり。

古畫應用の新年繪葉書

庚戌の新年を祝して意匠繪葉書を寄せられた人々は少くなかつたが、その中で、好古癖の予が最も面白しと感じたのは、古畫應用の意匠繪葉書である、其一は永田有翠氏が安永七年版の『江戸傾城評判記』中より暦形の一葉を採つて「安永七年いぬの新板傾城評判所、大妓小妓凡二千四十六人、大通の方云々」などあるもの、其二は川崎巨泉氏が、延享二年の版本『江戸名所咄』中より人家の軒下に犬が臥し、途上には年始客が通行する圖を採つて古式に印刷したもの、其三は軟派書肆だるまやが、寬文五年の版本『京雀』、寶永二年の版本『花洛細見圖』及び西鶴物らしき『世間義理櫻』と柳亭種彥の『用捨箱』等に據つた下の如きものである



店の主人と客及び僕は「京雀」　女は「世間義理櫻」

七五三と犬は「花洛細見圖」　書架と文字は「用捨箱」

珍書解題　二　（永田文庫）

▲竹齋物語　大本二冊　刊行年代不詳

此書は竹齋といふ籔醫者が睨みの助といふ僕をつれて廻國し、旅中種々の滑稽を演じたといふ小說である、版行の年代は記してない、「骨董集」には、寬永十一十二十三年の頃に作りたるものなるべしとあり、又「近古小說解題」にも、元和四年三月以後寬永十四年以前の作と見るべし、刊行の年代詳ならざれど、寬永正保頃と思はるとあり、又古樵人亞といふ人の手書にも、寬永中の刊行なるべしとあるが、延寶七年の版本「杉楊子」の序文には

先達て世に廣めし一休噺、竹齋物語の兩編は誰人か作れる、其文才の巧なる所には、東坡山谷だにも小指の爪を嚙み、我朝の菅亟相も松梅の下に遊隱れ給はん程の筆作なり云々

とあり、延寶七年に「先達て」といふのは寬永頃よりも後ではあるまいか、兎に角古い版本であつて、古雅な插畫が多く入つて居る（天和三年に改刻した本には菱川師宣が畫をかいてある）此書の作者は烏丸光廣だといひ、又齋藤德元だといふ說もあるが、いづれも確實でないらしい

▲好色俗むらさき　中本五冊　元祿十一年版

石川流宣の自畫作である、流宣は著述家であるが、又菱川師宣の門弟となつて浮世繪をも巧に描いた、石川流宣と號したのは菱川師宣の宣を貰つたのである、此人には好色江戸紫、枝珊瑚樹、好色日本鹿子、武道繼穗の梅、其外數種の著述もあるが、此俗紫は日本鹿子に次での傑作らしい

▲小袖曾我　小本一冊　寬永二十年版

天下無双薩摩太夫以正本開之と卷頭に大書してある、記者硏究外の事だから、斷言はできないが、六段本の元祖であらうと思ふ、其插畫は實に素朴なものであつて、所々に丹綠の筆彩色を加へてある

▲可笑穴物語辯談　中本一冊　寶曆十一年版

鷺羅坊主と渾名された志道軒無一の戲作である、同人の「元無草」と同じく、佛教の奥義を男女の情事に擬して說いた教訓本である、版式は瓦版のやうな粗末なものであるから、今日まで存在して居る本は實に少い

誠恐謹謝

本誌初刊の卷首に　今上陛下の御筆と題して掲げ奉りしものは、當地の某家に十數年來　陛下の御宸筆として傳はりし石版金地の一額あり、奉揭者は勿論拜誦者も亦御宸筆と堅く信じ居りしものを、寫眞に撮りて複製せしものなりしに、去る二〇〇十日の午後九時、突然當府警察部より召喚ありて「只今内務省より電報あり、此花の卷首に揭げある御筆と題するものは御筆にあらずと宮内省より通知ありしに付、取消を命ずべし」とのことなり、されば既に頒布濟のものは詮方なけれど、殘本には訂正を加ふべし云々」との口達あり、誠に恐懼に堪ゑざる次第なり、淺學の野人其辭を知らず、只々茲に謹で深く其輕忽の罪を謝するのみ

因て右御「筆」とあるを御「製」と訂正し、目錄も亦同じく御「製」と訂正…を望む

製　製

春告鳥

▲新聞の繪附錄　浮世繪流行の兆と題して前號に略記した『〇〇〇〇大阪新報』の新年繪附錄は、北野恒富氏が古畫に擬して描いたものであるが、其圖柄、其印刷、共に申分のない奇麗なものであつた、『大阪朝日新聞』の繪附錄などよりは數等優つた上出來である、次に其豫告文によつて、春意畫面に躍動する五美人であらうと豫期して居た『〇〇〇〇神戸新聞』の繪附錄は、實に不出來此上もないイヤなものであつた、啻に印刷の拙なのみでなく、繪も何人の筆であるか分らないやうなものである、喜多川歌麿の五美人とはあるが、果して摸寫の如きものであるならば、原畫は確かに僞筆なりと斷言してよい

右の外、『下關實業日報』には、葛飾北齋筆の雪中美人を新年の繪附錄として出したさうであるが、それは見なかつた

▲カレンダーの繪　京都市高倉通夷川北へ入る印刷所清〇〇〇〇文堂活版所が、年玉として顧客に贈つたカレンダーは十二ヶ月を十二枚の繪葉書にしたものであるが、其一月の部には奧〇〇〇〇村政信筆の彈琴美人を淡彩色の高雅な繪葉書にしてある、聞く所によると、清文堂主人大槻三八郎氏は浮世繪の好者であるさうな

▲國書刊行會の續刊　世に流布現存の稀な版本、古寫本、草稿本等數百種を活版印刷に附して七十二冊の全部を大成した國書刊行會は、今回其二期として更に會員を募集し、同じく珍籍奇著を刊行する筈である、今其書目を見るに、近世文藝叢書として、元祿前後の小說、名所記、笑話、及び近世の俚謠、川柳風俗等に關するものを集錄する由であるが、其中には浮世繪の挿畫あるものが少くない、原本は一冊何圓とか何十圓とか云ふ高價のものので、シカモ容易に獲られない珍本のみであるが、それを活版本として廉價に發賣するのであるから、同好者は東京市京橋區新榮町五丁目の國書刊行會に申込んで、其趣意書を一覽の上、本月中に加盟せられたがよい

▲白粉廣告の風俗繪　近頃諸新聞紙上の廣告欄内に、文化十年の版本『都風俗化粧傳』を引用して、浮世繪師速水春曉齋の描いた美人を挿畫としたものがある、これも浮世繪流行の一兆と見ずばなるまい

●『此花』の培養期

本誌の編輯は毎月五日に着手して二十日までに印刷終了とする豫定であるから、挿畫を要する投書は十日前に寄送せられたい、其後のものは翌々月發行の紙上に載せる事になる

〇此花（毎月一回發行）定價一冊金十五錢　六冊前金八十五錢　十冊同一圓三十五錢
郵送料は當方にて支辨す
收支不償にて如何に損失あるも第十二號までは必ず繼續發行す
〇郵便振替口座番號　大阪九三一三番
〇廣告料　五號活字一行金五十錢の割　書籍繪畫等に關する廣告に限る

明治四十三年二月一日發行
大阪市西區江戸堀南通四丁目十番邸
發行所　雅俗文庫（電話西千八百六十一番）
編輯兼發行人　宮武外骨
印刷人　太田彌八

誠恐謹謝

本誌初刊の卷首に今上陛下の御筆と題して掲げ奉りしものは、當地の某家に十數年來陛下の御宸筆として傳はりし石版金地の一額あり、奉掲者は勿論拜誦者も亦御宸筆と堅く信じ居りしものを、寫眞に撮りて複製せしものなりしに、去る二十日の午後九時、突然當府警察部より召喚ありて「只今内務省より電報あり、此花の卷首に掲げある御筆と題するものは御筆にあらずと宮内省より通知ありしに付、取消を命ずべしとのことなり、されば既に頒布濟のものは詮方なけれど、殘本には訂正を加ふべし云々」との口達あり、誠に恐懼に堪へざる次第なり、淺學の野人其辭を知らず、只々茲に謹で深く其輕忽の罪を謝するのみ

因て右御「筆」とあるを御「製」と訂正し、目錄も亦同じく御「製」と訂正せられんことを望む

●春告鳥

▲新聞の繪附錄　浮世繪流行の兆と題して前號に略記した『大阪新報』の新年繪附錄は、北野恒富氏が古畫に擬して描いたものであるが、其圖柄、其印刷、共に申分のない奇麗なものであつた、『大阪朝日新聞』の繪附錄などよりは數等優つた上出來である、次に其豫告文によつて、春意畫面に躍動する五美人であらうと豫期して居た『神戸新聞』の繪附錄は、實に不出來此上もないイヤなものであつた、啻に印刷の拙なのみでなく、繪も何人の筆であるか分らないやうなものである、喜多川歌麿の五美人とはあるが、果して摸寫の如きものであるならば、原畫は確かに僞筆なりと斷言してよい

右の外、『下關實業日報』には、葛飾北齋筆の雪中美人を新年の繪附錄として出したさうであるが、それは見なかつた

▲カレンダーの繪　京都市高倉通夷川北へ入る印刷所清文堂活版所が、年玉として顧客に贈つたカレンダーは十二ケ月を十二枚の繪葉書にしたものであるが、其一月の部には奧村政信筆の彈琴美人を淡彩色の高雅な繪葉書にしてある、聞く所によると、清文堂主人大槻三八郎氏は浮世繪の好者であるさうな

▲國書刊行會の續刊　世に流布現存の稀な版本、古寫本、草稿本等數百種を活版印刷に附して七十二冊の全部を大成した國書刊行會は、今回其二期として更に會員を募集し、同じく珍籍奇著を刊行する筈である、今其書目を見るに、近世文藝叢書として、元祿前後の小說、名所記、笑話、及び近世の俚謠、川柳風俗等に關するものを集錄する由であるが、其中には浮世繪の挿畫あるものが少くないので、シカモ容易に獲られない珍本のみであるが、それを活版本として廉價に發賣するのであるから、同好者は東京市京橋區新榮町五丁目の國書刊行會に申込んで、其趣意書を一覽の上、本月中に加盟せられたがよい

▲白粉廣告の風俗繪　近頃諸新聞紙上の廣告欄内に、文化十年の版本『都風俗化粧傳』を引用して、浮世繪師速水春曉齋の描いた美人を挿畫としたものがある、これも浮世繪流行の一兆と見ずばなるまい

●『此花』の培養期

本誌の編輯は毎月五日に着手して二十日までに印刷終了とする豫定であるから、挿畫を要する投書は十日前に寄送せられたい、其後のものは翌々月發行の紙上に載せる事になる

＊　＊　＊　＊　＊

○此花（毎月一回發行）定價一冊金十五錢　六冊前金八十五錢　十冊同一圓三十五錢
郵送料は當方にて支辨す
收支不償にて如何に損失あるも第十二號までは必ず繼續發行す

○郵便振替口座番號　大阪九三二三番

○廣告料　五號活字一行金五十錢の割　書籍繪畫等に關する廣告に限る

明治四十三年二月一日發行

大阪市西區江戸堀南通四丁目十番邸　發行所　雅俗文庫（電話西千八百六十一番）

編輯兼發行人　宮武外骨

印刷人　太田彌八



明治四十二年三月一日發行

合法ケ辻

昔は攝津國東生郡今宮村、今は大阪市南區逢阪下之町と稱し、日夜電車人馬の往復頻繁なるが、百三十年前には咬へ煙管の田甫戻り



竹原春朝齋畫　安永七年版　浪花のながめ

例言

△本誌は、萬國に於て、畫壇の精華と評されつゝある、日本浮世繪の研究と鼓吹とを目的として、毎月一回發行するにあり

△されど俗耳に容り易きを主として、高尚の論説等は、當分これを避け、低きを先とす

△又浮世繪に關係なき事項を記すこともあり、これ浮世繪の趣味を解し得ざる人にも本誌を讀ましめ其間漸次に牽引して同化せしめんとする一種の手段たり

△浮世繪師個人に就ての專門的研究の結果は、其記事を本誌に登載せず、浮世繪鑑、浮世繪師全傳等の別著として發行す

△以上の主旨に反せざる研究家の投書は歡んで迎ふ

編輯發行者

▲此花第三枝總目録

此花　第三枝

明治四十三年三月一日發行

●美術品としての外

山水花鳥又は神仙佛像などを描ける諸派の畫は、只美術品としての價値しかない、青緑山水が如何に奇麗であつても、地誌の參考にはならない、牡丹に唐獅子、竹に虎の畫が實物の如く見へても、動植物學者を益することはない、稲荷大明神や十六羅漢が生きて居るやうでも、觀世音菩薩や不動明王の像が、物言ふ如くであつても、歴史上の資料には少しもならない、是等は只其筆力の雄健を愛するとか、畫匠の氣韻を賞するとか云ふだけに過ぎない、之を換言すれば、美術品としての外には、何等得る所の無いものである

これに反して、其繪畫の一たる浮世繪は、啻に美術品として、愛重するに足るのみでなく時代の風俗を察し得るは勿論、諸種科學の資料となり、百般工藝の參考となり、世態人事の訓戒となり、或は記憶の捷徑となるなど、各方面に向つて多大の利益を供給するものである、即ち美術品としての外、大なる價値を有するものである

今茲に其實例の五六を擧げて云へば、浮世繪師の描いた名所繪圖などは、啻に旅人の風俗祭祀の古式などを察し得るのみでなく、地理沿革を知るべき好材料となり、又絶版の繪畫は勿論、藍摺繪、墨摺繪などを見ては、政治上の寛嚴を察し得べく、小兒の玩具に過ぎなかつたお伽繪本の類でも、今の教育家はそれを採つて育兒の資に供して居る、お伽文學家の小波山人、尾上新兵衞兩氏の如きは、古いお伽繪本を蒐集して熱心に研究して居るさうである、又古來の藥種製法諸病療法などの繪本は、今の醫師が參考として益する所が少くない、ドクトル富士川游氏などは、常に浮世繪を渉獵して種々の材料を得て居る、『近世職人盡』中にある醫者の繪一枚に就ても『日本醫史』の好資料として採用し面白き解説をも附けてある



衣裳摸樣の繪本又は美人畫などの類は、今の工藝家が常に應用して居る、假令ば織物業者の如きは「さて此次ぎには如何なる摸樣又は色彩のものを出せば流行するであらうか」といふ事に付、古來の變遷隆替を察して、元祿摸樣の次ぎには桃山風が流行したとか、蝦茶色の次ぎには洗ひ朱が時好に投じたとか云ふ事を、古來の浮世繪に依つて研究した結果を利用して居るのである

演藝家は、金平本、八文字屋本、其他歌舞伎繪を見て參考とし、小説家は、好色本、青本合卷物等の繪によつて材料を得ることが少くない、此外歴史畫、歌俳畫、物語本、滑稽本遊廓本等に就ても、各專門業者はそれ〳〵應用の利益を得て居る、尚又浮世繪本の類は、古來の歴史上、記録上に載つて居ない社會の上層中層下層の風俗を洩れなく描いてあるものであるから、各時代の好尚を察し闇黒面を研究せんとする人などは、是非浮世繪本を見なければならぬのである

浮世繪は美術品としての外、斯くの如く多大の利益あるものであるに、今日之を愛重する者が少いのは、實に嘆ずべき事である、其美術品としての價格に至つても、今は他諸派の繪畫よりも數等上位にあるのである、卑近な一例を云へば、雪舟や探幽などの畫は高價に賣買されても、それは天下一品といふべき肉筆のみであるが、浮世繪師の畫は、他に同じものが幾十枚もある版行の繪でも、今は日本人間の賣買價格が一枚數十圓數百圓の高價である、應擧や文晁の版畫は一枚一圓にも賣買されない、之を見ても如何に浮世繪の尊重すべきものかゞ諒解されるであらう

●正面美人と裸體美人

東京　白念坊如電

開歳早々此花第一枝を手折た一覽の際ふと目に留り胸に泛かんだは正面の美人と裸體の美人とである其事に就き一言せんと思ひしが如何にせん舊臘夜行に顚蹶で陰囊に疼痛を生じ大苦みにくるしみ醫師より平臥靜養を命ぜられ病狀を拂はざる三週間かれこれする中に第二枝に接手する事となり一枚の兩美人を想出し筆を執る

美人畫は古來斜面側面のみにて正面は少いと云は面しろい、所が拙老の感じたは其反對で明治以降流行の寫眞美人は總て正面ばかりで側面も斜面も皆無と云てもよろしい夫れはたまさかには半面美人もあらんが例とはならぬ程である

二三の寫眞師に問た事もある其答へが面しろい其子細といつぱわからさまに申せば商賣にもさゝはりますが日本婦人は鼻つきが總じて面しろくないおやに因て横から寫すと其鼻が露見する中には鼻すぢの通つた美人なども却て鼻尖のとんがり過ぎていやだとすねる安座式の御鼻は最初から正面に寫し手入の時の居ざんまい直す又ちよんぼり鼻を横から寫すと三平二滿とやらで無論正面どりの手入といふ手段を執るのであると異口同音は面しろいして見ると是迄の畫工が側面を主としてかく鼻は總てゑ○そ○ら○ご○と云はざるべからず

裸體美人の畫は餘程ふるくからある信實時代からある近世では圓山應擧でも谷文晁でも豐國英泉など人の知てる所である渡邊華山さへもかいて居る

容齋の談に人物かきは是非とも男女の裸體を研究せねば決して人體の骨格がきまらない足のふんばりやう手の伸び縮み肩のかたち腰のすがた其赤裸々の姿勢が眞に迫り觀る人をして喜怒愛樂の情に感ぜしむる樣に畫が得て夫れから其上へ衣服でも甲冑でも着せないと人體が正しくない力の入れ所があべこべになる夫故に人物かきは必ず男女の裸體畫をかけ學べと門人共に申聞けて居たア、は○だ○か○なるかな○は○だ○か○なるかな

はだか



享和三年版（善惡男女勝負附）

●草雙紙は草草子

『此花』記者去日東上の時、如電翁を槻の大樹の下に訪ひしに、翁談話の中に曰く

「此花第二枝に草雙紙の名は臭草紙よりも古しとの考證を載せてあつたが、あれは確な說だ、我の考へには、草雙紙は元來草草子と書くべきを、草の字二つ重るを厭ひて雙の字を當てはめたものであらう、それは老子莊子など云ふ莊子を、今はさうじといふ人も多いが、昔は「さうし」と云つた、其語音の同じ「草子」と莊子とを區別するために、枕の草子、音無草子、化物草子、猿草子などいふ草子類を「草草子」と云つたのであらうと思ふ、其憑據とすべきことは、方言と法言とは語音が同じなので、一を方言といひ、一を法法言といつた、又金山寺徑山寺、是亦金金山、徑徑山と云つた、此類の例は外にもマダ多くある云々

博識洽通の翁、事は斷言にあらずといへども該當の說話たること疑ひなかるべし

附言　イソップ物語といへば、誰も知れるお伽話の嚆矢たり、翁の机上にその伊曾保物語版本考の草稿あるを見、翁に此花の資料とすべく給せられん事を乞ひて即諾を得たり、乃ち次枝に揭げん

浮世繪三幅對（二）



古山師重

貞享元年版（好色江戸紫）



吉田半兵衛

元祿元年版（女用訓蒙圖彙）



石川流宣

元祿十一年版（好色俗紫）

●大人の玩具

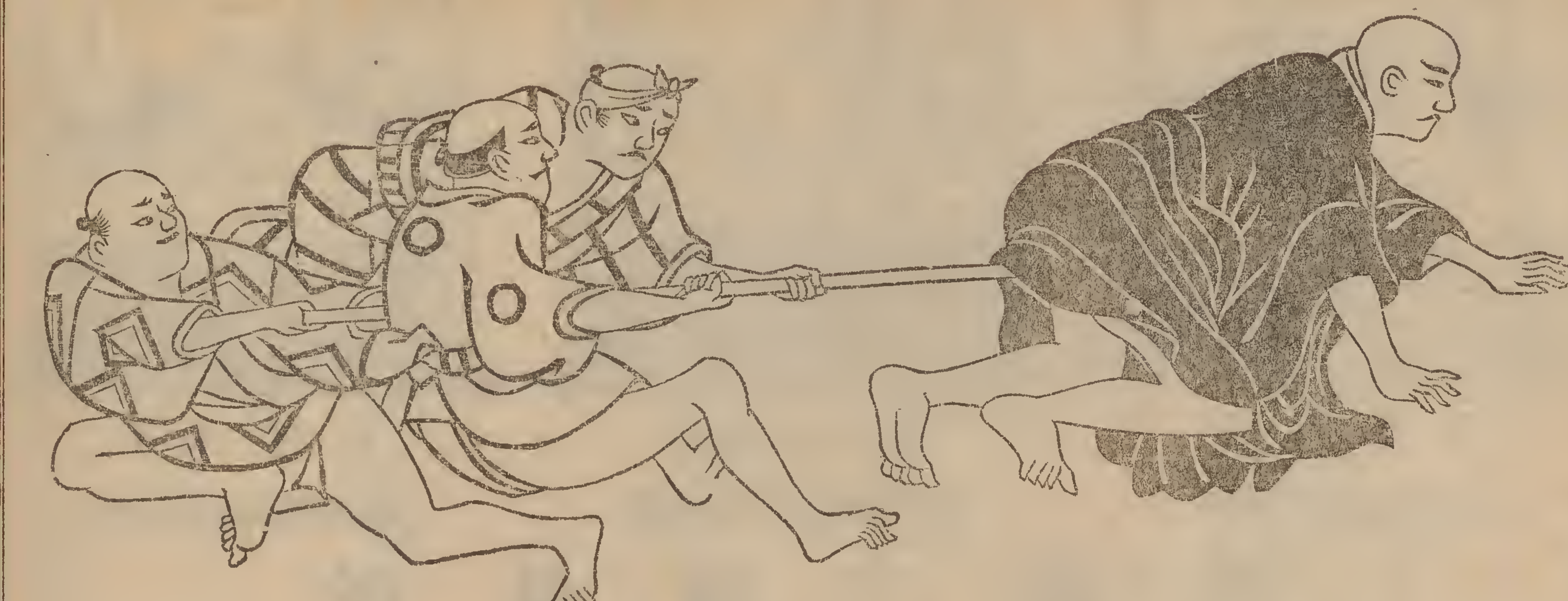
近頃東京は勿論京阪地方で玩具人形が大いに流行して居る、そして其愛玩者は小兒でなく大人である、局外者は此流行を見て「大人が小兒の眞似をするのは可笑い」と云つて居るが、名作の玩具人形はその新古に拘らず、一種の雅味を含んで居るから、大人の娯樂物として可いのがある

大人が玩具人形を愛することは、昨今の流行のみでなく、昔もあつた事である、香道家などは修身齊家の一端として、小人形を飾り置いた室で香をきいた、享保十九年の版本、大枝芳流の著『香道瀧之絲』には、右の如き高さ三寸の小人形を圖してある



●力量の違ふ人々

正徳三年の版本『本朝智恵鑑』といふを披ると下の如き奇体の繪が入つて居たから、これは何事であるかと讀下して見ると「力と智恵のありどころ人によりてかはる事」と題して力のある所、人によりて皆かはれりとかや、むかし高野山の僧は、耳の垂珠に力ありて肥たる人にとりつかせて、何町も引ずり行くこと、さらに苦もなく、後は両の耳に二人とりつきけるに、やすく〳〵と振わるきけるとなり、那智山の僧は、尻に力ありて、火吹竹をはさみ破りぬ、あるとき樫の棒をはさみけるを、四五人にて引とりぬれどもつゐに尻に引まけたり、指に力ある者は、枕引に強く、足に力ある者は臑をしに強し皆これ得ぬ所、得たる所ある違ひ斯くの如し、人の智恵も大かた是に同じき事ありとあつた、ナルホド、人は種々である、歯に力のある者は銅の線を嚙切り、首に力のある者は帶引に勝ち、腹に力ある者は細紐を巻いて、ウンと腹に力味を入れると細紐がブッと切れる、腰に力のある者は米搗きとなり、肱に力のある者は疊屋となる、歴史傳記の上に勇名を垂れる者などは、身体の何處かある一部分に力のあつた人に違ひない



●絶版の蒟蒻本

「蒟蒻本」一に「洒落本」と稱するものは、主として花街遊里の事を書いたものであるが、その元祖は寶暦七年版の『異素六帖』だと云ひ、或は享保十三年版の『艶詞両巴巵言』だと云ひ、又明和版の『遊子放言』だと云ふなど、專門研究者間の異説もあるが爾來天保中年頃までの間に五百種内外出版されて居る、此「蒟蒻本」といへるもの、軟文學の研究には必要のものであるが、寛政享和の頃には、作者が遊里通を振廻さうとして、徒らに妓女の諸譯手管又は遊客の墮々羅狀態など、クダラヌ痴態を叙したので、當時幕府より風俗壞亂物として絶版(發賣禁止)を命ぜられたのが多かつた

仕懸文庫　山東京傳著并畫　寛政三年版
錦之裏　同　同
娼妓絹籭　同　同
辰巳婦言　式亭三馬著　歌麿畫　寛政十年版
南門鼠　擲屋艶二著　北溪畫　寛政十二年版
婦足髷　成三樓著　子興畫　享和二年版

右は絶版を命ぜられたのみでなく、山東京傳などは手鎖五十日の刑に處せられ、版元蔦屋重三郎は身上半減(財産半分沒收)の刑に處せられたのである

●松平春嶽手版の笑本

天和元祿の往昔は知らず、出版界の隆昌期とも云ふべき文化文政己後、盛んに行はれたる笑本は、輕佻射利一片の書肆が出版せるものと、誰人も思へるならんが、當時權門貴紳の間に、新年贈答品用として、自家出版わらんとは、實に驚くべき事ならずや、彼の三代豐國(五渡亭國貞)の畫にて三源氏(相生源氏、吾妻源氏、嬢集餘情)と稱せらるゝ笑本の一たる相生源氏は、松平春嶽侯(越前福井藩主)の御手版なり、故に當時は坊間に流布せざりしなるに、江戸馬喰町の佐々木何某といへる摺物師、松平家の御抱となり、常に一刀を腰にして出歩きけるが、嚢中空乏の爲めに係りの役人と同腹にて窃に拔け本を製し、そを賣却せるが現存するなりと、されば右の相生源氏は大名仕事とて彫刻摺製本その美を極め、桐の柾目箱入にて實に華麗なるものなりしと云ふ　(座禪堂且水)

●五渡亭國貞の門人

同門人にて亭號の明瞭せるもの左の如し

五雲亭貞秀　五湖亭貞景
五風亭貞虎　五粽亭貞廣
五瓢亭貞房　五龜亭貞房
五丁亭貞幸　幸一に章とあり

閨怨

△こゝに長者の一人姫、浄瑠璃御前と申しつゝ、三五の春の花盛り、色盛り、戀盛り、情盛りの面影を、獨寢勝の小夜枕、明暮歌に心を寄せ、詩作り繪かき花結び、絲竹の道暗からず、とりわき琴のけだかさは、雲の上人にも勝らん程の聞こえあり　(近松門左衛門)

△梅の香を身にとめて、柳の枝に袖ふれば、桃の色染む裳より、櫻かざして顔も、春をあらはす我心、知るや知らずや山吹も、藤の陰さへいと淺き、水に寫せば椿寄り、襟を飾るか海棠の、眠催はす春の風、雨となるともよしやよし、月は霽ても朧ぞや、何を思ふぞ雲



つれなしや岩木の中のこだまさへ
こたへはするを人の心は

一立齋廣重畫

(文臺雅調)

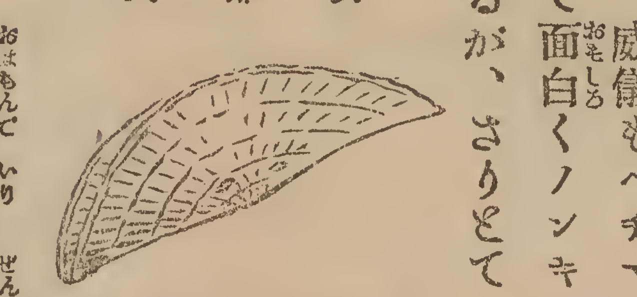
△昔一人の乙女あり、世に二つなきその容姿たとへて叙べん辭なし、玉に比せんかなつかしき、衣の香を何とせむ、花といはんか美しき、聲のあやをばいかゞせむ、一度見てはむらきもの、心亂れぬ者はなし　(武嶋羽衣)

井にも、閨の怨はありや否、星はいづれも同じきに、なれど相合ふものなきや、我も寂しき花の中、花と語れば言葉さへ、通す者なき園の戸や、なれは洩ても物言はず、怨は何の怨ぞや、花の心か我こゝろ　(高安月郊)



●編笠茶屋

昔の幕政時代には、階級制度の野蠻思想で、萬事紀律を嚴格にし、自他共に窮屈な虚儀を裝つて居たのであるが、其埋合せに武士共は吉原遊廓を唯一の樂園として、命の洗濯、翠丸の皺延ばしをしたのである、吉原大門の內に入つては、殆ど四民平等で、威儀もヘチマもなく、只管妓女の歡心を得て面白くノンキに遊ぶことにして居るのであるが、さりとて武士共は平日の体面上、廓內で他の見知る人に顏を見られては、聊か見識にも關すとて、手に編笠を携て行つたが、それも往復の途中不便であるので、其編笠を吉原近傍の家に預けて置いて、大門出入の前後に着脫することにした、これが編笠茶屋の起原であらう、今の馬道邊から大門口までの間に編笠茶屋といふのが數軒あつて、幾許かの賃錢を貰つて客に編笠を貸したのである京都朱雀野遊女町の入口にも編笠茶屋があつたさうだが、玆には江戸吉原の事のみを記す今より二百三十二年前、延寶六年の開版、菱川師宣の繪本『吉原戀の道引』に


女郎貝

どろ町　爰を田町といひしがいつの頃よりかはどろ町といひそめしなり、それはいかなるしさいといひしに、爰の茶屋にて盥に水を入出して足を洗はせしゆへ、是も足の泥をすゝぎけるとて、どろ町となんいへり此茶屋にて足手を洗ひ、鬢をなで、美男をつくり編笠を借り、ことに雨のころは足駄さしかさなど貸すなり、おほかた爰にてゆきかへりの折ふし蕎麥切などをしたゝめ仕度する者もあまたありしなり

と標註して、葭屋の軒に編笠四五蓋を釣下げた編笠茶屋の圖を出してある、下の編笠武士と女二人の繪は同書、廓內女郎屋格子前の圖を拔寫したのである

されど此編笠茶屋は右の延寶より六十年餘を過ぎた頃には、あまり流行しなかつやうである、『嬉遊笑覽』には「吉原に通ふ者編笠を着ざるやうになりしは享保より稀になり元文に至りて全くやみたり」とあるが、同書の次項には「田町また五十軒路の左右にありし編笠茶屋は明和六年四月五日燒失前迄は兩側にて二十軒ありしとなり、今(文政頃)も「細見記」に編笠茶屋の部あり」と記してある、又天保頃の『守貞漫稿』にも

昔は待乳山下より馬を下りて歩行なる故に他見を憚りて泥町(今の田町)の茶屋にて編笠をかりて大門に入るなり、又家より携へたるを手編笠と云ふ、今は田町の編笠茶屋名のみ存す、又編笠を着る人更になし

と記し、其次項に「今も堤を下りて十戸ばかり天保前よりあるは掛行燈家號の肩に編笠茶屋と細書せり」云々、又同書文久年中の追書に「何年の頃よりか近來は田町の茶屋に編笠茶屋と肩書せる茶屋混合せり、堤下より近年



轉宅せしものなるべし」と記してある、又天明三年版の『繪本見立假譬盡』といふ滑稽本には「女郎貝」と題して、上の圖の如く編笠を貝に見立て「元祿寶永の頃新吉原の五十間道にて拾ひ得たる貝なり、此貝當時は拂底なり、船宿の川岸にてまゝ見る事もあり云々」と記してあるから、元文後の編笠茶屋は名のみであるらしい

●お杉お玉

「間の山ではお杉お玉が、しまさん紺さん花色さん、岩戸さまへは道つゞき、二見ヶ浦では朝熊山、磯部めぐりに太々神樂の、これなもしてかんせ」

間の山人のなさけを撥で受け



此お杉お玉の事を古い本で調べて見ると、寛政九年版の『伊勢參宮名所圖會』には

間の山　両宮の間の山なれば間の山といふ、或曰く今(寛政)も淨瑠璃等に加へ語る物に間の山といふ音節は元此所より出たるものなり、故に今にさゝらをすり三味線ひく事は殘りたれども謠歌はうせて何をうたふとも辨へ難し

とある、昔のお杉お玉が謠つた歌は、今のとは違つて居るのであらう、文政頃喜多村信節の著した『嬉遊笑覽』には

按ずるに、小倉の歌に「お玉こがれて」とある此歌を間の山にてうたひし故お杉お玉と言囃したるにや、お杉といふもさる類に歌ありしなるべし

又「大振袖にて足をなげ出して人を見かけては三味彈出し、通り過れば彈止む云々、これら世々のお杉お玉なるべし」とあるが、今は通りかゝりでは見へないやう、戸口に幕を張つて、一錢の見物料を取ることにして居る、時勢相應乞食までもヅルクなつたのであらうが、古名物の雅趣は失せてない、『倭那鄲』、『浮世名異女圖會』その外彩色繪本繪草紙の類にはお杉お玉を頗る非常の美人に描いてあり又『狂歌やまと人物』には「お杉より露のお玉の愛嬌に花散るさまに見ゆる蒔錢」とあり『踊幸引手歌』には「水になりたやお伊勢の水にお杉お玉が化粧の水」等あるが、今は醜女であらう、此お杉お玉の元祖は二百五十年程の昔である、貞享三年版『好色伊勢物語』に

其容姿麗しくて都はづかし、三絃胡弓にゝならぬ歌うたひて、餘念なく居けるを、參詣の若人、彼が麗しき顔色に心とられて錢を投掛くること雨の降り霰の飛ぶが如くなるを、かいふりてあてらる事なし、さいつ比より絲の網をはりて其中に歌うたい居ける、お杉お玉といひし此所の美女なりしも



何時しか老木の花も散りかたになりてあとを隠し、今はお鶴お龜とかや其あとにぬれいゝのすがたをつぐとぞ

上の繪は貞享三年版「好色伊勢物語」より、下の繪は文政六年版「小倉百首類題話」より抄出せしものなり



●一立齋廣重

古今の浮世繪師中、名所繪を以て最も名高いのは初代一立齋廣重である、此人の描いた木曾の雪景、阿波の鳴門、甲斐の猿橋の版畫などは、外人間に激賞されて、一枚の賣買價額が何十圓何百圓である、版行當時に一枚十文か二十文で賣買されたものが、千圓近い高價になるのは、英佛などの畫家が企及すべからざる搆想と手腕を有して居るからである

廣重は安政五年九月六日に六十二歳で病歿したのであるが、其時に三代目の豐國が廣重の肖像を描いて、天明老人(狂歌師盡語樓内匠)が賛を加へた追善供養の版行摺物がある、其肖像の縮圖と賛を茲に載せる



立齋廣重子は歌川家の元祖豐春の孫弟子にして豐廣の高弟なりけり今の世の豐國國芳ともに浮世繪にて此三人に肩をならぶる者なし常に山水の景色を好み又安政三辰の年より江戸百景をかゝれ目の前に其景色を見る如く猶又狂歌江都名所圖會を撰み此圖を賴みしより其月〳〵にあらはす出板摺本の圖取見る人筆のはたらきを感吟せり然る所此菊月の六日家の跡しき納り方迄書殘し辭世までよみおかれ行年六十二を此世の別れ死出の山路へ旅だゝれ鶴の林にこもられしこそなごりをしけれ

東路へ筆をのこして旅のそら
西の御國の名所を見む　廣重
天明老人露けき袖をかゝけて筆をとる

廣重の傳記逸事等は『名人忌辰錄』『墓所集覽』『墓跡考』『雅三俗四』『趣味』雜誌、其外『浮世繪類考』等の類書に多く出て居るが、名所繪を描き初めた動機の事は寫本『浮世繪師系傳』卷の七に出て居るのみである

初代豐國が畫く所の似顏並に女繪盛に行はれ翁(廣重)が畫風の兎角行はれざるを以て一家の畫風を起さんとて苦心せしに會々幕府八朔御馬進獻の事あり翁供奉して京師に上り(廣重は當時同心の役たり、今の巡査)其往來する所の山水景色を見て大ひに感ずる所あり歸東の後意匠を運らし初めて靈岸嶋の竹内といふ繪双紙問屋注文の橫畫東海道五十三次の圖を畫けり文政の頃の事にして此頃までは人も知らざりしが其畫く所意表に出て未だ人の畫かざる所を畫きしを以て大ひに時好に投じ頗る高評を蒙れり翁の畫風こゝに至りて一家をなしたり天保年中畫く所の山水の錦畫益々行はれたり爾來畫く所の景色畫出る毎に聲價を極め都鄙廣重の名を知らざるなし云々

後世其名を海外にまで揚るに至つたのは、全く右の如き刺激を受て奮勵した効果である

俯仰

阪田耕雪畫



明治（大阪每日新聞）

歌川國丸畫



文政（条皿山更紗團扇）

辻番

昔の辻番は今の巡査派出所と相似たものであるが、其辻番所に居て見張りする役人は、今の巡査の如き若い者ではない「辻番は棒を持たぬと轉ぶたち」と川柳に詠まれた如く老耄親爺が勤めたのである、棒を杖につかなければ立つて歩けないやうな老人が多かつたらしい、辻番は明治初年頃の巡査と同じやうな棒を持つて居たのである

辻番の棒持つて出た分の事

喧嘩爭論等に今の巡査が劍を握つて駈付けるが如く、辻番は棒を持つて取鎭めに出かけたのである、類句に

辻番は蠅を移して代り合ひ

といふのがある、これは時間交代のことを詠んだものだが、蠅を移してといふ句の中には血氣盛りの若者でなく、老耄親爺といふ意が含まれて居る、されば

萬事がチヤムサク

辻番に鑄掛た襟も一人見ね

襟に縫繼のある着物をきた者も交つて居たといふのである斯くの如き老耄連中であるから、番所で碁將棋をやつたり中には手内職なぞをした者もあつたと云ふ　（虹衣）



●繪師と作者（中）

▲歌川豊國と山東京傳　馬琴は聞かぬ氣の男であるから、畫の爲に筆を採るやうな事はしない、文の爲に畫を描かせるものだと信じて居た、京傳などは之に反して畫に重きを置いたので、草紙の終りにも豊國畫京傳作と畫工の名を一段上に刻ませて覥として居たのみならず、豊國などの機嫌をとつて平常一歩を讓つて居た「當時是等の畫工、例として未だ描かざる己前に其潤筆料を受けながら拔に誇りて描くに遲かり、本朝醉菩提を板するに及びて、書肆伊賀勘、屢々乞へども豊國事に托して敢て描かず、先づ板元に說薦めて羽二重の袷羽織二領を製らしめ、之れを作者と畫工に贈らしむ（其羽織に京傳と豊國の花紋を付けたり）或は酒肉珍菓を贈り、京傳と豊國を伴ひて雜劇を見せ、或は酒樓に登る事屢々なりき、かくても豊國は尚多く描かず、催促頻りなるに及びて板元に云ふやう、己かく家に在りては雜客もたへず、且錦繪の板元に責められて讀本の插畫は筆を執がたしと、よりて邊の裏屋二軒を借りて此處に豊國を請待し日每に酒飯を餽りて描せけるに、折から三月の頃なりければ、豊國また云ふやう、時は今咲匂ふ花の三月なるに、かく垂こめてのみありては、氣鬱して病を生ぜんとす、いかで隅田川邊に徜徉して保養せまほしと云ひしを伊賀勘聞て思ふやう、若し一日外に出さば再び此處に歸るべからず、要こそあれと思案し大なる枝に花滿ちたる櫻を許多買取りて、そを花瓶にも樽などへも活けて、豊國の机邊に置きならべ、取替〳〵見せしかば、豊國竟にせん方なくて、日每に件の畫像を描く程に、伊賀勘はさらなり、京傳も折々此假宅に來訪して慰めけり、是等の事は京傳の本意にあらねど、さきに優曇華物語の畫像を喜多武清に誂へて後悔せしに、櫻姬全傳の作よりして豊國に描かして時好にかなひしかば、是より豊國と親しくなりて功を讓る事大方ならず」など舊記に見へた　（曲亭馬琴傳）



●著作と繪畫を兼た名人

明治の小說家で畫も描けるのは村上浪六と江見水蔭である、其他は下繪を描き得る位に過ぎないが、昔の戲作者山東京傳は、別に北尾政演と稱して浮世繪の大家である、戲作者として名高い山東京傳の著作物は一冊五十錢か一圓、最高のものでも五圓以上の品はないが政演筆の浮世繪は三枚續二百圓内外に賣買されることもある、又浮世繪師としての溪齋英泉は、一筆庵可候と號して小說戲作の上に於ても名高い、其他神谷蓬洲は春川五七と稱し小說家兼浮世繪師として名高く、窪俊滿の南陀伽紫蘭、歌川國信の志摩山人、歌川芳政の三浦錦二、歌川貞秀の白雲洞主人、八島岳亭の春信、尙又奧村政信、鳥居清倍、清滿、清經、清長、富川吟雪、小松百龜、戀川春町、勝川春章、春童、春英、岸文調、北尾重政、北尾政美、喜多川歌麿、葛飾北齋、石田玉山曉鐘成等も亦黑本、黃表紙、合卷物、落語本雜書等の著述もある、古くは野々口立圃、吉田半兵衛、石川流宣なども自ら作り自ら畫いた、浮世繪師の祖菱川師宣も亦畫の標註は自ら筆を加へたのが多い明治の浮世繪師其數多しと雖も、作と畫を兼ねるものは無いやうだ　（淡書趣味）

異國人

だてもん



寛文五年版（吉利支丹退治物語）



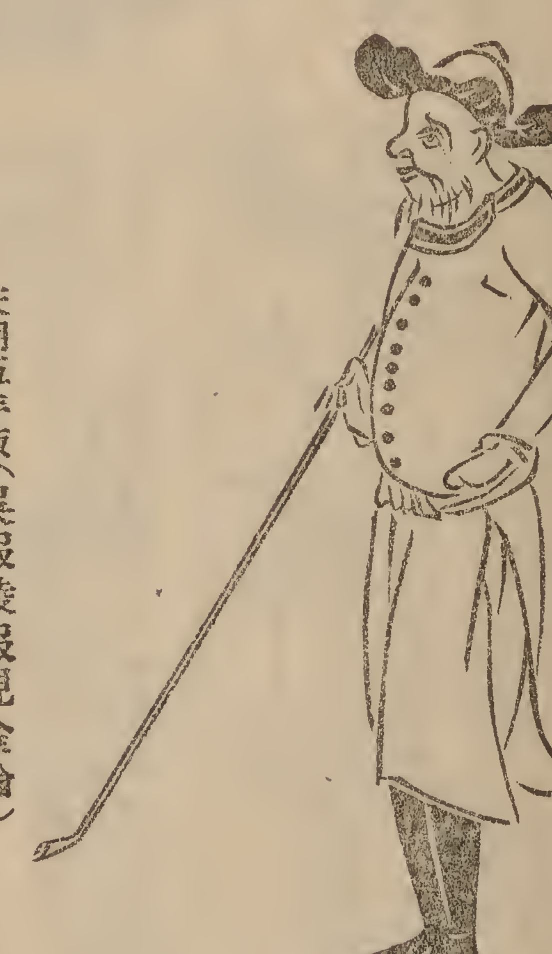
享和三年版（西遊旅譚）



元祿十六年著（長崎蟲眼鏡）



明和五年版（繪本池の鮭）



天明五年版（吳服綾服現金論）

浮世繪本又は讀本等に出て居る異國人の繪は彼是と澤山あるが茲には其一班を擧げたのである、切支丹バテレンが一番ふるつてゐる



天明七年版（紅毛雜話）

●昔の飛行機　京都　花道散人

近頃流行物の一つになつて居る空中飛行器の元祖ともいふべき物が古い書物に載てあるのを見た

抑も昔の空中飛行器とは如何ものであつたかといへば他でも無い、現に小兒の玩具たる紙鳶其物に過ぎないのである、が併し貝原益軒の著した『漢事始』を見ると

俗にこれを風箏と云、古今相傳て云是漢の韓信が作る所、高祖の陳豨を征せられし時韓信中より起らん事を謀る故に紙鳶を作てこれを放ち未央宮の遠近を量り地隧を穿て宮中に入んとせしとかや、昔より傳ふる所かくの如し理或は然らん

どうしても空中飛行器たらざるを得ない所がある、モウ一つは曲亭馬琴の作つた『夢想兵衛胡蝶物語』の主人公たる夢想兵衛が少年國色慾國、強飲國、貪婪國、などを乘廻すに就て工夫を凝らして出來上つたものが即ち次の圖の通だ、馬琴著作の体は面白い

まだ一つ可笑い事がある、それは元の至正乙未刊本で『聯新事備詩學大成』といふ古書、及明の萬曆戊寅刊本で「新刊增補古今名家詩學大成」と法性寺入道よろしくと言たやうな本などに紙鳶を「飛禽門」として雀や烏と同やうに書並べてあるから、若や例の玩具とは異つた物かしらと、讀下して見た所が、矢張紙製の物であつた、そこへ鳥山輔寛の詩



狀成六翮勢何雄　萬里青冥一線風
相看饒拙快心目　怕妨舞鶴在雲中

とあるのを見たものだから、一しはおかしくなつた

●喜多川家の先祖

美人畫の名人歌麿の親は鳥山石燕だといふ説と武州川越在の百姓だといふ説もあるが其先祖は誰であるかを記した本は無いと思つて居たに、案外にも文政頃、三笑亭可樂といふ人が著はした『種がしま』といふ本に左の如く記してあつた（虹衣）

全体親方、此百人一首の中にある赤染だの、いうこんだのといふ名のあるは何だらうノウ、「そりや百人しゆの中の紺屋よ、それから伊勢だの相摸だのといふのは女房さ「それぢやモシ此人麿だの仲麿だのといふのは「そりや歌麿や月麿の先祖で繪かきサ

●梅に鶯

梅に鶯をよめること和歌には常のことなり。鶯宿梅の故事、拾遺和歌集に見えたるより猶さらなべて世人も鶯といへば梅はかならずあるべきものとしもおもへり。いとふるくも萬葉集にも鶯には多く梅をよみ合せたり。詩にも葛野王の春日翫鶯五言に。素梅開素靨嬌鶯弄嬌聲。といふ句あり。唐土にはいはぬことゝのみおもへるに。王維の早春行の詩に紫梅發初遍黃鳥歌猶澁といへるぞ。鶯梅を對する據ともすべし。（世事百談）

日本　浮世繪類纂　其三

長繪



長繪は昔「柱隱しの繪」と云つた、玆に縮刷してある忠臣藏七段目の原畫は縱二尺三寸、横四寸ばかりの細長いものである、式亭三馬の著『稗史億說年代記』に「鈴木春信、湖龍齋、女繪の一枚繪一流柱かくしの女繪は湖龍齋よりはやり出し、清長にいたつてますく世にもちゆ」とあり又『浮世繪類考』の湖龍齋の項に「錦繪を細長につぎ吉原遊女繪などを表具して俗に柱かくしと云ふ如くにしたる繪多し、此頃專ら流行せしものなるべし」とあり、『日本繪類考』には「柱かくしの女繪は湖龍齋己前よりこれありたるものならんしかして其の流行せしは湖龍齋に始まりたるなり、嘉永年間までは盛んに行はれたるものなるがいつか廢れて今(明治)は絕てこれを見ざるなり」とある、此柱かくしの繪を長繪と云つたのは、明治二十年前後の頭錦繪の輸出販賣者が云ひ始めた事らしい、明治前の本には長繪と云ふ名稱を記して無いやうだ

考證

さて、此長繪の筆者を詳かに列擧してあるのは、明治三十八九年の頃頒布した吉澤商店輸出部發行の『古代錦繪買入概價表』であらう、其一節に「長繪は普通錦繪の外に漆繪及び紅繪あり、是等の行はれし年代は最も長く、漆繪及び紅繪の長繪は百八十年乃至二百年前より行はれ、彩色摺は鈴木春信時代より行はれ、近くは二代豐國時代まで引續き行はる、其長さ堅二尺三寸横四寸にして其畫工は左の如し

西村重長、鳥居清信、同清倍、奧村政信、奧村利信、石川豐信(以上は漆繪及び紅繪）鳥居清滿、同清廣、同清忠、(以上は紅繪）鈴木春信、同春治、同春重、巨川、田中益信、古月堂、磯田湖龍齋、鳥居清長、勝川春章、同春潮、同春山、同春英、歌川豐春、同豐信、同豐國、同豐廣、喜多川歌麿、窪俊満、北尾重政、同政演、二代歌麿、菊川英山、春扇、買入價額一枚最高三十五圓、最低五十錢、溪齋英泉、二代豐國は格別廉價なり云々

●浮世繪師の名物畫（二）

勝川春章の嵐音八似顏



此五人男の畫は世に玩ぶ俳優眞圖のはじまりにや、此ころ勝川春章人形町林屋七衛門といへる者の所に寓居してはじめて此畫をかけり（寸錦雜綴）

●新聞紙と浮世繪

明治二十年前後の頃は、大新聞小新聞と稱し十中の八九までは繪なし傍訓なしの大新聞であつて、繪入傍訓付の小新聞は全國に二三十種位しか無かつたのである、現今各地に於て發行する數百種の新聞紙中、浮世繪を掲出しないものは一つも無いが、斯く新聞紙上に挿畫が流行するに至つたのは、ツマリ時勢の要求に應じたのである

此新聞紙なるものは文久三年の秋、江戸本所の萬屋兵四郎といふ人が『バタビヤ新聞』といふのを發行したのが最初であつて、爾來數千種の新聞紙が起伏したが、其新聞紙中に浮世繪を挿入したのは、明治八年四月十七日に初號を發行した『東京繪入新聞』が嚆矢である、飯嶋虚心氏の遺稿『日本繪類考』にも

新聞挿畫は浮世繪師歌川國芳の門人落合芳幾（一惠齋）を祖とす、其後芳年及び其門人年方年宗等これを畫き、現今に至りては四條派及び容齋派の人々も亦これを畫く、一説に新聞の挿畫は大に畫才を長ぜしむるものなれども、大作をなすに當り筆尖澁滯の弊を招くと、或は然らん

其後明治十年五月に『大阪繪入新聞』といふのが出來た、當地に於る繪入新聞の祖である

●浮世繪師辭世集（下）

△鳥山石燕　天明八年歿享年七十六

隈刷毛の消えぎはを見よ秋の月

△戀川春町　寛政元年歿享年四十六

生涯苦樂四十六年　即今脱却浩然歸天

△高嵩谷　文化八年歿享年七十五

墓建てなき名觀ずる寒さかな

△十返舍一九　天保二年歿享年六十七

此世をばどりやお暇に線香の　煙となりてハイさやうなら

△溪齋英泉　嘉永元年歿享年五十九

限りある命なりせば惜からぬ　たゞ悲しきは別れなりけり

いろどれる五色の空に法の道　心にかゝるくまどりもなし

△魚屋北溪　嘉永三年歿

暑くなく寒くなく又飢もせず　憂事聞かぬ身こそやすけれ

△喜多武清　安政三年歿享年八十一

來て見れば二本榎も面白し　はなしの友は其角一蝶

△歌川國貞　元治元年歿享年七十九

一向に彌陀へまかせし氣の安さ　たゞ何ごとも南無阿彌陀佛

命毛の切れて今年の別れ哉

現今浮世繪師（三）

梶田半古

師門　鍋田玉英
俗稱　梶田錠次郎
年齡　四十二（明治二年生）
生地　東京
現住　東京市牛込區天神町七十七番地



山中古洞

師門　月岡芳年　熊谷直彦　在原古玩　石原白道
俗稱　山中升（實家佐藤氏）
年齡　四十二（明治二年生）
生地　東京麴町區永田町
現住　東京市芝區二本榎二丁目二十八番地



池田輝方

師門　水野年方
俗稱　池田正四郎
年齡　二十七（明治十七年生）
生地　東京
現住　東京市神田區美土代町三丁目四番地



山本英春

師門　月岡芳年　右田年英
俗稱　山本鎰之助
年齡　三十二（明治十三年生）
生地　東京芝區烏森町
現住　大阪市西區靭上通常源寺内





●江戸繪の川流し

秋田地方では、往昔三月節句のとき雛飾りと共に、江戸繪の漆繪紅繪を室内一面へブラ下て眺めるのを樂みの式とし、その節句がすむと漆繪紅繪を殘らず川へ流したさうである、其後川へ捨てるのは勿体ないと云つて、流さない事になつたが、三月節句に室内へブラ下る事は毎年連續して居たので、古い江戸繪の上等品が多く完全に殘つて居るのは秋田地方であるさうな、たが明治三十年後、東京の錦繪輸出業者が大概狩出したので、今は裕福の舊家でなければ持つて居ないさうである

●後の元祿踊

物事の流行は、絶えず循環するものであつて凡そ三四十年目又は五六十年目には必ず以前に流行した物事が流行するのである、明治三十六七年頃に大流行を極めた元祿振なども、元祿から明治までの間に數回流行したこともあつたのである、されば今後五十年程經つと復元祿振が流行するに違ひない 弘化の初年頃、江戸で元祿振が流行したらしい、左右の上欄に揭出してある元祿踊りの繪は、三代目豐國(自稱は二世)の國貞が描いた繪を縮寫したのである

●東鶴西鶴南馬北馬

文化文政の頃、江戸に東西庵南北(朝倉藤八)といふ戯作者があつたが、茲には作者の東鶴と西鶴、浮世繪師の南馬と北馬の事を記す 貞享元祿の頃大阪に井原西鶴といふ淫文家のあつた事は誰でも知つて居やうが、東鶴といふ先生のことは知らない人が多からう、明和七年版の勝川春章筆『繪本舞臺扇』の序に「攝陽西鶴孫 東鶴」と署名してある、此外の本では東鶴といふ名を見ない、西鶴の孫東鶴とは、何人かの洒落か僞稱か、はた事實か否かも判らない



葛飾北齋の高足に蹄齋北馬といふ名人のあつた事は誰でも知つて居やうが、南馬といふ浮世繪師のあつた事は知らない人が多からう、蹄齋北馬の門人連が踊番附の寄合畫をしてあるのを見ると、雪馬、集馬、南馬、遊馬など署して師の畫風に似た美人畫を描いてある



●柳の風

▲朝妻の鹿相で一蝶船に乘り

これは德川五代將軍綱吉が愛妾お傳に溺れて居るさまを描いた朝妻船といふ畫のため、英一蝶は咎めを受けて伊豆の八丈嶋へ流罪に處せられたといふので、一蝶は朝妻船のため押送の船に乘せられたと云ふ意である

▲吹繪ほど炭賣りよごす雪の門

雪の降つた日粉炭賣が來て、門口を吹ボカシ繪のやうに、炭の粉をこぼしたといふのである、吹ボカシ繪の彩色法は、鳥山石燕が發明したのだといふ

▲一家中へチをまくるを浮繪にし

赤穗義士の討入りに吉良の一家中が大騷ぎをして居る所を浮繪(覗き繪)にしたといふのである、類句に「權五郎浮繪のやうに城が見え」鎌倉權五郎景政は奥州征伐の時、鳥海彌三郎に右眼を射られたから、城が浮繪のやうに見えたであらうとの意、浮繪を見るには一眼を閉ぢるからである

▲稻荷から出世鳥居の筆に乘り

稻荷とは名題下の役者、俗に稻荷町と稱するもの、鳥居とは繪師鳥居の事である句の意は稻荷町が出世をして番附や看板に、繪姿を鳥居にかゝれるやうになるといふのである

▲豐國の裏へ自筆の暑氣見舞

豐國の描いた役者似顏繪團扇の裏へ、暑氣見舞の文句を書いて送つたといふのである、類句に「涼み臺似顏の邪魔に澁團扇」といふのがある、娘が役者似顏繪の團扇を持つて涼みに出て居ると、澁い親爺が澁團扇を持つて、色戀の邪魔に出掛けるといふ意である

蹴鞠者の戯　菱川師宣畫



天和三年版(竹齋物語)

▲北齋だねと摺物を撥で寄せ

清元か藤間あたりの催しの摺物を見た藝者か、この繪は北齋だねといつて、三味線の撥で手前へかき寄せて見るといふ意である　(虹衣)

●版畫考（三）

故小島蓬城

變革

足利氏の末、天下は麻と亂れし時、世の興亡を冷眼に見て、美術に一身を委ねしもの、加藤藤四郎の陶器に於ける、雪舟宗丹の畫に於ける、毫末も官祿に依らずして、獨立して己の技を磨くに足りしもの、國民の間、美術の要求ありしに依らずんばあらず。德川氏天下を治めしより、戰亂を忘るゝこと五十年、平民の求美心抑ふると雖も豈煥發せざるを得んや。而も理想とか氣韻とかいへる、叮嚀なる玩味の後初めて其値を知るが如きものは彼等の欲するところにあらず、又得難きものを獨藏して誇らんとするにもあらず。彼等の求むる所は讀易からざる萬金の書にあらずして、一ヶ月數十錢を投ずれば誰をも樂ましむる新版物なり、此新版物は實に菱川師宣に依つて創始せらる。

師宣の畫風は狩野に近く、手訣は探幽以來の其に似たり、彼は多くの肉筆畫を作りしと雖それよりは尙多くの版物を出せり。蓋し師宣が一枚摺の版物を刊行せしは、伊勢物語等の畫本に基いて進歩したるものなれども、實は是より前大津繪なるものあり、大津繪の起源を沿革に就いては種々なる說あれども、要するに粗末に書流して廉價に多衆の需に應せしものなるが故、師宣が衆庶の求美心を滿足さすべく一枚摺の版畫を出しゝには、慥に大津繪に負ふところありしならん。

師宣一度出て版行畫の紀元を開きしより、死物を描くの拙は又爲さゞるに至りしが、彫工刷工の技は未だ之に伴はず、畫工當初の苦心寔に察すべきものあり。而して畫題は每に歷史的若しくば時代風俗を擇びたり。

菱川の勢力衰へ、版物として鳥居一派の起るに當り、畫風、手訣共新しき傾向を生ぜしかど、初めは餘り多くの變化を圖樣の上には見ず。元祿の末より歌舞伎芝居の一枚畫は漸く鳥居派の手に依つて成さるゝに至りぬ。

鳥居派及び其對抗者たる肉筆派に於いて、大いに競爭したりし結果、正德享保の交、彩色に於いて非常の進歩を遂げ、鳥居派の同伴者たる奧村政信は、松烟墨に膠墨を重ねたる漆繪てふ彩色法を發明し、師宣以來の手彩色にあらざる版摺彩色をも考案したり。

版畫の初めは丹綠靑等の所謂重顏料を以て班に彩色せしが、元祿の末輪廓中の空所に丹を塗りたる丹繪なるものを作り、享保中丹に代ふるに紅を以つてしたる紅繪を製出せり。

彩色摺の始めには紅と綠との二色を用ゐ、紫には二色を重ね摺にし、凡て二色を應用したる故に二色繪の稱起れりといふ、當れるや否やは知らずと雖も、一說として聞くの値はあるならんか。

尤も最初は摺彩色手彩色並び行はれしが、淸滿時代には刷工も熟練して喰違のなき樣になりたれば、手彩色は全然見ざるに至りぬ。而して色を二種に限ることは長く耐へ得るところにあらず、刷工の進歩すると共に漸次色彩の數を增加せり。

斯の如くにして種々なる工夫は年一年と積まるゝ中、明和の變革に鈴木春信が、從來白紙の儘なりし後景に空色を施すことを發明すると共に版物の形狀を變じ、版物をして艶美ならしめんには、版數は幾枚にも增加すべしとなし、更に雨などにカラ摺を用ゐることを發明したり。而して刷工の暈摺はいよ／＼自由になりぬ。此時長方形の懸物形の版畫（卽ち長繪）流行したりき。

此後天明寬政の交、淸長出でゝ版畫全盛の絕頂に達せし時、大判數枚續きの出るあり。いよ／＼複雜より複雜に入りける中、歌麿出で全盛の上塗を爲し、遂に衰頹に赴くに至りしが、北齋、廣重等の出るありて、傾く運命を支ねつゝ、明治にまで及ぶを得たりき。

（此花記者曰）本篇は以上の外、尙所論多かりしなれども、節約して之を終了とす

●吉田半兵衛の繪本

江戸に菱川師宣が出て、盛んに浮世繪本を版行した貞享元祿の頃、京都に吉田半兵衛といふ一種畫風の達ふ浮世繪師があつた、其傳系等は詳かでないが、同人の筆に成つた繪本類は夥多現存して居る、署名のあるのは貞享三年版の『好色訓蒙圖彙』に「繪師洛陽吉田半兵衛圖」とあるのと、同四年版の『女用訓蒙圖彙』の文中に「浮世繪の逸物吉田氏が筆をかりて云々」とある二書のみらしい、同人の畫に相違ない此二書を根據として、他の繪本類の鑑定を下すと、天和二年版の『好色一代男』は吉田半兵衛の畫なりといふ事の誤謬たるは確である、今予が所有本及び永田文庫の藏本に就て、吉田半兵衛の插畫であらうと鑑定を下し得べきものを左に列擧する

好色一代女	六冊	貞享三年版
日本歲時記	七冊	貞享五年版
當流女文庫	三冊	貞享五年版
日本永代藏	六冊	元祿元年版
本朝櫻陰比事	五冊	元祿二年版
女重寶記	五冊	元祿五年版
世間胸算用	五冊	元祿五年版
雨夜三盃機嫌	三冊	元祿六年版
初音草咄大鑑	七冊	元祿十一年
絲竹大盡	二冊	元祿十二年版

此外元祿十五年版の『元祿曾我物語』六冊、同十六年版の『新平家物語』八冊『傾城辻談議』六冊、寶永三年版の『世の見沙汰』五冊『當世乙女織』七冊及び版年不詳の『うかれ狂言』同く『好色京くれなゐ』四冊も亦同人の畫に似て居る、シカシ右の中には疑ふべきものもあるが、寶永六年版の『子孫大黑柱』に「昔都大宮通りの末に繪師半兵衛といへるあり云々、弟子あまた抱ゐ云々」とあるから、元祿六年後の版本は吉田半兵衛の門弟が描いたものであらうか



珍書解題　三　（永田文庫）

▲好色伊勢物語　中本三冊　貞享三年版

有名の伊勢物語に擬して好色男女の話を書き集めたものである、其記事挿畫の一斑は本誌に拔載せる「お杉お玉」の項を見て知られよ、奧附には「貞享三歲寅仲春吉辰日、洛下錦小路通永田長兵衛、江戸神田新革屋町西村半兵衛彫梓」とあるのみで著者は不詳である、朝倉無聲氏の「日本小說年表」には版行年代不詳の部に入れ、柳亭種彦の「好色本目錄」にも「流言の語釋註解ありて、なか／＼可笑き作振なり、貞享三年の印本「三代男」を引たれば、元祿初めの印行なるべし、後年外題替「いくのゝさうし」とある、該年表目錄の著者は右の如き奧附ある完全のものを見なかつたのであらう

▲松風村雨　大本二冊　萬治二年版

色男として名高い中納言行平が攝州須磨浦に流謫されて居た時、藻鹽汲女（卽ち松風と村雨）といふ漁師の姉妹娘と通じたといふ小說であつて、前の情婦及び此姉妹と往復した艶書などを多く挿んである、「萬治二年己亥極月吉日、野田彌兵衛板行」とあるものと、單に「松會開板」とのみあるものとの二種ある

▲傾城辻談議　小本五冊　元祿十六年版

京、大阪、江戸の三都で當時全盛を極めた傾城遊女三十名の評判記、粹と野暮との辻談議であつて、目錄にも「度々耻を隔夜道心、哀れは千日寺の鐘の別れ、三味線の撥は木葉天狗の算、菩薩の紋日は彼岸の中日」としるすなど、文章はオツに引かけた西鶴流の通がり係つて居る、序文には「靑陽仲鳥翁」とあるが、奧書には「于時元祿十六のとしきさらぎ吉日、目深露白、京上村四郎兵衛板行」とある、畫者は吉田半兵衛派の者に相違ないこと確かに保證する

▲好色染した地　中本五冊　元祿四年版

これも外題は好色とあつても、露骨の猥褻本ではない京、江戸、伊勢の三ケ所に分つて好者の物語を叙したものである、序文に松月堂とあるが著作者の匿名らしい、畫者の署名はないが、古山師重の筆であること、是亦確かに保證する、此本のこと前記の「好色本目錄」にも「日本小說年表」にも出て居ない

●花つみ籠

▲服部一三氏の浮世繪談　『神戸新聞』は其近刊紙上に「神戸十八大通」と題して、同地に於ける各種の精通者十八人を紹介したが、其中に、浮世繪蒐集家として、現兵庫縣知事服部一三氏を選拔し、氏の藏品、氏の談話等を詳記してあつた、其談話中

「日本も足利時代は最も支那を崇拜した時で、支那畫が禪學と共に大流行をして來た時凡てのものが支那臭味を帶びて來た時代で繪畫なども支那の山水を屛風や襖に畫いて樂んだ、人物も支那の神仙を多く描いた、が下つて德川の時代になつても其派は盛んであつた、明の仇英の描いた、支那風俗の畫は非常に有難いもので、日本の浮世繪師が日本風俗を畫いたものは卑しい、下品な風韻がないと一顧も與へない、富士山初め日本の明媚な山水はツク根芋の支那風景に變化せねば畫にならぬと云ふ難義な思想が多かつた、其間に岩佐又兵衛や、菱川師宣や、宮川長春や、奥村政信の日本浮世繪界の傑物が飛出した、堂々と落款に日本繪師何某と書いた、其日本人で日本畫家たる事を自覺して日本繪師と書いた一醒覺は當時の一注視を受けて、世人から種々の批評を蒙つたが、其勇氣と自覺は浮世繪畫家の一大氣焰であつたのだ

日本の小供兒童、幼稚園にも行かぬ、小さな小國民が楠公だとか、八幡太郎とか辨慶義經、太閤樣と種々の英雄の名を記憶して居るのは何によつて知つて居るかと云ふに小學の教科書でもない、多くは一冊一錢二錢の小繪本で其拙劣な三文繪本も、小供の頭腦には終世忘れる事の出來ぬ大印象を與へるので世間より蔑視された浮世繪師の筆の跡は大なる國民教育に資したので、今日の新聞雜誌より一般の教科書に至るまで恐く浮世繪の獨壇上で、其繪の如何は國民に非常の影響を與へるのである、德川時代に於ける士民の此浮世繪の爲に感化教育された事の大なるは無論であるが、其時代を直寫した爲に、社會の陷缺の幾分を暴露し世の顰蹙を受けた事もある云々

我輩の既に言ひし所、また言はんと欲するところである

▲大阪圖書館の珍書常設展覽　大阪府立圖書館に於て、昨冬以來珍籍奇書の常設展覽を開設し、二ヶ月目毎に其出品を取替る事になつて居るが、去日其第二回として、大阪の風俗に關する圖書繪畫を陳列されたさうである今其目錄を見るに、大阪市内の藏書家が出品したものが八十種ほどある、實物はマダ見ないが、珍書らしいのは、木崎好尚氏の藏本「夜長草紙」といふ木崎雪杖翁手稿の大阪風俗記、平瀨三七雄氏の藏本「辨慶帖」といふ浮世繪師北碎舍芳豐の畫日記、大丸吳服店の藏本「裝束記」といふ衣裳注文の扣帳三冊であらう、尚實見の上紹介すべきものは、次枝に繪入にて掲出する

▲藤岡作太郎氏の訃音　「近世繪畫史」といふ好著で、日本浮世繪の起原沿革等を詳記された事のある文學博士藤岡作太郎氏は、去る三日享年四十一を以て逝去された、氏は頗る勤勉篤學の士であつて、家居中書籍と筆とを手放した事は無かつたさうである

▲葵文庫の發行　東京の吉川弘文館では、諸國の名所圖會、讀本草雙紙、和漢軍談書、黃表紙戲作本、隨筆物、怪談物等の古版本を翻刻し、繪畫は寫眞凸版で原本の通り縮刷しそれを美裝の洋本仕立として、廣く廉價に發賣するさうである、第一回刊行の實物を見た後更に紹介する

●寄稿又は通知を望む

「此花」次枝以下に、浮世繪に關する問答欄を新設する、何でも問題を出されよ、又現今浮世繪師の逸話を續載したい、尚又軟派珍書の〇ハ〇ホ〇ン揃へ(互に交換)の廣告をも掲出する



明治四十三年四月一日發行

花の街



遊女
文化三年版(廓中艶譜)

茶屋
天保四年版(春旅漂華名所)

例言

△本誌は、藝園に於て、[illegible]の精華と許されつゝある、日本浮世繪の研究と鼓吹とを目的として、毎月一回發行するにあり

△されど俗耳に容り易きを主として、高尚の論說等は、當分これを避け、低きを先とす

△又浮世繪に關係なき事項を記すこともあり、これ浮世繪の趣味を解し得ざる人にも本誌を讀ましめ其間漸次に牽引して同化せしめんとする一種の手段たり

△浮世繪師個人に就ての專門的研究の結果は、其記事を本誌に登載せず、浮世繪鑑、浮世繪師全傳等の別著として發行す

△以上の主旨に反せざる研究家の投書は歡んで迎ふ

編輯發行者

○浮世繪師全傳

右は[illegible]以來の九百人に[illegible]の系[illegible]、及び[illegible]の[illegible]、畫屋の[illegible]、別號、[illegible]、[illegible]等[illegible]年、[illegible]等を[illegible]するにありて、一昨秋以來材料蒐集に苦心せるも、脫稿までには尚一年間を要する豫定なれば、發刊は其後の事たり

本篇の材料となるべき事にて、未だ世に知られざる事あらば、本庫に通知せられたし

○浮世繪鑑

浮世繪流派の[illegible]代表者たるべき十二家を選拔して、其畫作中の優秀なるもの各五十葉づゝ(外に[illegible]四面入)を集む

○菱川師宣畫譜　○奧村政信畫譜
○西川祐信畫譜　○月岡雪鼎畫譜
○鈴木春信畫譜　○勝川春章畫譜
○北尾重政畫譜　○鳥居清長畫譜
○喜多川歌麿畫譜　○歌川豐國畫譜
○葛飾北齋畫譜　○大蘇芳年畫譜

右の中、第一卷「菱川師宣畫譜」は昨年七月十五日發行、第二卷「奧村政信畫譜」は目下印刷中、發行は三月の末か四月の上旬頃との豫定なり

雅俗文庫

此花第四枝總目次

此花　第四枝

明治四十三年四月一日發行

●浮世繪の畫幅を

人々の常に嗜好する所の事物を聞けば、其人の性格は大概推測し得られるものである、賭博好の人に勤直の者なく、音樂好の人に粗暴の者は少いといふの類で、嗜好の事物は其人の性格を表示して居るものである、されども人々には見榮をはるといふ癖があつて、外見と內實とが相違して居る事もある、玄關に骨董物を飾り立てゝゐるから、此家の主人は好古心のある人であらうとか、又は居室に多くの書籍を積重ねてゐるから、此家の主人は讀書家であらうと速斷することは出來ない、成上りの惡紳士が古銅佛を買入れたり、無學の怠惰者が讀めもせぬ洋書をツンドクと云ふ事實も多いやうである

久しく日本に居住して居る或西洋人の云ふには「日本人の家に入つて、其客座敷に通つて見ると、床の間に狩野派の山水とか、宅磨派の佛畫などの三幅對を掛けてゐるから、此家の主人は高尚の性格を具へた者で、審美上の談話なども出來得る人であらうと想像して、彼是質問して見ると、驚くべし、一向何等の知識もない俗物である、英佛などでは、自己の家室に掲げてある繪畫器物の類に就て、客人に質問された時は、相當の說明と見識とを加へた答辯をしなければならぬ事になつて居る、其答辯の出來ないやうな書畫器物の類を室內に飾つて置くのは、主人たる者の大耻辱としてある、翻つて日本には日本特有の產物たる浮世繪といふ美術品があるので、宮川長春の美人畫とか、歌川廣重の風景畫とかの畫幅を床に掛けて置いた方が可からうと云つて見ると「あんな俗畫を掛けて置くと、主人の性格を疑はれます」と答へる、實に笑ふべき事ではないか、そんなことを云ふ主人の性格は如何であるかと、探つて見ると、其人平素の嗜好は茶屋遊びのみで、關係の藝妓も數名ありとの事である、平素活きた美人を愛して、名所の風景を見んとて旅行する時即ち花見遊山などに、公然その美人を伴れ步く者が、繪畫美術の女や風景の畫幅を、其床の間に掛けて置くのを耻辱だと心得るのは何故であらう、菱川師宣の描いた吉原遊びの畫幅を掛けて置いても、此家の主人は茶屋遊びが好きと見へると推測する者はなからう、古風俗の雅致を味はふといふ事は、高尚の趣味力を持つて居る人でなければ出來ないことである、要するに日本人は柄にもない外見をはつて、世間の人を欺かうとしつゝ、自ら耻を賣つて居るのである、日本人が日本の風俗畫たる浮世繪を愛して、其床の間にも古美人とか古風景とかの畫幅を掛けて置くのは、實に適當の事である、特に我々異邦人を招待される場合などには、浮世繪の畫幅が何よりの御馳走である、漢畫臭い山水や、印度風の佛畫などを、日本人の家で見たくはありません云々」といつて呵々と笑つた



享保三年版(井蛙抄)

右は日本の浮世繪を愛する一外人の談であるから、浮世繪贔負に傾き過ぎた論だと云ふ人もあるだらうが、我輩は最も痛切の言と見て大いに同意を表するのである

されば我輩は、日本人諸氏に向つて、眞に浮世繪を嗜好するの精神で、浮世繪の畫幅を床の間に飾られんことを希望するのである、他派の畫幅が其主人の性格に相當するのもあらうが、浮世繪は何人にも解し得られ、又何人にも愛し得られるものであるから、現今の日本人は床の間に浮世繪の畫幅を掛けて置くのが最も適當であらうと信ずる、譯の分らぬ佛仙畫や、つく薯山水の幅などを掛けてすまして居るのは、實にコケの骨頂である



奥村政房

延享頃版黑本(榮花義經蝦夷錦)



奥村利信

寛延頃版黑本(高砂十歸松)



奥村政信

享保頃版(源氏繪百人一首)

浮世繪三幅對 (三)

誰袖

今は誰袖と云へば娼妓の名を呼ぶやうであるが、元祿前後の昔は匂袋の一種を誰袖と云つたのである「色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰袖ふれし宿の梅ぞも」といふ古今集の歌に據つて、圖の如き袖形の匂袋をこしらへそれを袂落しとして持つことが流行した、實に風雅至極の好い名實である、委しい事は柳亭種彦編著の「用捨箱」中の卷に出て居る



伊曾保物語のものがたり

東京 白念坊如電

今度日英博覽會へ出陳しました伊曾保物語の事、先日それに添へました説明書をあげる御約束をしましたが、あれは眞面目に書いたもの面白味が少い、此物語には宮武さん向きの浮世繪に管係の話しがあるですから、夫等を主人公として更に御話しをしませう

エヽ先年岩谷一六さんの所へ遊びにまゐりました時に大卓子の上に太い卷物が三本ありましたから、あれは何ですと聞きましたら、あれは珍品ぢやでらんなさいと云れましたから、披いて見ると何んぞ計らん、伊曾保物語の繪卷物で、其筆者は書畫共に雛屋立圃であつた、是れは珍物ぢや名卷ぢやと賞翫して、何人の所有なりやと問ふたら、賣物だが直段が高いからどうしようかと考へ中だと答へられた、自身も欲しいには欲しかつたが、岩谷君が先口であるのに、其上ねじるしも高いと聞いて匆卒に見をさめて、一六さんの所有になつたら重ねて見られると思ひ、さのみは圖柄書様にも意を留めなんだ、其後程へて一六先生に或處で御目に懸つた、忘れもしないから、先日の伊曾保の繪卷は御手に入りましたかと聞くと、値が高いから手に買へないで殘念ながら返したと云はれた、此方も殘念であつた、此繪卷は其以後眼にもふれず耳にも入らない誰からの話しも傳へないから、定めし外國人の手に入つたものと思はれる、其時四五百圓奮發して買はなかつたのが此方の落度である

そこで伊曾保物語は西洋四大奇書の一で、種々な譬諭を作り設けて教誡を示した物語本である、此西洋の原書を日本語に翻譯した人も西洋人である、葡萄牙の耶蘇教師でパピアンといふ人で、此人は日本に居る事が久しいから日本語に通じ、それで此物語を日本語に譯したのである、葡萄牙西班牙の天主教牧師は天文中より日本に入込み布教に從事してゐて永祿天正に至つては京攝地方にも盛んに布教してゐた、當時は此人々を南蠻人と呼んだもんである。パピアンは肥後の天草島に建てある天主教會堂に居て、さうして此物語を日本語に反譯したのである、所がそこに面白い話しがある、日本語に反譯をしたが其日本語を書取たのは横文字の羅馬つゞりであつた、横文字よめぬ日本人には矢張西洋の原書同然である、おもしろいぢやありませんか

又そこで此書の翻譯成稿は文祿元年で豐太閤が朝鮮征伐の年である、其翌年(西暦一五九三)天草の教會で横文字で出版されたのである、同時に平家物語を文句其儘に羅馬つゞりの横文字本に出版された、此兩書は我國では見ない様だが倫敦の圖書館にはある、薩道公使が購ひ去られた者で待賈堂の印が押してある、達磨屋の舊藏本である、達磨屋とは江戸四日市の有名なる珍書本屋で本姓名は岩本五一で戯號を花之舍蛙麿と云つた、明治元年五十餘歳で亡くなつた今の二三屋は其後である

この横文字で書いてある翻譯伊曾保物語を更に眞字假字に書替たのは、何人だか夫はわからない、然し年代は慶長五年以後に相違ないと思ふ、其子細は豐公が九州征伐の後南蠻人は天草長崎など限りで其他の土地に駐る事を禁じてより十年餘り、國内諸國には南蠻人の跡は絶つたと云つても宜しいのである、所がこの慶長五年に英吉利の商人と和蘭の商人とが同船で泉州堺浦に乘込で通商交易をしたいと申入れた、此時は關原合戰の後で天下の政權は東照公が握つたほや〳〵である、そこで東照公から關東へ來い相談して見ようと云はれ、英蘭兩商人は江戸に赴き全く通商が本意で耶蘇教氣なしであるから東照公も其需めを許した

サアかうなると人氣は妙なもんで西洋に向ふ、此時分は歐羅巴の事を奥南蠻と云つた、カモナンバンと間違ちやいけないよ、南蠻人の本國だからオクナンバンと云ふのである

そこで此時の人にも奥南蠻の風俗をアノコノと口にするハイカラが、オツト此時代にはハイカラとは云ふまい、利口な連中は西洋の事實を聞取學問で話しかけるが大層な流行と見らるゝ、其機に付込み早く見て取た人が、伊曾保の横文字を竪文字に書なほして日本人だれでもかれでも讀める樣にしたのであるらしい

或人が反譯伊曾保物語は京都の公家衆の手に成たものであると云ふ、或ひは然らん、さすれば烏丸光廣卿などのハイカラ公家、オツト又出たが此人の才覺ではやりさうな事である、堺の浦には此時代羅馬字つゞり位よめる洋學者も既に出來たであらう

板本は京都で慶長活版があるに相違ないと思ふが、見た事は勿論で聞いた事もない、大槻文庫の藏本は刊行年月は無いが、憾かに元和活字と見らるべき者である、舊主伊達伯爵家の御藏本であつたのを拜領したのである、秘藏の書物であつたが、一昨年先人磐溪が三十年祭のをり上野の美術協會で家藏器物の展覽會を三日間開いた、此書を初め阿蘭陀書の翻譯にかゝる者凡そ五百種を陳列した、其時何人かの眼に止つて居たと見ね、今度日英博覽會に出品したいが借してくれと事務所から申込があつたので、承諾してオマケに上野の圖書館にもある、高等師範學校にもあると注意して遣つたら、夫れ〳〵交渉があつて三通り揃へて英國へ出す事になつたのである

此三通りの書物は共に上中下に分册して上卷に二十條、中卷に四十條、下卷に三十四條通計九十四條で御伽草子の樣な譬へ話しである、高等師範の本は寛永十六年四月の奥付がある嵯峨版の活字である、友人秋山恒太郎君が同版の者を所持してゐる、帝國圖書館にも同種の本があるが奥付の刊行年月が缺けてる、夫れから萬治二年正月出版の繪入伊曾保物語がある、書林伊藤三右衞門の署名がある整板で活版で無い、師範校にも圖書館にも各壹部を所藏されてる、此繪入の本は此他にも往々眼にふれる

そこでだ、此繪入の圖案が最初いつた立圃の繪卷から來たのでは無いかと思ふんです、其圖案は立圃と光廣卿と二人で凝らした意匠であるかも知れない、すれば立圃の繪卷物が出來て其圖に因て伊藤三右衞門が普通の畫工にかゝせ挿圖にして彫刻させたと見てもよからうと考へるのです

萬治二年は立圃は六十歳で存生中です、夫から伊藤は京都か江戸か其處までまだ取調べをして置きません。此外にも話せばまだあるが大概にして置きませう

因みに一言申したいのは此伊曾保と同例の書物がある、葡萄牙の天文書を歸化人澤野忠庵が日本語に反譯してヤハリ横文字で書留めた、通詞西吉兵衛が讀んで儒者の向井元昇が竪文字に改めた、明暦中長崎であつた事です、向井が支那説を取て駁擊を加へ乾坤辨説と題してある、此書は珍本以上の珍本で稀有といつてよいもの家藏には御座ります

※ ※ ※ ※

●吉原細見に擬したる著述家と浮世繪師表



これは吉原の細見に擬して嘉永六年に出版した當代全盛江戸高名細見の一葉を原版のまゝ摸刻したのである、曲亭馬琴、山東京傳、式亭三馬、柳亭種彥、葛飾北齋、溪齋英泉等の如き大家歿後の文壇が如何に寂寞たりしかを知るに足るであらう

此細見に擬したるを訂正再版したものと見るべき一冊が明治元年の冬に現はれた、それには「著述屋戯作」として

春水　魯文　有人　梅彥　應賀
秀賀　雲峰　文彥　定岡　綱守
露香　春笑　琴路　念魚　種丸
おろか　京雀

次に「浮世屋繪四郎」としては

貞秀　芳虎　芳幾　芳年　國周
國輝　國貞　國明　芳春　芳盛
芳藤　房種　重次　廣重　重清
國久　一豊　國藏　芳富　芳延
國時　國玉　芳豐　芳信　艶長
幾丸　年晴　周延　年次

（國貞廣重等いづれも二世である）

天下はマダ泰平とならない維新騷擾の際とはいへ、其凋落察するに餘りあるであらう、此狀態を以て明治は十五六年頃まで繼續し、戯作界では假名垣魯文、贅々亭有人等が其覇權を握り、浮世繪界は月岡芳年の獨占となつて多くの秀才を養成したのである

因みにいふ、右江戸高名細見の作者は吉原細見の版元より故障を申込まれ「細見株を持てる我々に無斷で細見まがひの書册を出版するとは不埒至極である」との嚴談を受け、結局あやまり證文を入れて書册は絶版とする事で示談が附いたといふ傳說がある

今日は他人の出版物に擬した戯作は勿論、其正眞物に擬したイカサマ物を出版しても咎められない事になつて居るが、幕末時代には右傳說の如き事實があつたらしい

●ほにほろ考



北尾重政畫

（假名手綱忠臣較）

紙張子の馬を腰に附けて踊り走るをほにほろと云ふが、その起原は何時頃であるか、又何故ほにほろと云ふかはトント分らない、あらゆる版本にもほにほろの考証は出て居ないやうだ、『吾妻餘波』に小圖を出して「登るはほにほろ」とあるのみ、山東京傳の戯作、享和元年の版本『假名手綱忠臣較』といふ黃表紙には意馬心猿といふ趣向で全篇の人物畫に悉く紙帳子の馬を附けてあるが、ほにほろの說明は少しも無い、「腰付馬」とあるのみでほにほろといふ語も記して無い、昔はほにほろと云はないで「上るは下るは」と云つたらしい、東京帝國圖書館の藏本『世の中のくさ〱記』といふ寫本中に

○上るは〱下るは〱

二人にて一人は唐人姿又は武者姿にて馬上なり、今一人は常躰にて四文づゝにて見せる、羽子板の如き板に二寸程の丸き硝子をはめ、是を子供に持たせ、右の唐人か武者其眼鏡の先に立て笛を吹き又は両手をふりて見せる事なり、一人は子供の傍に立ておかしげなる聲にて「ソリャ上るは〱いかづちのこではにほろ〱〱下るは〱

又『世渡風俗圖』といふ寫本中にも一人の男飴を求めたる者に將門眼鏡といへる一ツ物の七ッに見ゆる眼鏡を渡して口上をいふ、又一人の男は唐人の馬に乘たる形にて口上の指揮に從ひ運動す云々

以上の記事に據つて考へて見ると、ほにほろは寬政の頃初めて流行したものらしい、それでほにほろといふ語は和蘭陀語らしいから、此腰付馬も和蘭陀より渡來したものであらうと思ふ

或人の說に、初めは武者姿のみであつたが、安政の頃唐人姿のものが現はれたのであると云ふ、そして此種のもので此ほにほろほど長く續いて流行したものはないさうである



龜井戸豐國畫

（世の中のくさ〱記）



畫者不詳

（世渡風俗圖）

●式亭三馬の偏頗

東京　不倒

名作二十三種の黄表紙

黄表紙通の説くところによると、黄表紙の名作といふは二十三種に限られてゐるやうだ、黄表紙といふものは斯くも佳作の少ないものか、吾輩大いに疑ひなき能はず。一体名作二十三種といふは誰が選定したのか。いふまでもない、三馬の『億説年代記』である。

三馬が此年代記を編するに當つて、どういふ考へを持てゐたか、素より今日之を知る事は出來ないが、其作に現はれた所を見ると、まことに偏頗な選び方のやうに思はれる。享和二年即ち年代記の出來た時は、黄表紙は既に澆季には近づいてゐたが、まだ〳〵滑稽趣味の失せるまでには至らなかつた。作者には三馬をはじめ京傳、馬琴、石上、通笑、楚滿人一九、慈悲成等錚々たる者があつた。中にも京傳は前後に通じての名作者、誰をさし置いても彼れの一作や二作は加へねばならぬ。然るに三馬は、畫工としての政演を出してゐるが、作者としての京傳は遂に一言も及んでをらぬ。尤も三馬は當時出作する御存知の作者はこゝに略すと遁げてはゐるが、其の遁げを張るのは、同時代の作者を除外する口實であつたかも知れぬ。三馬が擧げた六家選の如き故人か或は休みの人で、當時の文壇には最早生命の無い人ばかり、二十三種といふも

一金々先生榮華夢　戀川春町作
一高慢齋行脚日記　同
一鼻峰高慢男　同
一三幅對紫曾我　同
一親敵討腹鼓　同
一楠無益委記　同
一鸚鵡返文武二道　同
一悦贔屓蝦夷押領　同
一三升增鱗祖　平澤喜三二作
一縺入七人化粧　同
一桃太郎後日噺　同

稗史億説年代記



一嘘多雁取帳　同
一虚言八百萬八傳　同
一長生見度記　同
一文武二道万石通　同
一大違寶船　芝全交作
一遊妓寔卵角文字　同
一鼻下長物語　同
一大悲千錄本　同
一拜壽仁王參　同
一十四傾城腹の內　同
一夫從以來記　萬象亭作
一莫切自根金生木　唐來三和作

斯くの如く春町が八種、喜三二が七種、全交が六種、萬象亭と三和とが各一種づゝで、他は悉く落第とはひどい。成程春町喜三二なども誰が見ても名人には相違ない。けれども一人から七八種も取るなら、まだ外にいくらも選ぶ作があつたであらう、萬象亭の如きは、名人でも上手でもなく唯家柄といふだけである。必竟三馬が日頃崇拜してゐる人々だけで自家と競爭範圍にゐるものは皆省いてをる。實に我田引水の選定で、そこが即ちおつけ年代記かも知れぬ。よし之を善意に解するも此年代記は黄表紙中過去の一時期を擧げたゞけで、現代は含まれてゐないから、之を以て黄表紙全体を代表する事は出來ぬ。されど盲目千人の世の中、此年代記に載せてあるから名人名作、載せてないから平凡拙作として了つたのは實に驚かざるを得ぬ。京傳の作の如き、當時大いに流行したので今も古本が澤山あるからでもあらうが、年代記に載せられなかつた爲に、他の作者に比すると遙に價格が廉いのは、飛んだ災難である。大きく云へば三馬が後世を誤つた事實は夥しい。といへばとて、吾輩は二十三種の黄表紙をつまらぬ物といふのではない、あれも名作には違ひないが、黄表紙の名作はまだ外にいくらもある。此偏頗な選定に對し、世人が餘り過信をして、今も黄表紙は二十三種に限ると云てをる人々に一言するのである



●蜃氣樓（上）

蜃氣樓とは、蜃の氣が海上に發して樓閣の景を作るといふ科學幼稚時代の迷想から出た名であつて、支那では蜃樓、又は海市、山市などと云ふが、日本では一に浮嶋とも云ふ、此蜃氣樓の現出するのは、空氣密疎の作用によつて、陸上の實景が空中に反映するのであると云ふ事を知らなかつた時代には、立派な學者も蜃氣の發するものとして考説を並べてある石川雅望の「寢覺のすさび」には「海中にて氣を吐くものは蛟の如き形したる蜃といふものなり、大なる蛤をも蜃といへるより混じておぼれたる人の蛤の上に樓臺の形を畫きたるを見て蜃氣樓なりと云へるは誤なり」など記し、又小山田與淸の『松屋筆記』にも支那の雜多の古書を引いて彼是と辯説してある



これに反して橘南谿の『東遊記』（寛政七年版）には越中魚津の蜃氣樓の事を記して、支那や日本で蜃氣より起るものと信ずるの愚説を駁し「魚津は北海に臨める地なるに、向ふの方七八里と思ふ程に能登國の山を屛風の如くに見る、魚津の海は東よりの入海なり、海中より蒸登る陽氣、向ふの山に映じて色々の形を見るなり、向ふに當なく數百千里見晴したる大海にては陽氣登るといへども、向ふの當なければ映ずることなくして、人の目に見えがたしと覺ゆ、伊勢の桑名の海にも三十年五十年の内にはたま〳〵蜃樓を結ぶ事ありといふ是も向ふに尾張三河の山を受てあるゆゑなるべし、又安藝國にても偶々はありと云ふ、是も向みに山あり、奇を好む人は三四月の頃越中に遊びて此樓臺を見るべき事なり」と科學的の解説を附けてある、流石は文學好のお醫者さんだけあつて、超凡の思想を抱いて居たことが察せられる

茲に挿入してある扇掛の意匠繪は、浮世繪の名家向左堂窪俊滿の畫幷に細工と明記せる「四季扇繪合」といふ珍本中より拔寫したものである

●新聞紙と浮世繪師

今を去ること滿二十四年前、卽ち明治十九年四月、『此花』記者が二十歲の時、自ら「日本全國新聞雜誌細見」と題する一冊物を編輯出版した、其中には當時發行せる新聞紙七十三種の代價廣告料發行所等を詳記し、尙各社に照會して記者及び擔任畫工の氏名をも掲げてあるが、當時繪入の新聞は全國に十七種しかなかつた、其中大阪の『日本繪入新聞』、金澤の『加越能新聞』、京都の『日出新聞』、東京の『燈新聞』社からは畫工名の通知を得なかつたので漏れて居るが、十三種は如左である

△繪入黃金新聞	（名古屋）	丹羽禮山
△繪入自由新聞	（東京）	新井芳宗
△繪入朝野新聞	（東京）	尾形月耕
△繪入扶桑新報	（名古屋）	後藤芳景
△繪入新潟新聞	（新潟）	澤井寛壽
△東京繪入新聞	（東京）	落合芳幾 樋口種員
△金城たより	（名古屋）	何文京
▲朝日新聞（現存）	（大阪）	武部芳峰 三谷貞廣
△彌生新聞	（高知）	中谷洞左
△改進新聞	（東京）	歌川豐宣 楊洲周延
△今日新聞	（東京）	稻野年恒
▲土陽新聞（現存）	（高知）	藤原信一
△作新日報	（津）	歌川豐次



●飛行の失敗

本誌前號に花廼散人氏の寄稿によつて「昔の飛行機」といふ事を載せたが、樹下石上戲作



歌川豐國畫で寛政十一年版の「金春徳和家隱居」といふ黄表紙に、右の如き飛行法を發明して空中高く揚がつて見たが、旋風のために絲を切られて泥田に落ちて困難したといふ滑稽小説を載せてある、今の飛行機發明者たる人々にも、これに類似の失敗談があるやうであるのは可笑い

●支那の浮世繪

日本の浮世繪は土佐派の有職畫、狩野派の人物畫等より脱化したものであると云ふが、土佐派も狩野派も、其淵源は漢畫より出たものである、日本の浮世繪は其兩派より脱化したものであらうが、又明の仇英などの人物畫を直接摸倣したものと見るべき點もある、沁埜公の著「明畫錄」を調べて見ると、仇英は尤も人物畫に巧であつて「其髪翠毫金絲丹縷素精麗艶逸」と記してある、今日我國で浮世繪派の鈴木春信か喜多川歌麿等の美人畫を褒めるやうな文句に似て居る、仇英は確かに支那の浮世繪師と云つて可い、此仇英派の畫を日本の浮世繪師が摸倣して居るのもある

明の鄭文昻の撰「名媛詩彙」中より日本の藤原昌琳といふ人が、延寶六年に本朝女三十六歌仙に擬し、三十六女を撰出して「名媛詩仙集」といふ大本二冊物を出版したが、其挿畫は明畫を摸寫するに、畫者自己の筆意を混じて下の如く描いてある、此畫者の何人なるかは未詳であるが、延寶頃より寶永頃までの間に此畫者の描いた繪入本が數十種ある



花戰

四月八日の大阪新町九軒

貞享元年版(諸艶大鑑)



繪師の狂歌

(一)

○夜の梅見て戻りし女房に
いひわけくらき袖の移り香 (窪 俊滿)

○山々の一度に笑ふ雪どけに
そこは沓々こゝは下駄〳〵 (北尾政演)

○寫し繪に及ばぬ筆の墨田川
霞ひと刷毛引いてのどけき (細田榮之)

○髮結はぬ師走女と見し枝も
春はめだちてつくる青柳 (岸 文調)

○肩くるま乘せし女に首たまへ
かぢりつかれてはまる川越 (歌川廣重)

○すつてよくにたる味噌汁坊主こそ
これやしやくしのすくひなるらん (曉 鐘成)

繪師の本業

(略)

△雛屋立圃……人形師
△鳥居清元……俳優
△奧村政信……本屋
△石川豐信……宿屋
△小松百龜……藥種屋
△北尾政演……煙草入屋
△戀川春町……戲作
△菊川英山……造花業
△歌川廣重……火消同心
△蹄齋北馬……武士
△歌川一豐……八百屋
△曉 鐘成……味噌屋

△菱川師房……染物業
△宮崎友禪……扇工染物業
△鳥居清滿……三味線屋
△富川房信……本屋
△橘 岷江……縫箔師
△松屋耳鳥……骨董屋
△窪 俊滿……彫金工
△池田英泉……戲作
△岩窪北溪……魚屋
△歌川國信……御小人目附
△岳亭春信……戲作
△吉田魚川……彫刻師

此花記者入獄紀念繪



●櫻と梓

京都 花廼散人

「かへらじとかねておもへば梓ゆみなきかずにいる名をぞとゞむる　正行

は櫻井に縁あり、我國の版木に櫻あり支那の版木に梓あり、そこで版木の分に就て少々饒舌つて見る、先づ櫻といへば敷嶋の道の謳はれ者として將亦花王兼木王として人の能く知る所である、これに對する梓は如何ものであるのかと早速本草綱目をひねくつて見ると梓、「釋名」木王「時珍」曰 梓或は杍に作る其義未だ詳かならず、按ずるに陸佃が埤雅に云、梓は百木の長たり故に梓を呼で木王と爲す、蓋し木の梓より良きは莫し故に書には梓材を以て篇に名づけ禮には梓人を以て匠に名づけ朝廷は梓官を以て棺に名づけたり、羅願が云屋室此木有らば則ち餘材皆震はず其木王たること知るべしと載つて居る、成程無理も無い次第であるとは言へ、現在使用の櫻を退け者にして「梓行」「壽梓」「藏梓」序文などに「梓にちりばめ云々」など、好事ばら無くても宜さゝうなものだがと、僕は何時もこれを見る度に癪に障つて堪まらないのである、これは畢竟足利時代の五山僧等が頻りに元版翻刻をやつてチャンカラがつたのに始り、寛永頃に至つてはソロ〳〵本屋どもが明版翻刻をやり出したものだから自然原本の「梓行」や「壽梓」などが眼につくといふ始末、降つて享保頃にはチャンカラの權化ともいふべき荻生徂徠といふ奴がむやみにチャン熱を吐き出したに從つて出入の嵩山房などが良い事のやうに思つて、彼にも此にも梓とやつたものだから、つひ〳〵後の者までがこれを眞似るやうになつたのである、それもわざ〳〵梓を用ひたのならば兎も角だが、然も無くして徒らに梓呼はりをするといふのは實に怪しからんじやないか心ある人は宜しく「櫻行」とやるべしだ

因みに、版木の廢物を本屋仲間でカッチンカッチンと稱して居るのは、揚弓屋がカッチンと鳴る的に使ふためわざ〳〵櫻の枯板を求める所からださうな、そこへ梓弓を持つて來ると少々滑稽的になるワイ

（此花記者曰）我國にても古代の版木には梓を使用せしなりといふ説もあるが、その虚實は知らない、元祿三年版の「人倫訓蒙圖彙」には石刻（石摺）を版の初めとして「櫻木の板は善福といふ者彫り初めしとかや」とあるいづれにしても、櫻版を梓行といふのは古實拘泥の語である、花廼散人氏が諧謔的の辯説を下したのは面白い

●繪師と作者（下）

▲葛飾北齋と曲亭馬琴　文化五年江戸の書肆須原屋市兵衛、三七全傳南柯夢七冊を刊行せり、馬琴の著作にして北齋の挿畫なり、此南柯夢の末段三勝半七が情死に赴く所に於きて、北齋野狐の食をあさる體を畫きて寒夜の景物とす、馬琴此板下を見て曰く、此の如き蛇足を添ふるが爲に、情死の男女は恰も野狐に誑惑さるゝ者の如し、速に削除すべしとて板下を返しければ、北齋大に憤り、彼は余が挿畫によりて著作の意を補ふを知らざるなり強て削り去らんとならば、余は自今馬琴が著作の挿畫には筆を下さずといふ、版元甚だ迷惑し百方奔走して漸く和解を結びたりと文化九年江戸の書肆榎本平吉、三七全傳第二編南柯後記八冊を出板せり、北齋又此挿畫をかきしが、再び挿畫の事より議論を生じ、二人終に交りを絶ちしといふ、一説に後記卷の一、六丁裏、刀屋同樹が立廻りの所に於きて馬琴同樹をして口に草履を含み裾を褰ぐるの樣を畫かんことを請ふ、北齋笑つて曰く、此汚穢物誰か之を口にすべき、若し然らずとせば、君先づこれを口にせよ、馬琴大に怒る、これ二人が絶交の原因なりと（葛飾北齋傳）

但し北齋傳著者は此事を非認せり

●宮崎友禪は日置氏

虹衣

本誌初號「松竹梅」の項中、宮崎友禪の事を記した條に

貞享五年版の「友禪ひいながた」といふ四冊本も友禪の筆であると聞くが、卷末には、「友盡齋日置清親圖之」とある云々

と記してあつたが、「俗耳鼓吹」にも

貞享五年版友禪ひながた(四卷有)序に宮崎氏友禪といふ人有て繪に工みなる事いふ計なく、古風のいやしからぬをふくみて今樣の香車なる物數寄にかなひ云々

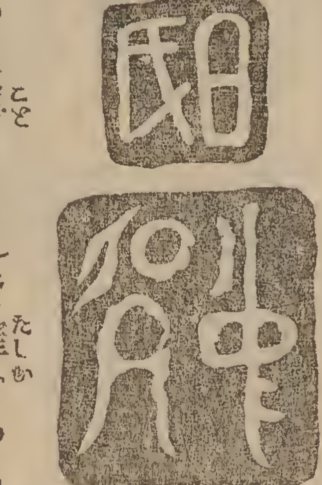
とある、是によつて見るに「友禪ひいながた」の、友禪筆であることは疑ひのない事實のやうである、若し果してこれを事實としたならば、同書卷末に署名してある友盡齋日置清親なる人は、即ち宮崎友禪の異名でなければならぬ事になるが、友禪に就ては深江友禪また梅丸友禪などいへる異姓を記した書物はあるが、未だ日置云々と記した本は無いやうである、よし無いにしても此日置清親といふのが宮崎友禪の本姓本名であつて、宮崎といふのが俗姓としたならば少しも差支へはないのである、併し宮崎友禪、姓は日置、名は清親と明記したもの無い限りは、斷定する譯にはゆかぬが、此日置清親といふ人に就て考ふるに、「都繪馬鑑」所載、京都祇園社掛額村山座狂言の圖に「天和二年壬辰正月二十一日、月直氏清親筆」とある、此月直清親は日置清親の誤寫であらうと思ふ、日月置直は焉馬魯魚に類して居る、加之、年代といひ、畫樣といひ、所も同じ京都であるから同じ人であるに違ひない、此日置清親が宮崎友禪であるか否かは博雅諸子の考證を待つことゝする

(此花記者曰)　予頃日東上中、帝國圖書館員朝倉無聲氏予に告げて云ふには「君は此花初號に、宮崎友禪の版畫は梶の葉、鴫羽搔、友禪ひいながた等にあるのみで「版畫は此外にない」と斷言されたが、帝國圖書館の藏本『和歌物わらかひ』といふ三冊物は、友禪式繪入の歌書であつて、元祿五年版であるが、卷末に友禪畫之と立派に署名してある、尚其印章に「日氏、中賀」とある、ひいながたの友盡齋日置清親に照合すると日氏とは日置氏の略であらうと察せられる、友禪は宮崎氏をも稱へたやうであるが、本姓は日置氏に違ひなからう、マサカ日下氏ではあるまい、それから又友禪は染工だといふ説と、畫工だといふ説とあるが、肩書に扶桑扇工とあるから、初めは扇工であつて、後に染工をも兼ねた畫工であらう云々」と、因つて予は右の「物わらかひ」といふ歌書を借覽したが、半紙本三冊物であつて、挿畫數十面は友禪の筆たること疑ひなく、卷末には左の如く「洛陽産扶桑扇工友禪畫之」と一行に書し、奥附には

元祿第五壬申歲姑洗吉辰
洛下書堂尾崎七左衛門　版行

と署してある、宮崎友禪は日置氏たることこれで確らしい

洛陽産扶桑扇工
友禪畫之



尚友禪が扇工であつた事もこれで確である、後に染工になつたのでは無く、當時既に染工をも兼ねて居たらしい、元祿六年版の「古今四場居百人一首」中、京都の役者市川香織の項に「此君の衣紋つきをば友禪坊も畫は勿論夜も氣をなやまし心をやき筆持ながら夜をあかすこときつい事では御ざんせんか」とあるに據つて、當時友禪が役者の衣裳にも苦心して居た事が明かである

覗機關に入れて見る繪



此覗機關に入れて見る繪を「浮繪」と云つたのである、浮繪とは樓屋人物山野樹木等が實體を見るが如く浮いて見へるからの名である、今の寫眞術の出來ない前には、祭禮などの時「サア〳〵御覽じろ、十二段がへしの大機關」と叫んで「こゝは播州舞子の濱、向ふに見へるは淡路嶋」とか「さくゥらアのオ宗五郎は橋の下、アーそりや……」と云つて、五文十文の見料を取つて覗かせた繪は皆此「浮繪」である

天和貞享頃の版本にも覗き繪の圖があるから、其頃既に浮繪らしいものがあつたのであらうが、最も盛んに行はれたのは、享保頃より文化頃迄である、雅俗文庫の所藏として浮繪百數十枚を蒐集して居るが、其畫者は勝川春章、春扇、春朗(北齋)、榮松齋子興、同長喜北尾重政、政美、喜多川歌麿、玉川舟調、溪齋英泉、葛飾北壽、初代歌川豐國、國安、國直、國滿、國丸、國虎、豐久、貞秀等であつて、畫題は名所、社寺、演劇、相撲、遊樂、漁獵等であるが、其中にも江戸名所と忠臣藏とが最も多い、一新機軸を出したと稱へられる北齋や廣重などの繪は、皆此浮繪から脱化したものであらうと思ふ

●宮崎友禪は日置氏

虹衣

本誌初號「松竹梅」の項中、宮崎友禪の事を記した條に

貞享五年版の「友禪ひいながた」といふ四冊本も友禪の筆であると聞くが、卷末には、「友盡齋日置清親圖之」とある云々

と記してあつたが、「俗耳鼓吹」にも

貞享五年版友禪ひながた(四卷有)序に宮崎氏友禪といふ人有て繪に工みなる事いふ計なく、古風のいやしからぬをふくみて今樣の香車なる物數寄にかなひ云々

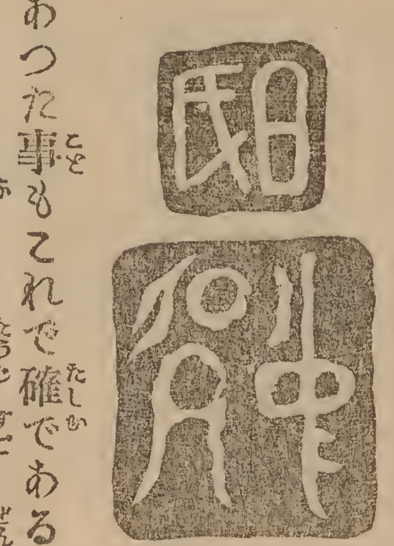
とある、是によつて見るに「友禪ひいながた」の、友禪筆であることは疑ひのない事實のやうである、若し果してこれを事實としたならば、同書卷末に署名してある友盡齋日置清親なる人は、即ち宮崎友禪の異名でなければならぬ事になるが、友禪に就ては深江友禪また梅丸友禪などいへる異姓を記した書物はあるが、未だ日置云々と記した本は無いやうである、よし無いにしても此日置清親といふのが俗姓としたならば少しも差支へはないのである、併し宮崎友禪、姓は日置、名は清親と明記したもの丶無い限りは、斷定する譯にはゆかぬが、此日置清親といふ人に就て考ふるに、「都繪馬鑑」所載、京都祇園社掛額村山座狂言の圖に「天和二年壬辰正月二十一日、月直氏清親筆」とある、此月直清親は日置清親の誤寫であらうと思ふ、日月置直は焉馬魯魚に類して居る、加之、年代といひ、畫樣といひ、所も同じ京都であるから同じ人であるに違ひない、此日置清親が宮崎友禪であるか否かは博雅諸子の考証を待つことゝする

(此花記者曰)予頃日東上中、帝國圖書館員朝倉無聲氏予に告げて云ふには「君は此花初號に、宮崎友禪の版畫は梶の葉、鴫羽搔、友禪ひいながた等にあるのみで「版畫は此外にない」と斷言されたが、帝國圖書館の藏本『和歌物わらかひ』といふ三冊物は、友禪式繪入の歌書であつて、元祿五年版であるが、卷末に友禪畫之と立派に署名してある、尚其印章に「日氏、中賀」とあるひいながたの友盡齋日置清親に照合すると日氏とは日置氏の畧であらうと察せられる友禪は宮崎氏をも稱へたやうであるが、本姓は日置氏に違ひなからう、マサカ日下氏ではあるまい、それから又友禪は染工だといふ說と、畫工だといふ說とあるが、肩書に扶桑扇工とあるから、初めは扇工であつて、後に染工をも兼ねた畫工であらう云々」と、因つて予は右の『物わらかひ』といふ歌書を借覽したが、半紙本三冊物であつて、挿畫數十面は友禪の筆たること疑ひなく、卷末には左の如く「洛陽産扶桑扇工友禪畫之」と一行に書し、奥附には

元祿第五壬申歳姑洗吉辰
洛下書堂尾崎七左衛門　版行

と署してある、宮崎友禪は日置氏たることこれで確らしい

洛陽産扶桑扇工
友禪畫之



尚友禪が扇工であつた事もこれで確である後に染工になつたのでは無く、當時既に染工をも兼ねて居たらしい、元祿六年版の『古今四場居百人一首』中、京都の役者市川香織の項に「此君の衣紋つきをば友禪坊も畫は勿論夜も氣をなやまし心をやき筆持ながら夜をあかすこときつい事では御ざんせんか」とあるに據つて、當時友禪が役者の衣裳にも苦心して居た事が明かである

浮繪考

藝苑日渉に池北偶談曰、西洋所レ製玻璃器多ニ奇巧一、云々又畫ニ樓臺宮室一張ニ圖壁上一、從ニ十步外一視レ之、重門洞開層級可レ數云々、虞初新誌黃莊小傳に有ニ遠視畫一即浮畫也、浮世繪類考奥村政信の條に俗に浮畫とて名所或は富士卷狩の圖曾我十番切に遠景を奥深く見ゆる圖をかき板行せしなり、其頃大に流行す云々、古畫備考に歌川豐春一龍齋と號す、近來浮畫を錦畫にかき出せり、寶曆頃の浮畫にまされり、武江年表延享年間の流行物をあつめたる條に遠景の山水を浮畫といふ、又享和年間の流行物をあつめたる條に北壽(北齋門人)浮畫上手、又浮世繪師二代鈴木春信(司馬江漢)云々の條に此頃まで遠景を畫きたる一枚繪を浮繪といふ、今此稱なし、稗史臆說年代記に歌川豐春浮繪に名ありと按ずるに、浮畫は訓みてウキヱ又ウカシヱ漢名遠視畫、もと西洋の畫法にして其の我國に傳はりしは何れの時なるを知らず(油繪は慶長元和の頃既に我國に傳はりたり)其の盛に行はれしは元文延享の頃にして、芝居遠景の道具見世物看板等に至るまで皆此の法を用ゐたり、享和年間司馬江漢更に西洋の畫法を傳ふるに及びて其の法益々行はれ豐春北壽の如き皆この畫法を善くし、北齋廣重の山水も亦皆この法に據らざるなし　(日本繪類考)

此覗機關に入れて見る繪を「浮繪」と云つたのである、浮繪とは樓屋人物山野樹木等が實體を見るが如く浮いて見へるからの名である、今の寫眞術の出來ない前には、祭禮などの時「サア〱御覽じろ、十二段がへしの大機關」と叫んで「こゝは播州舞子の濱、向ふに見へるは淡路嶋」とか「さくゥラアのォ宗五郎は橋の下、アーそりや……」と云つて、五文十文の見料を取つて覗かせた繪は皆此「浮繪」であるから、其頃既に浮繪らしいものがあつたのであらうが、最も盛んに行はれたのは、享保頃より文化頃迄である、雅俗文庫の所藏として浮繪百數十枚を蒐集して居るが、其畫者は勝川春章、春扇、春朗(北齋)、榮松齋子興、同長喜、北尾重政、政美、喜多川歌麿、玉川舟調、溪齋英泉、葛飾北壽、初代歌川豐國、國安、國直、國滿、國丸、國虎、豐久、貞秀等であつて、畫題は名所、社寺、演劇、相撲、遊樂、漁獵等であるが、其中にも江戸名所と忠臣藏とが最も多い、一新機軸を出したと稱へられる北齋や廣重などの繪は、皆此浮繪から脫化したものであらうと思ふ



●浮世繪師の名物畫　(四)

鈴木春信の江戸三美人

鈴木春信は谷中笠森稲荷の茶屋鍵屋の娘お仙、淺草楊子店柳屋仁平次の娘お藤、淺草の茶屋蔦屋のお芳(之を當時江戸の三美人と稱す)の姿を錦繪にゑがきて出せしに、世人大に持て囃せり　(浮世繪類考)

●柳の風

虹衣

▲春風に空で武者繪が閧の聲

これは多くの武者繪の凧が春風にツナッて居るといふ意、其繪の武者であるところからウナリを閧の聲といつたのである

▲彩色の中に墨繪は奥家老

凧繪の名人は歌川國次

彩色といふのは極彩色を施した錦繪の意即ち御殿女中のきらびやかに着飾つた態をいひ、これに對して黒紋付に黒裃の着付けでキチンと座つて居る奥家老を墨繪に喩へたのである

▲母の目に涙娘も一枚繪

これは「孝行に賣られ」とある句の通り、病父を養ふ人參を得ん爲め藝娼に賣られて行く娘と母親との別離の態を詠むだのであるが、それを藝娼と云はず一枚繪といつたのは、當時藝娼の一枚繪が盛んに流行して居た爲めである

▲堀江町春狂言を夏見せる

此堀江町といふのは江戸日本橋堀江町の事で、團扇問屋の澤山あつた所である、句の意味は春狂言の役者似顔を、夏賣出す團扇に描いてあることを云ふのである其繪は大抵豐國の筆になつたらしい

現今浮世繪師　(四)

鰭崎英朋

師門　右田年英
俗稱　鰭崎太郎
年齡　三十一　(明治十三年生)
生地　東京芝
現住　東京市赤阪區丹後町百三番地



鏑木清方

師門　水野年方
俗稱　鏑木健一
年齡　三十三　(明治十一年生)
生地　東京神田
現住　東京市日本橋區濱町二丁目十二番地



片山春帆

師門　武内桂舟　大出東皐　河合玉堂
俗稱　片山春雄
年齡　三十一　(明治十三年生)
生地　東京築地
現住　東京市牛込區新小川町一丁目十二番地



鈴木錦泉

師門　無
俗稱　鈴木爲之丞
年齡　四十四　(慶應三年生)
生地　和歌山
現住　大阪市南區末吉橋通四丁目九番地



●剃髮奇談

左の奇談は根岸肥前守筆記の『耳嚢』といへる古寫本中に「惡しき戲れ致す間敷き事附惡頓智の事」と題せる一項を拔錄せしものなり、其事の虛實は兎に角其話柄甚だ面白くして且つ諸人の箴戒となるべき事なり

安永九年頃の事なり江戸神田邊に頓作滑稽をなして人の笑を得て家業とする者あり獨身にて常々酒を好み飽く事なし同所に相應に暮しける友達申し合せ伊勢へ參宮するとて路次の慰みに右獨者を誘引ければ路銀無之由を答ふ路銀は兩人にて如何樣にもせんと云ひければ然らばとて三人打連れ品川より神奈川迄急がぬ旅なれば此處にて一盃かしこにては一樽を空とし其日神奈川宿に泊りける翌朝明前に孰れも神奈川を立たんと起出でけるに彼の獨者は酒の過ぎける故にや草臥伏して度々起せども目を覺さず兩人の連ふと思ひ付き彼者を醉中に出家させれば好き慰みなりと密に剃刀を取出し髮を剃り靑道心となして日出の頃何又起しければ漸く起出で頭を撫て大きに驚き兩人の戲れに爲しぬらんと恨みけれど曾て知らざる由答ふ猶執へて言けれども聊か覺ねなしと陳じける故今は詮方なし出家にて箱根の御關所も通り難し伊勢も出家は禁じ給ふ事なれば遙に詣でゝ益なし是より江戸へ歸り候はんと暇乞しければ兩人も詮方なく悔けれど明白にいはん樣もなし路銀與へて江戸へ返しける彼男つく〴〵思ひけるは斯く我を慰み情なくも剃髮させぬること恨めし此遺恨面白く返さんと疾く工夫して芝邊にて古袈裟を調へて誠

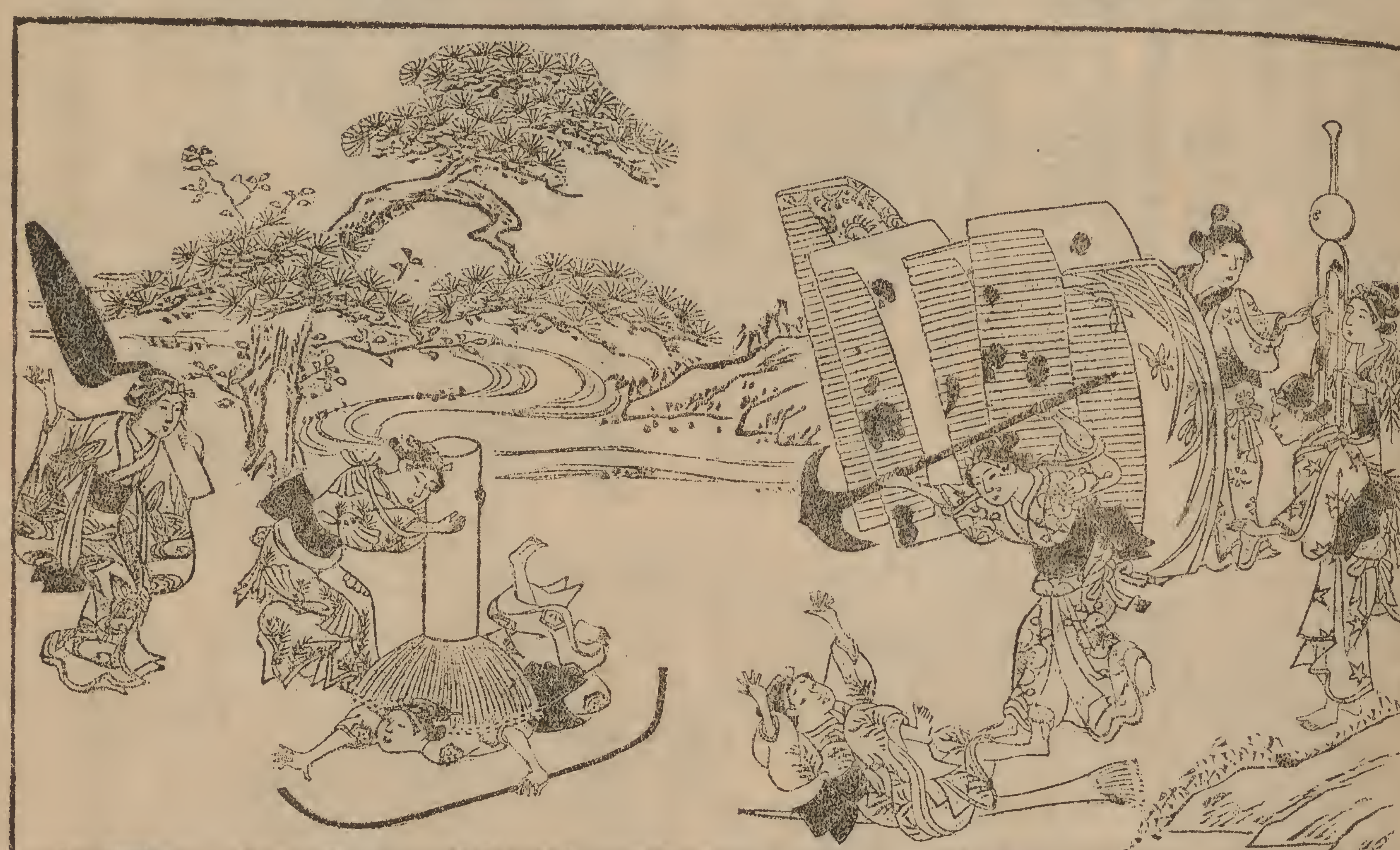


の出家姿となり四五日過ぎて彼の兩人の宅へ至りければ妻は驚き如何なれば斯る姿とはなりて早く歸りけるやと尋ねければ彼者淚を流し斯く成る上は推量し給へ道中船渡にて岩に乘掛けるにや破船致し三人とも浮ぬ沈みぬ流れける我は運強く岩に流れかゝりしを皆々打寄り助船にて引上げられ二人の者は尋ねけれども生死も知れず其外の乘人行方なきゆゑ無常を觀じ出家して廻國に出る心得なれども友達家內へ知らせざるも便なしと思ひて立歸りしなりと淚交りに語りければ妻子共の歎き見るも中々痛ましき有樣なり彼の男も左あらぬ体にて共々哭沈みける妻は餘り絕がたさに妾も髮押切り出家廻國せんと云ひければ彼男廻國の事は親類と相談し給へ出家の事は兩人菩提のため然るべしと申述べ我等は是より廻國に出候由申置き行方なくなりけり兩人の妻は菩提寺を賴みて出家染衣の身となり懇に菩提を吊ひければ親類は餘り仕過しならんと先づ彼の破船の樣をも聞かんため飛脚を出し候へかしと彼是相談の內二人の者は伊勢參宮滯りなく仕通して歸りければ兩人の妻は新尼となりて夫を見て大に驚き如何なる事とおつ〳〵尋ねければ始終の事共語りよしなき徒事して彼者に謀られける事の淺ましさよと後悔すれども甲斐なし、右新尼還俗して此頃は四五寸も髮生たりといふを聞きし者來りて語り笑ひぬ

右は此花記者が今より十五年前に發行せし雜誌に拔載せしものなるが、その事の奇警は今日これを喜劇に翻案して、曾我廼家一座の如き者に演ぜしめしならば、最も興趣あるものたらん乎

婦人の虛榮競爭心

北尾辰宣畫　明和六年版（繪本色あらそひ）



乘合舟（甲）

竹原春泉齋畫　享和元年版（百人一笑）



●繪草紙の起原　朝倉無聲

「此花」記者曰く、朝倉氏「日本小說史」の稿あり、今同氏の許諾を得て茲に其一節を抄出する事とせり

草雙紙、一に繪草紙は、足利時代の繪卷物のうち童話體のもの、即ち童子物語、猿草子、朝顔露物語等の如きもの縮刷せられしより、其源を發せり、而して其起原の時代に就ては未だ詳に知るを得ずといへども

「正章千句」安原貞室著、正保四年作、慶安元年版に

大方は戀路をかける草雙紙
むかしも物は思ひはんべる

又

けふよりはいろはちりぬる假名月
しぐるゝ窓にひらく繪草紙

などあれば、此等名目の古きを知るべく、萬治二年四月二日振物賣改の町觸に、草雙紙賣なる名稱あれば、當時既に世に行はれし事明かなり、而して其内容につきては

「懐子」松江重賴著、萬治三年刊に

鼠の嫁入うそ姫の戀くさまて事のためしに引ぬはなし

「醍醐隨筆」中山三柳著、寛文十年刊に

程朱を學ぶ人も經書の外はこと〳〵く雜學なりと聞もいれず鼠の草紙などのやうにおもふ

「賑草」灰屋紹益著、刊年不詳に

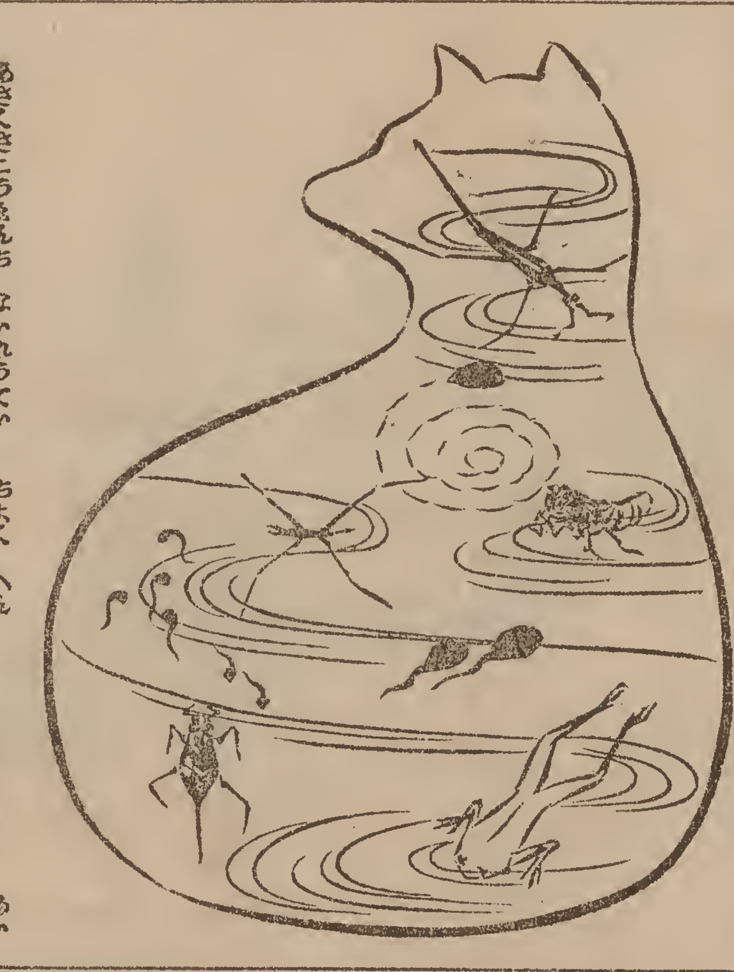
鼠のさうしの聟しうとの歎きくやうに成ぬべし

などあれば、發生期の草雙紙には兒童の翫具として、最も鼠嫁入の歡迎せられし事を知るべく、其起原や實に遠しといふべし

斯くの如く發生期に於てはたゞ草雙紙繪草紙と呼びならはせしも、世の進歩すると共に、其内容はもとより、形式に於ても種々のもの出で、單に草雙紙繪草紙と呼ぶのみにては、頗る紛らはしきを以て、之を總稱とし、安永の頃より其形式によりて新名稱を附して區別するに至れり、即ち唐紙表紙を行成表紙本、丹表紙を赤本、黑表紙を黑本と稱するが如し、而して此等の中先駈して世に出でしを所謂行成表紙本なりとす

行成表紙本は草雙紙の起原にして正保前後既に世に行はれしものなれども、現今傳はる所極めて稀なるは、由來此等の草雙紙は主として兒童の玩具とせられしを以て直ちに破毀せられ、永久に保存するものなきが上に、江戸にのみ行はれしかば、交通不便なる當時にありては、他に流布せざりしを以てなり、今日發生當時の狀態を詳叙すること能はざるは遺憾なりとす

●浮世繪師逸事（一）



▲松本芳延の水蟲集め　一勇齋國芳の門人一俠齋芳延（松本彌三郎）は、江戸ッ子氣質の奇人であつて、淺草田甫に住して居たが、常に狸の繪を好んで描き、道具類も狸形の物を集め、後には狸汁の店を開いたので、「田甫の狸」と渾名されて居た、此芳延の住家は今の淺草公園地内料亭一直の邊であつたが、明治十五年の頃、其庭前の池に水蟲を集めて樂んで居たので、花柳壽輔、六郷新三郎、泉忠などいふ友達連中は、各々彼方此方の川や池をあさつて、水蟲中の異形なのを捕へてみやげにすると、芳延は大きに喜んで、こんなのは初めて見たとて、早速「水蟲畫譜」に寫生した上、池に放つて毎日樂んで居たといふ

●蒔繪師源三郎の繪



「浮世繪類考」に「蒔繪師源三郎、醒世翁曰く元祿五年の刻本に此名あり、西鶴が作の讀本の指畫に名をあらはさずといへども多くは此人の畫なり、人倫訓蒙圖彙七冊描金畫斧五冊此人か」とあり、元祿五年の刻本とは何を云ふのか分らないが、元祿三年版の「人倫訓蒙圖彙」（永田文庫藏本）を見ると、其第一卷と二卷とは吉田半兵衛に似た畫風であつて、第三卷以下は右の如き畫風であるから、全く別人の筆であらう、「日本小說年表」には西鶴の著「好色一代男」の挿畫を蒔繪師源三郎の筆と記してあるが、「人倫訓蒙圖彙」の挿畫を源三郎なりとすれば、「好色一代男」の挿畫は同人の筆に非ずと云はなければならぬ、さりながら「人倫訓蒙圖彙」第一卷二卷の挿畫と相似たものが西鶴の著書中に多くあるから、夫等が源三郎の筆であるのかも知れない、スルト「好色一代男」や「同二代男」の挿畫は何人の筆であるか分らない事になる

蒔繪師源三郎の事は飯嶋虛心の著「浮世繪師便覽」に「奈良の人」とあるのみで、其外の書には異つた事が出て居ない、曾て蒔繪師の系傳書を取調べて見ると、元祿の頃奈良に源四郎と云ふのはあつたが、源三郎と云ふ蒔繪師は無かつた

●問答　（序）

▲（問）「浮世繪に關する問答欄を新設する何でも問題を出されよ」とあつたが、如何やうなことを出せば載せて呉れ、又答へをして呉れるのであるか、委く知らして貰ひたい

△（答）それは、何某といふ浮世繪師は誰の門人で何時頃の人であるかとか、浮世繪に云々の圖がある何の意味か分らない敎へて呉れとか、何繪と何繪との區別如何とか、繪本何々は誰の筆畫であるかなどの類を問題として出せばよいのです、記者が答辯の出來ない事は、廣く博雅の士の示敎を待つことにする

珍書解題　四　（永田文庫）

▲よだれかけ　大本六册　寛文五年版

これも有名の珍書である、柳亭種彦の「好色本目錄」にも「此書は尹工の坊が由來、茶道の始め、淨瑠璃の起りの事等ありて、五の卷まで好色本にあらず、たゞ六の卷に歌舞伎野郎の事ある故に、元祿の書目錄に好色本の中に加へたり、按ずるに、慶長二年に四の卷まで編しか「よだれかけ」と名づけたるは、古人の涎をなむる意にて、好色にかゝはりし事にはあらずといふ事江流の序にあり、さて五卷まで稿成りて後、承應元年若衆歌舞伎法度になり、少年の前髮をおとされたり、次の年に夫々の事を六の卷に書き附けたりしなり、作はさながら可笑き書なり云々」とある、著者は梅條軒といふ人で、一の卷に「寛文三癸卯歲大呂如意珠日、洛陽隱士江流書」と署した序文があり、三の卷には「慶安二屠維丑凋年上旬、梅條軒戲書」と記せる自序あり五の卷には承應二年の序が二文あるから、種彦が前記の如き考証を附したのであらう、繪入であるが畫者の名はない、奧附には「寛文五乙巳年二月中旬、五條寺町上ル町中野太郎左衞門板行」とある

▲一本菊　大本三册　萬治三年版

これは村上天皇の御時、高倉右大臣の前妻の子二人を後妻が敵視してなきものにせんとの企畫中、反つて己が實子を何者にか殺されしを、右前妻の子の所爲なりと讒奏したがために其人は流罪となつたが、後にその寃罪なること知れて赦され、關白にまで昇進して子孫繁榮したといふ小說であるが、何故「ひともと菊」といふかは、高倉右大臣の前妻の子妹姫が一本の菊を愛培して居られたのが緣で村上天皇の皇子に懸想され、終には其妃となり、兄君の寃罪晴れし後には皇子踐祚して妃は皇后とまで立身されたといふがためである、奧書には「萬治三年庚子皐月吉辰、野田庄右衞門」とある二條寺町西田勝兵衛尉の開板なりしを野田が讓受けて再摺したのであらう

▲大怒佐　小本二册　元祿十二年版

これは三味線の起原、種類、調子のあはせやう、本手破手の唱歌等を四卷に分けて說明したもので、婆川風の細密な挿畫が十枚ほど入つて居る、其畫はいづれも艷にして又雅なものである、版元は永田調兵衛

●花つみ籠

▲葵文會の軟文學書畫展覽　軟派の江戸文學書の翻刻を目的とせる『葵文庫』發行の餘興として、去る十三日、東京上野不忍辨天社内に於て「江戸軟文學者遺物展覽會」といふのを開催された、當日『此花』記者も出席して一覽した、其陳列品はいづれも奇中の奇、珍中の珍のみであつたが、記者の最も垂涎して措く能はざりしものは左の品々

一元祿より享保頃までの六段本、『集合名護屋』外七十五種（幸堂得知氏出品）

一貞享二年版、菱川師宣畫『さやしや男なさけの遊女』大本二冊（黒川眞道氏出品）

一版行年代不詳、古山師重畫『四座役者繪盡』大本二冊（淺倉屋主人出品）

一傾城五三味線（傾城色三味線、傾城歌三味線、傾城友三味線、傾城管三味線、傾城伽羅三味線の五種）

右の外、記者が前日某書店で實見して、賣價三百二十圓と云はれしを、二百五十圓ならば買取らんと云ひしも、折合のつかなかつた勝川春章北尾重政の共畫、安永五年版『青樓美人合姿鏡』といふ大本三冊の繪本も、某書店の名で出陳されてあつた（此美人合は時價二百五十圓以下のもので、商人の買入價格は百三十圓以上百七八十圓位までのものであるに去月相州箱根で右の某書店主人が、如何に勘違ひしてか、二百八十圓の高價で落札したのであると後で聞いた）

附けていふ、本誌前號に紹介して置いた葵文庫の第一回刊行は、柳亭種彦の『田舎源氏』であつたが、原本の挿畫を寫眞凸版で殘らず入れたのが其筋の忌諱に觸れたものか、先月六日發行の翌日、風俗壞亂物として發賣頒布の禁止を命ぜられた

▲三谷貞廣氏の訃音　『朝日新聞』の小説挿畫擔任者として二十年間以上勤續した同氏は去る十六日、享年七十一歳を以て死去された

『大阪朝日新聞』の所載記事

○三谷貞廣翁　久しく本紙小説に艶麗の筆を揮ひ去る三十七年十月十二日「海國少年」の挿畫を名殘りとして退社したる三谷貞廣翁（又三郎）は十五日午前一時宿痾の心臟病にて死去十六日午前十時南區笠屋町の自宅出棺阿倍野へ送葬す享年七十一、翁は大阪の人、幼時より畫を好み初め長堀橋南詰に住居せし圓山派の畫師藪長水の門に入りしが後思ふ所ありて浮世繪派に轉じ難波新地中筋に住居せし廣重派の廣貞門人となり廣兼と號せしが廣貞の遺言により師の號を轉倒して貞廣と改め小説挿畫の外通學の門人も多かりし中湯川松堂氏（當時廣光）の如きも翁の指導を受けし人なり云々

▲蘭方醫書展覽會　今回大阪で醫師大會のあるのを機として、京都では蘭方醫書展覽會及び醫學先哲追薦會をも開催される事になつたが、展覽會には醫書の蒐集家たる東京富士川游氏の出品が多いさうである、追薦會には東京から大槻如電翁が態々出張して、京都の蘭學者及び蘭方醫者の事を演説するさうである、大槻翁は同會を了へて後、當地に來られて一二泊の上、翌日は薩摩浄雲の墓を探るべく堺に行かるゝ筈である

▲鳥居清忠氏の繪看板　今度當地道頓堀の辨天座へ、東京の名優市川高麗藏、市川小團次、澤村源之助、市川左團次等が來て歌舞伎十八番などを演ずるに付、從來のデモ繪看板では不相應なりとて、鳥居清信以來劇場の看板繪を專門とせる鳥居派の現清忠氏が、右の看板繪を描く事になつたさうである、某新聞曰く「鳥居風の勇敢壯麗なる筆致で描かれた五枚の繪看板は蓋し大阪芝居あつて以來の立派さであらう」と或はさうかも知らない

▲大蘇芳年翁遠忌會　去る明治二十五年に歿した浮世繪の大家芳年翁のため、同門人連寄合ひ、本月十日頃東京向嶋の百花園に於て遠忌會を開催するさうである

○此花（毎月一回發行）　定價一冊金十五錢
六冊前金八十五錢　八冊前金一圓十錢
郵送料は當方にて支辨す
初號より第十二號まで代金一圓六十錢
收支不償にて如何に損失あるも第十二號までは必す繼續發行す

○郵便振替口座番號
大阪九二二三番

○廣告料　五號活字一行金五十錢の割
書籍繪畫等に關する廣告に限る

明治四十三年四月一日發行
大阪市西區江戸堀南通四丁目十番邸
發行所　雅俗文庫（電話西千八百六十一番）

編輯兼發行人　宮武外骨
印刷人　太田彌八



供養の長塔

失戀の餘忿



天王寺境内に供養塔とて長き塚あり、慶安三年庚辰十二月十四日、九州肥後國益城郡中嶋住人田代孫右衛門造立、世俗に千人切の罪を謝する供養の石碑なりと云へり、一説に田代氏は國元に住居の時、何某の娘と契りて、後他國へかせぎに行き、月日を經て歸國せし所、契りし娘他家へ縁組せしと聞きて心外に思ひ、深き契約も今はあだとなりしとて、夫より魚鳥けだもの蟲に至るまで千の數いのちをとり、娘の一命を失はしめんと一心をきはめ、狂氣の如く毎日生物のいのちをとるを、老母はうてたく思ひ度々異見をすれども聞入れず、扨九百九十九いのちをとり、今一命に龜を捕へければ、手足首を出さず、母是を見て樣々とゞめければ、もはや是一命にて滿願成就なればとて止まらず、母は詮方なく龜をたすけて代りに此母を殺せといへば、孫右衛門心得、母にとりかゝると思ひしが其儘正氣を失ふ、老母も歎き入りしが、忽ち本性となりて母に向ひ始終を物語る、かりにも母に手向ひし罪をゆるし給へかしとて、髮を剃り母にいとまを乞ひ、廻國に出て津の國天王寺西門の邊にて病死せりとぞ、龜の上に碑石を立つ是この因縁なるべし

陰山玉岳畫　寛政十二年版　浪花の梅

此花　第五枝

明治四十三年五月一日發行

●時代の趨勢

○○つく薯山水や佛仙畫などを專門に描いて居た他派の畫家は、日本特產の精華と賞せらるゝ浮世繪を俗なりとして蔑視したのである、菱川師宣が自ら「日本繪師」と稱した時、舊來の畫家は大いに憤つて、古例に反する稱呼だと云つたさうであるが、彼等は日本の畫工でありながら、李龍眠の法がどうの、玉澗の式はかうのと、只漢畫の糟粕のみを嘗めて居たのであるから、時勢は土佐家を產み、浮世繪派を產んだのである

さりながら、舊派の畫家中でも、氣の利いた者は、時代當然の要求に反抗するの愚を覺つて、いつとなく日本の風俗を描寫したのであるが、それとてもマダ漢畫臭い所を免れなかつた、容齋派の有職畫などは、其淵源遠く所謂「倭繪師」から出たのであらうが、他諸派の人物畫などは、何處となく漢臭を脫し得ないやうである、其漢臭を脫して眞に日本の繪畫美術と稱すべきものは土佐派と狩野派の一部分とであらうが、其土佐派から岩佐又兵衛が出、狩野派から英一蝶、西川祐信、月岡雪鼎等の如き浮世繪大家が出、又雲谷派から堤等琳、文晁派から喜多武清が出たなどはいづれも其派の破格者であつて、所謂脫走者と目すべき者であるが（初めから浮世繪を習つた者でも、脫走者の流派であるから、浮世繪師は悉く脫走組である）何故脫走したかと云へば、漢畫臭い眞似事の家法とか格式とか云つて、花鳥山水の如き平凡一律の物しかみをしたり、描かないのが面白くないからである、南宗派の連中などは永く其舊法のみを墨守して居るが、其他の畫派は、近く明治の世となつてからは、時代風俗の畫を描く畫家が多くなつた、西洋畫の行はれるにも因るであらうが、今は新聞小說などの挿畫に、浮世繪師の畫か、他派の畫か分らないやうなのが多くて殆ど總ての畫派の者が、昔は俗なりと罵つた浮世繪の範圍内に侵入して來たやうである、これは浮世繪の眞價を世に認められた時代の趨勢に順化するのであらうが、ツイデにつく薯山水や佛仙畫の御連中も、早く脫走して我浮世繪派に侵入せられんことを望む。



天保十年版（欽慕畫譜）

例言

△本誌は、萬國に於て、豊壌の精華と許されつゝある、日本浮世繪の研究と鼓吹とを目的として、毎月一回發行するにあり

△されど俗耳に容り易きを主として、高尚の論說等は、當分これを避け、低きを先とす

△又浮世繪に關係なき事項を記すこともあり、これ浮世繪の趣味を解し得ざる人にも本誌を讀ましめ、其間漸次に牽引して同化せしめんとする一種の手段たり

△浮世繪師個人に就ての專門的研究の結果は、其記事を本誌に登載せず、浮世繪師全傳等の別著として發行す

△以上の主旨に反せざる研究家の投書は歡んで迎ふ

編輯發行者

○浮世繪師全傳 [illegible]

右は[illegible]以來の凡百人に近き浮世繪師の系傳、[illegible]及び繪草紙の目錄、各人の畫風、摘要、別號、源名、[illegible]印章、落款、享年、墓所、評論、考證等を[illegible]なく[illegible]するにありて、一昨秋以來[illegible]に苦心せるも、脫稿までには[illegible]を要する[illegible]なれば、[illegible]本誌の[illegible]にて、[illegible]に知られざる[illegible]

○浮世繪鑑 [illegible]

浮世繪[illegible]各流派を代表するべき十二家を選抜して、其[illegible]優秀なるものを[illegible]集（外に[illegible]）を集む

○菱川師宣畫譜　○奧村政信畫譜
○西川祐信畫譜　○月岡雪鼎畫譜
○鈴木春信畫譜　○勝川春章畫譜
○北尾重政畫譜　○鳥居清長畫譜
○喜多川歌麿畫譜　○歌川豐國畫譜
○葛飾北齋畫譜　○大蘇芳年畫譜

右の中、第一卷「菱川師宣畫譜」は昨年十月十五日發行、第二卷「奧村政信畫譜」は今年四月二十五日發行せり、第三卷「西川祐信畫譜」は今年中に發行の豫定なり

雅俗文庫

●彩色繪本の祖

浮世繪の版本に丹緑等の手彩色を施したことは、寛永頃より行はれて居たが、版行の彩色は享保の初年頃に出來た紅繪といふのが最初であつて、それが段々發達して錦繪といふ立派のものに成つたのである、されど是等は一枚摺の繪であつて、一冊に綴た版本の挿畫には享保頃にも手彩色を施して居たのである、版本の繪に版で彩色摺をやり初めたのは誰であるか、又何時頃であるかと云ふ事を調べて見ると、『浮世繪類考』に

橘眠江　寶暦明和の頃、元縫箔師にて後浮世繪師となる、五文字の點式多く此人の畫なり、畫本職人部類に摺込の彩色を工夫して大に世に行はる

とあるので、此明和七年の『彩畫職人部類』を摺込彩色の祖なりと云ふ人もあるが、これより前、明和四年に大阪で北尾雪坑齋の畫を摺込彩色で發行した『彩色畫選』といふのがある眠江はそれに工夫を加へて完全なものとしたに過ぎない、そして此摺込みと云ふのは昔の手彩色とは違ふが、只其技の進歩しただけのものであつて、版彩色とは云へない、紙形を彫つて刷毛で繪具を塗つたのである

次に『浮世繪師便覧』に「龍水、勝間氏、色摺の祖、享保明和」と略記してある、勝間龍水を彩色の祖と云ふのは、明和頃の版本『馬鹿語』に「享保の末、市川柏筵の父才牛の遠忌追善の集父の恩に才牛が句三句の畫勝間龍水筆をわづかに色摺になしたり」といへるを版木彩色の初めであるとするに據つたものであらうが、版本の口繪一二枚に彩色を施したものを彩色繪本とは云へない、隨つて勝間龍水を彩色繪本の祖なりとは云へないが、同人の著畫たる『海の幸』といふ大本二冊は、海の魚づくしに一々實物の如き彩色を施して、其上部に俳句を入れてある、蜀山人の『奴凧』に

俳諧師のつくれる海の幸といふ書あり、魚の正うつしなり、平賀鳩溪これを日本魚譜と名づけて阿蘭陀人に贈りし事あり、魚の圖の上に發句あり、彼人形狀を說きし事とおもひしや

此『海の幸』は寶暦十二年の序跋があるものだが、版行の年代は未詳である、之を寶暦版とすれば、彩色版本の祖であらうが、實際の版行は明和頃であるのかも知れないのと、又一つには、畫者龍水自記の凡例中に

彩色筆のごとく成がたし、板面は輕き繪具のみを用て數遍成がたし、又彫刻の勞煩厭はざるにもあらず

と輕く書下したのを見ると、彩色版本の元祖らしくも無いやうである

されば其元祖は何であるか判らないが、鈴木春信の彩色畫『繪本春の錦』といふ版本は上下二冊十八枚悉く彩色版である、其序文に

案に今めかしき風俗を畫しは鈴木氏の筆に有、よつて其毫を需めて、世に觸し錦繪の彩色をくわへ、錦の文字を相續で春の錦と題し、新に余が工夫し、金山堂をすゝめ、遂に諾し、此一卷とはなしぬ云々　碧玉堂述

此文によると、錦繪を版本にしたのは『繪本春の錦』が元祖であるらしい、是亦版行の年代は不詳であるが、鈴木春信は明和七年六月に歿した人であるから、右の序文と卷末に東都畫工鈴木春信と署名してあるのに據ると、其生前の版行たることは明かである、これが若し明和初年の版本であるならば、確かに彩色版本の元祖であらう

勝川春章畫筆の『繪本舞臺扇』は明和七年の彩色版本である、此外明和七八年頃には彩色繪本が多く出來たやうであるから、兎も角彩色繪本の祖は明和七年前のものでなければならぬ事だけは確である

●伊曾保物語のものがたりの正誤

京都大學發行の藝文第一號を見ましたら譯本伊曾保物語の事がある、バビアンの日本語に譯した本と活字版の本とは原文に相違してゐるそうな、余は原書を見ない、見ても讀めないのであるからごめんあれ　白念坊如電



西川祐信　享保十五年版(繪本筑波山)

西川祐尹　寶暦三年版(繪本響の瀧)

西川祐代　寶暦十一年版(繪本惠方なぞ)

浮世繪三幅對 (四)

●枕雙紙の一節

明暦二年(二百五十五年前)の版本『枕雙紙』中の一節を茲に抄錄して好色家の參考に供す

問煩惱即菩提者煩惱熾盛時菩提熾盛時煩惱熾盛耶。答爾也譬如極闇時燈至有光明日中少光明又如極寒時氷厚少寒時氷薄寒如煩惱氷如菩提以煩惱熾盛知菩提熾盛也故煩惱增時菩提增也云々

此文句の堅困しいのに呆れる人もあらうが、これは確に『枕雙紙』の一節である、清少納言といふ閨秀文學者の著したものは『枕草子』であるが、これは長保三年(九百十年前)釋源信(惠心僧都)の著述で、佛敎の大乘妙典を解說した『枕雙紙』である、好色家又は考古家の見たいのは、菱川師宣以來の浮世繪師が描いた枕雙紙、即ち艶姿嬌態の好色本であらうが、其文句の拔載は國家の法律が許しませぬ

これに就て一奇談がある、京都松原通り六波羅の岩淵といふ古本店の主人は後家らしいが其女主人が云ふには「此店へ大學の書生さんなどが來て、いつも枕雙紙はないかとお尋ねになりますが、其時此方はハイございますと云つて、眞面目に惠心僧都の『枕雙紙』を出しますと、書生さんは暫くひねくツて見て、苦笑ひしながら匆々お立去りになります」と

●新聞雜誌記者の筆禍

「此花」記者は新聞紙法違犯として禁錮二ヶ月の刑に處せられたが、明治初年新聞紙印行條例とか又は新聞條例、讒謗律などいふ法律の發布されて以來、新聞雜誌の記者中、筆禍に罹つた者が少くない、その中で明治十年迄の間に禁錮の刑に處せられた者を、小池蓮窓の著『日本新聞歷史』に據つて茲に摘載する

○明治八年

△禁獄二ヶ月	あけぼの新聞	末廣重恭
△同　十日	東京日々新聞	甫喜山景雄
△同　五日	朝野新聞	成嶋柳北
△同　一ヶ月	郵便報知新聞	岡敬孝
△同　十ヶ月	横濱毎日新聞	塚原靖
△同　一ヶ月	あけぼの新聞	阪井喜三郎
△同　二ヶ月	郵便報知新聞	藤田茂吉
△同　二ヶ月	あけぼの新聞	長谷川孝

○明治九年

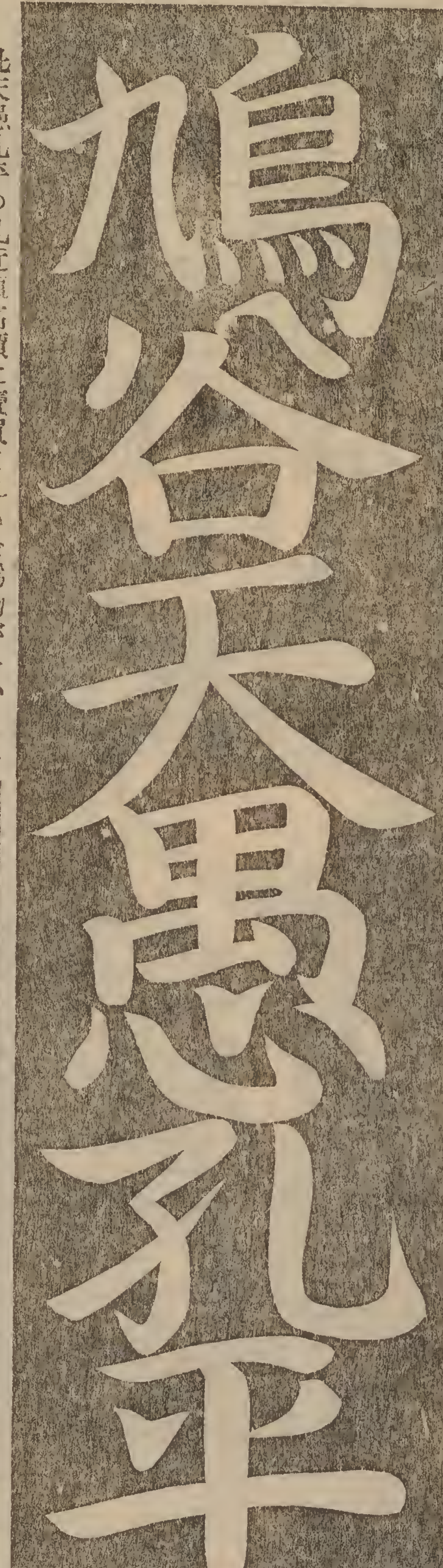
△禁獄三ヶ年	采風新聞	加藤九郎
△同　廿五日	愛知新聞	音羽清逸
△同　二ヶ年	評論新聞	小松原英太郎
△同　二ヶ年	同	山脇巍
△同　三ヶ年	同	横瀬文彦
△同　八ヶ月	朝野新聞	末廣重恭
△同　四ヶ月	同	成嶋柳北
△同　二年半	采風新聞	本木貞雄
△同　十ヶ月	同	矢野駿男
△同　三ヶ月	評論新聞	西川通徹
△同　四ヶ月	同	東清七
△同　二ヶ月	同	中嶋勝義
△同　二ヶ月	同	滿木清繁
△同　二ヶ月	同	岡本清一郎
△同　三ヶ月	同	柴田勝文
△同　一ヶ月	同	田中直哉
△同　六ヶ月	采風新聞	杉田定一
△同　一年半	郵便報知新聞	岡敬孝
△同　二ヶ月	采風新聞	中嶋泰雄
△同　一年半	大阪日報	關新吾
△同　一ヶ年	評論新聞	中嶋富雄
△同　二ヶ月	同	高羽光則
△同　三ヶ月	草莽新聞	馬越章造
△同　一ヶ年	湖海新聞	倉本半太郎
△同　七ヶ月	同	山田精一郎
△同　五ヶ月	郵便報知新聞	牧田庸夫
△同　四ヶ月	湖海新聞	今井毅
△同　三ヶ月	中外評論	高橋克
△同　一ヶ年	大阪日報	萬代義勝
△同　一ヶ月	西海新聞	西道仙
△同　四ヶ月	近事評論	高羽光則
△同　三ヶ月	中外評論	松川杢藏
△同　三ヶ月	朝野新聞	大久保鐵作
△同　八ヶ月	東京曙新聞	阪井喜三郎
△同　三ヶ月	同	中嶋泰雄
△同　三ヶ月	讀賣新聞	永井祿
△同　三ヶ月	普通新聞	伊阪淑人
△同　十ヶ月	摘花新聞	有吉志一
△同　三ヶ月	同	笹原吉太郎

○明治十年

△禁獄五十日	甲府日々新聞	高瀬茂顯
△同　一ヶ月	石川新聞	高桑芳致
△同　五十日	文明新聞	田中捨藏
△同　三ヶ月	普通新聞	蜂須賀近義
△同　一ヶ年	攪眠新誌	常井誠一
△同　一ヶ年	東洋奇事新報	神代良太
△同　五ヶ月	平安新聞	奧井清風
△同　二ヶ月	普通新聞	阪部重次郎
△同　三ヶ月	問答新聞	八塚幹之助
△同　二ヶ月	愛知日報	岩田德義
△同　一ヶ月	大阪日報	山本鏘二

右の如く、現文部大臣たる小松原英太郎氏も「壓制政府顚覆すべき論」といふを掲載したが爲めに、重刑に處せられて居るが、當時は專制時代の事とて、言論の壓迫苛察に過ぎたので、名士は屢々其刑を受けるに堪へず、自ら署名することなく、表面上の署名者に其責を負はしめる事となり、明治十年後は主筆者を檢擧されることは稀となつた

●千社札　一名　納札



近年東京及び大阪等に、昔の千社札を蒐集する人々が多くある、此千社札といふのは、神社佛閣へ參詣した者が、自分の氏名又は別稱等を記した紙札を貼付して、參詣の標としたものであつて、古くは西國三十三所順禮、奧州津輕の住人何某とか、同行二人とか記した紙札に起因したものであるが、文化の頃江戸に天愚孔平（俗稱萩野喜內、鳩谷と號す）といふ奇人があつて、圖の如き札を四方の社寺に貼付したのが近因となつて、信心氣の無い者までが紙札を製して社寺の堂宇に貼付することになり、天保嘉永安政の頃に至つては最も盛んに流行し、江戸市人の過半は此流行熱に浮かされて、我も〳〵と新意匠を凝らしたものを製作すること、恰も近年大流行を極めた繪葉書の如き盛況であつて、其流行は明治維新の際まで止まなかつたのである

此天愚孔平の札近頃高價に賣買されるで僞物が多い

物事の流行は其極端に奔るものであつて、此千社札も、最初は天愚孔平の札に擬した墨摺のものであつたが、漸次奇搆を凝らして美を競ひ新を爭ふ結果、浮世繪師の手によつて彩色摺のものとなり、社寺に參詣して貼付するのでなく、納札大會とて同好者の集會を盛んに開き、毎回其席上で相互に誇つて交換するを目的とし、其競爭の果はわーでもない、こーでもないとて、札の寸方を倍大にする者があれば、更にそれよりも大きなものを製し、終には奉書紙二枚つぎといふ途方もない大形物を製する者も出、納札は只名のみで、新意匠の競技會といふやうなものになつて了つたが、今日それ等を蒐集したならば、當時の趨勢を察し得るのみならず、工藝圖案の參考となるべきものも少くない、六歌仙組とか、七福神組とか、歌舞伎十八番連、源氏組、道化組、江戸名所組、東海道五十三次連など云ふ華美のものも多い、それ等の種類を悉く集めたならば、二十萬枚以上になるであらう



これは吉原五節句組の一である現物は極彩色

天愚孔平の略傳は司馬江漢の『春波樓筆記』及び八嶋岳亭の『百家畸行傳』等に出て居る

千社札の事は文化頃の『題名功德演説』を根據として安政五年に鈍亭魯文が著した『神社佛閣納札起原』に委く出て居る

●氣焔味噌

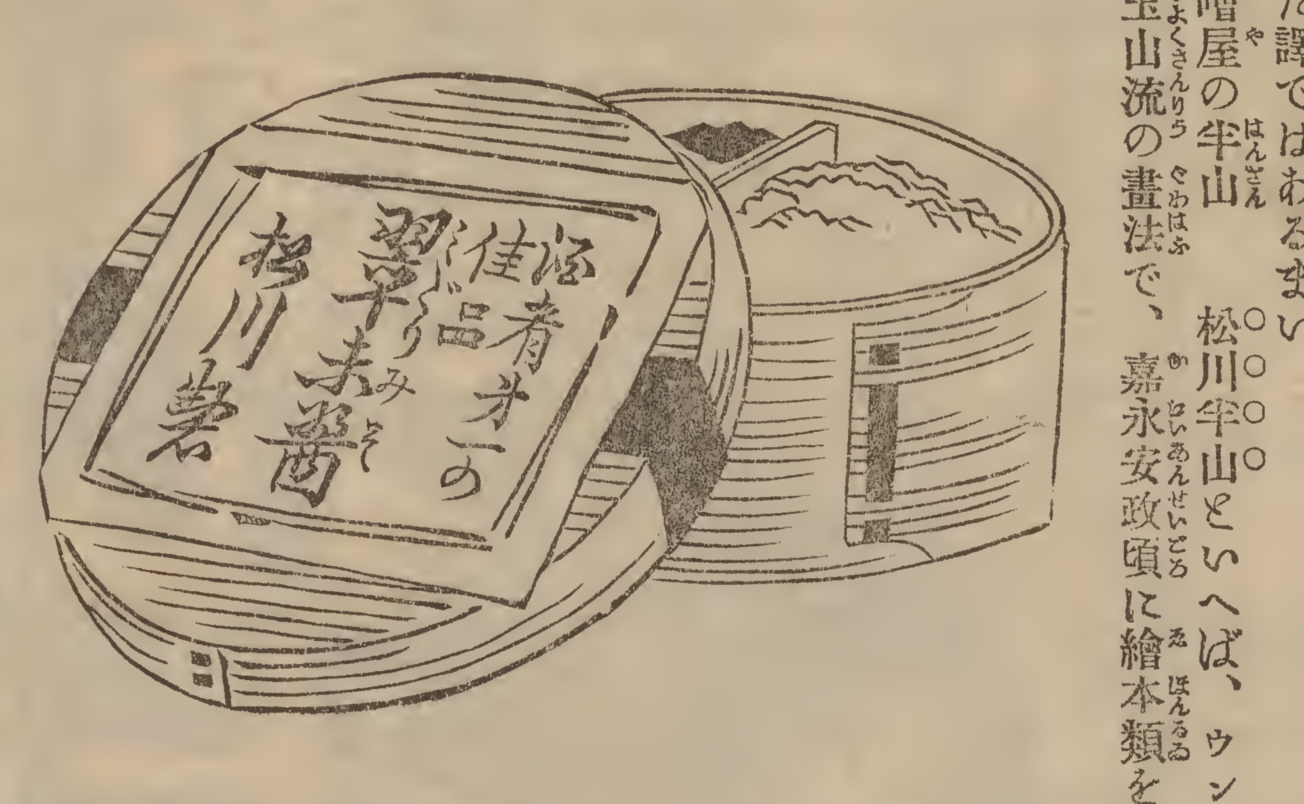
京都　花廼散人

▲西川祐信の氣焔　「憎らしい皆西川は瞽女に描き」とやらいふ川柳點もあつて、春窓秘戯の畫に妙を得た西川祐信が、眞面目に大氣焔を吐いて居る、『繪本倭比事』寛保二年版の最終第十卷中に

上古の繪多く唐畫を師とし學びぬれば唐流に着して其圖する所皆聖賢又は詩人仙客の類のみにして本朝の人物は稀なり、偶ま神像などを畫くと雖皆唐流を用ひ宛然唐土天竺の人倫の如し、筆法又唐に着して和人に應せず、故にたま〳〵和人形を畫けるも唐めきて精神こもらず是偏なるに非ずや、此故に其得たる所に本付て和流を卑しめ圖形をなすにも唐山水、唐耕作、唐兒遊びなど皆唐に歸して本朝を捨つ、是遠く他の國を信じて近き我國を卑むるの心ならずや、此國にして此國の風俗を見識せば豈樂しからざらんや、嘆息せずんば有べからず、予専ら和畫に心を入て畫くも此意にして强て偏るにはあらず、

と論駁した所などは實に卓見である、サスガは關西浮世繪界の巨擘と呼ばれるだけの抱負を有して居た人と僕は感心した、「増補浮世繪類考」(温知叢書本)に「筆意骨法、狩野土佐の二流を離れず悉く畫法にかなひし浮世繪師は此人に限れり、近世東都にては師宣よりも祐信の畫は價貴しと云」と載せて居るのも敢て諂つた譯ではあるまい

▲味噌屋の半山　松川半山といへば、ウン彼の玉山流の畫法で、嘉永安政頃に繪本類を



澤山かいた人か……位の事は僕でも知つて居るが、其半山先生が味噌屋の親爺であつたとは初めてゞある、と云つたゞけでは分るまいが、即ち安政三年刊本の「正信偈訓讀圖會」(曉晴翁著述 松川半山畫)の第二卷目の表紙裏に、左の如き廣告があるのを以て知るべしである

浪華墨の江名産精製
みどり未醤　紫蘇みそ
わげ物入價　三百文　百文
　　　　　　二百文　五十文
新製風流杉折入價　金壹朱

第一酒の肴●御老人の食事の菜●御進物●御年玉●歳暮の御遣ひ物●暑寒の御見舞●一寸折見舞の御手みやげ●御病人見舞●御寺方の御配物●旅行の御携へ●其外遠方への御遣ひ物に何程日數立候とも決して味損じ不申日を持事妙也●又魚類の小串或は精物の田樂●敷みそ●未醤あへ等に●世間通例の未醤にあらざれば其風味外に及ぶ物なし●常に不斷御用ひ被成候へば能脾胃を調へ胸をすかし腎を補ひ氣血をめぐらし無病長壽ならしむる事住の江の松の齢にひとしからんいとも目出度重寳の品なり

賣弘所　大阪道修町淀屋橋東入　松川翠榮堂

(此花記者曰)曉鐘成(曉晴翁)は浮世繪師兼著作者であるに、半山の挿畫を入れてある、是を見ても鐘成が半山の畫才に敬服して居た事が明かなると共に、其親友たりし事も察せられる然して曉鐘成も亦一時味噌屋を開業して居たのは、其間に何等かの關係がありさうだ



●蜃氣樓　（下）

日本で蜃氣樓の最も多く現出するのは越中魚津であるが、伊勢、遠江、安藝、周防などにも偶には現はれるさうである、今年一月二日の朝、上總一の宮の海上に大蜃氣樓の現はれたと云ふことが新聞紙上に出て居た、近刊の『慶應義塾學報』の抄錄として『新公論』に轉載する所によると

本邦の蜃氣樓に就て諸記錄を合せ考ふるに凡そ左の如き條件の許に發生せるが如し

（一）海上　（二）靜かなる天氣

（三）霞める日　（四）朝にも夕にも現はるゝ事

右の條件中尤も肝要なるは（一）と（二）なり光學上よりの推定によれば、蜃氣樓は光線の屈折と全反射とより生ずる結果なれば、（二）の條件は能く此道理に適ひ、若し靜穩なる天氣にあらざれば、氣層亂錯して屈折も反射も起らざるべし、又（一）の條件なる海上といふは、海水の陸地よりも冷めたく從つて之に觸るゝ氣層は濃密となり、屈折の度を加ね、光線をして早く全反射の臨界角に達せしむる原因となるによるべし、次に（三）は氣中の水蒸氣海上の冷氣に觸れて霞み曇れるなるべし、海上には此事常に多きものとす、（四）は右の條件に合ふ時は、何時も蜃氣樓を生ずべき理なれば、朝なぎ夕なぎに多かるべく信ぜらるゝなり。

菊岡沾凉の著、寛保三年の版本『諸國里人談』第四卷には、「嶋の遊」と題して、海上に於て夜間蜃氣樓の現出するを見ることありと記せるは、何かの間違なる俚俗の談に過ぎない事であらう、朝か夕か、兎も角晝間でなければならぬ事は右にも說明してある

さて右に條件の一として海上とあるが、必しも海上でなければ現出しないといふ事はないやうである、支那の引例を見ると、陸上に於ても現出することがあるらしい、蜃氣樓の事を支那では海市又は山市とも云ふ、山市とは陸上の蜃氣樓のことである、日本にも最近の一實例があつて、去る一月二十九日發行の二三新聞紙上にも掲出されて居た

栃木縣下都賀郡大平山麓に當り廿七日午後三時五十七分折柄天晴れ微風だもなき空中に壯麗なる一大パノラマ樣の如きものの出現し其左方には白雪に掩はれし峨々たる山嶽聳ね又麓には長さ三四尺と思はるる籠目形のもの連なる間を大河流れ附近には數戸の家屋らしきものさへありて奇々怪々なる現象を呈したるが僅か一分餘にして消失せたり之を見たる各附近町村の者等は何れも眼を驚して何事ならんと噂さし居たるが右は壬生附近を流るる黑川が雪解けの爲め增水し高氣溫に會ひて著しく昇騰したる折柄太陽の光線が之に反射したるものにして前記籠目形は黑川岸の蛇籠左方に現はれたる山嶽は日光黑髮山の山脈なるべしと云ふ


喜多川歌麿畫



●スリ（巾着切）

行人の虚に乘じて財物を奪ひ去る盜賊を掏摸と云ひ、又巾着切とも云ふ（大阪ではチボ○○と云ふ）此語は古いと見へて、天德年中頃の『兼盛集』に、旅で山賊にあふ繪をかいて「旅人はスリ○○もハタコも空しきを早くいねまし山のとねたち」とあり、又文祿三年の言繼卿記にも盜人スリ○○云々の語がある、『俚言集覽』には學語篇には須利と書て梵語なりと注したれど出所詳ならず、彼がすり違ひつゝ行くさまにて物をとらんとするなれば、やがてすり○○と云ふなり

とあるが、スリとは梵語であつて和語ではあるまいと思ふ、すり違ひの時にすり取るからすりと云ふのであらうと云ふのは誤見らしい

それは清人趙翼の著はした『簷曝雜記』中に

有下藏二利刀一雜二稠人中一剪二取腰間雜佩一或至中割二衣襟一幅一去混上號謂二之小李一

此「小李○○」は清音で「スリ」と讀むからである、

さて此スリの事が浮世繪入りの本に出て居るのは、貞享三年版の『本朝二十不孝』に「前髮立の野郎には巾着切を敎へ云々」とあるのと同年頃の版本と見るべき吉田半兵衛畫作の某書（題號不詳）などが初めであらうか、同書七十三丁に「巾着剪」と題して、神社の鳥居前に

下圖の如き二人を描いて

はやい物に巾著切が手際ほど早いはなかるべし。意をつければ切が人相は知れてあれども知らぬうへからは是非なかるべし。群集の場にうつかりと立ち。心ゆるして歩くは澆山な空人なり。世間に笠を着は人目をいやな氣なり。然るを彼は此人と見ては笠をぬぎけるはそれを脇目の關にして他の紙入をなんの苦もなふついとしてやる。或は脇指をぬき小刀をぬいてとる。すれぬ巾着は底をきつて中の物の落るを跡をしたいて取に行。かたげてゐる劑符をきられ。腰の錢をさしの中からしてやらるゝ事。順斗世上を如在なふ心得た御堂まいりの親仁。奥山家の太郎作ばかりかと思へば。都にすんで目玉のくまたかも跣な仁が脇指の鞘ばかりさして。たつた今のことじやがとうろたへもしやと思ふ顏付にて袂を振つて見らるゝもせんかたなくやうらめしや

次に正德六年版の『芝居晴小袖』といふ役者評判記中に、ある男が傾城に戀慕し、其望みを遂げんとする手段として、俄にスリとなつて傾城の書いた起證誓紙をすり取ると云ふ八文字屋自笑の小說に、其スリの樣を描いてある

此外寶曆八年版の俳書『夢中の戲』に巾着切の繪を入れてあるが、それは浮世繪でない


吉田半兵衛畫

貞享三四年頃版本（外題不詳）好色訓蒙圖彙と同形の三册物、其下卷のみ永田文庫の藏本にあり


西川祐信畫

正德六年版（芝居晴小袖）

●途上の恍惚



見惚れたにし、そも良緣か惡緣か、その小說『敵討蓮若葉』文化元年版行一九著豐廣畫を讀まねばわからぬ

繪師の狂歌

（二）

○おもひ子はにねこぢるともまゝ母の
　手鍋にかけてたきもりたてん　（戀川春町）

○錦繪のいろ〳〵そまるもみぢ葉は
　古鄕へかざる江戸みやげかも　（蹄齋北馬）

○ことはざに酒はうれひの玉はゝき
　はくまでも呑むあとひき上戸　（重田一九）

○御ひいきをたのもにすだく青蛙
　両手つくしの筆のとりぞめ　（歌川貞春）

○水油はかるひさくの日のかげも
　かたぶくころや垂るゝ夕露　（岳亭春信）

○山姥の木の葉ごろもや染ぬらん
　山また山をめぐるしぐれは　（歌川國芳）

同名の繪師

（略）

△菱川師宣　天和
△春川師宣　明和
△近藤清春　正德
△菱川清春　天保
△常川重信　寛保
△柳川重信　文政

△奥村政信　享保
△菱川政信　元祿
△川枝豐信　享保
△石川豐信　天明
△石田玉山　文化
△岡田玉山　天保

△長谷川長春　貞享
△宮川　長春　寶曆
△鈴木春信　明和
△岳亭春信　文化
△日置清親　貞享
△小林清親　明治

△吉田　半兵衛　貞享
△松好齋半兵衛　寛政
△宮川春水　享保
△勝川春水　元文
△山崎年信　明治
△田口年信　明治

●紅白隨筆

▲畫者署名の有無　寛永頃から享保頃までの小說其他の雜書には、作者の名も畫者の名も無いのが多い、烏丸光廣、淺井了意、鈴木正三などの著述でも、大概は署名してない、初めて浮世繪本を出版した菱川師宣の畫作には、自ら日本繪師と稱する抱負があつた丈に十中の七八までは明瞭に署名し．其門人石川流宣、古山師重なども署名して居るが、井原西鶴の小說などには自署もなく、畫者の名も署してないのが多い、八文字屋本には自笑とか其碩とか自署してあるが、畫者の名はヤハリ署して無い、享保後の黑本、黃表紙、繪本小說其他の雜書には駄作物の外は大概作者畫者共に署名する事になつて居るから、浮世繪の研究上には大いに便利である

明治の新聞小說には作者畫者共に署名して居るが、單行の小說其他の雜書には作者の名のみで畫者の名の無いのが多い、これは新聞小說は繪を以て讀者の視線を牽かんとするがため、畫者の責任を重からしめ、單行本は外題又は作者の名を以て讀者を得んとするの相違から起つたのであらう、其拔量の巧拙輕重に拘らず、作者たり畫者たるものは、自己の責任上必ず署名する事にしなければならぬ

▲天々天滿の裸神子　寛政七年浪華鐵格子の戯著「通者茶話太郎」といふは、大阪の奇人として有名な河太郎、卽ち河内屋太郎兵衛の奇行に擬した小說であるが、其一節に茶話太郎が馴染の幇間をいぢめるため「てん〳〵天滿の裸神子」といふ乞食藝人を座敷に揚げて遊んだといふ話があつて、その挿畫中に左の如き座前に太鼓を置いた裸男を描いてある、此乞食藝人が眞の太鼓持であらう



浪華の狂言作者西澤綺語堂主人（一鳳）は嘉永三年頃『皇都午睡』といふ隨筆を著はして居るが、其一節に「幇間を太鼓持と云ふは、紀州和歌祭り雜賀囃子に重き鉦太鼓を二人宛にて持行く、いかなる力量でも両方は持てず、金を持つ者は太鼓を持たず、太鼓を持つ者は金を得持たぬと云ふ謎々より名付けしと云ふ」とあるが、太鼓持の語原としては附會らしく見ゆる、如何か

▲歌川國松氏と新聞紙　浮世繪の老大家たる同氏は、其閲歷も永く、去る明治十五六年頃より新聞の挿畫に從事し、今日尚繼續して居るが、其關係の新聞紙は大阪の此花新聞、浪華新聞、日本繪入新聞、京都の日出新聞、東京のうきよ新聞、東京繪入新聞、江戸新聞、朝野新聞、改進新聞等であつて、現今は大阪時事新報と神戸新聞の小說挿畫を描て居る

因に云ふ、明治二十四年に梅風翁が著はした『浮世繪師系傳』の第六卷中、二代目豐國の項に「明治四五年の頃二代目豐重と畫名ある錦畫を見たりしが何人か知らず」とあるが、これは國松氏である、二代目豐國が初代豐國の門人たりし時は豐重と號して居て、師の養子となつて後二世豐國となつたのであるが、國松氏は其二代目豐國の門人であるので、師の初號を繼いで二代目豐重と號し又扇福堂とも號したのである

▲錦繪といふ名の娼妓　美人を褒める形容詞に「繪にも描けないやうな美しい顔だ」といふのは、繪畫以上の美人といふ意であるが又「繪に描いたやうな別嬪だ」とも云ふ形容詞がある、文政二年の頃、大阪新町廓內九軒町の茶屋扇屋に「錦繪」といふ花魁があつたと『雲錦隨筆』に見えたが、これは繪畫以下の美人であつたのだらう

女浮世繪師（甲）



水野秀方　明治四十年發行（女學世界）

山崎氏女龍　享保頃の名人　文政八年版（花街漫錄）

明治三十一年發行（風俗畫報）

河鍋曉翠　明治二十年版（曉齋畫談）

葛飾榮女　弘化四年版（女重寶記）

文久二年著（江戸繪馬鑑）

喜多川千代　天明五年版（切莫根自金生木）

雲母繪

東洲齋寫樂畫

五代目市川團十郎似顔繪



原畫は縱一尺二寸五分横八寸五分ほどのものであるのを寫眞で縮めて摸造したのである

明治三十九年發行の吉澤商店古代錦繪買入概價表に「雲母摺錦繪は普通錦繪の人物の周圍を雲母にて摺りしものにて銀摺とも稱し今より百年前に行はれしものなり其畫工は東洲齋寫樂、初代歌麿、榮之、榮昌、榮里、國政等○寫樂の雲母摺は何れも役者の似顔繪なり一枚拾圓乃至參拾圓、歌麿は一枚五圓乃至參拾圓、榮之、榮昌、榮里は一枚五圓乃至貳拾圓、國政は一枚參圓乃至拾圓なり」とある

寫樂は誰の門人ともつかず、大阪の耳鳥齋の如く、一種飄輕な似顔繪を描いた人である、此雲母繪を外國人が好いて一枚數十圓に買取るのは、何故であるか分らないと云ふ人が多い、我輩もこんなものに高價を拂ひたくないので、東京酒井好古堂の摸刻物を集めて滿足して居る

●へボ狂歌連の効蹟

浮世繪入の古い本であつて、諸外國人が最も高價に買收する結果、日本人間に於ても高價に賣買されるのは、天明寛政頃より享和文化頃までに出版した江戸の狂歌本である

「山滿多山」「狂月望」「四方の巴流」等の類二三十種は、いづれも一冊數十圓の賣買價格であるが、是は外人が狂歌入の繪本を望むのでは無く、葛飾北齋、喜多川歌麿、窪俊滿、鳥文齋榮之、北尾政演等の畫が、精巧華美の技術によつて發揮されて居るからである、當時何故其樣に精巧華美の物を出版したかと云ふに、明和後、唐衣橘洲、朱樂菅江、四方赤良(蜀山)、宿屋飯盛(六樹園)、鹿津部眞顔等の名家が輩出したので、狂歌が大いに流行し、江戸町家の富裕者中にも好者が多かつたので、それ等富裕者が金にあかして當時の浮世繪名家に挿畫を依賴し、一方書肆蔦屋には補助金を添へて其出版を請ふたもので、書肆は彫刻、用紙、製本等、及ぶ限りの華美を極めて出版したのである、之を口汚く云へば、江戸の平凡狂歌師連中は、當時隆名を博せる浮世繪師の畫によつて、自己の駄作を人々に示さんとしたのである

されど其結果が今日諸外國人に日本産物の精華として愛玩され激賞さるゝに至つたのであるから、へボ連も亦國家に利益を殘した者と云つて可からう

さりながら茲に云つて置かなければならぬのは、當時出版された三四種の『狂歌卅六歌仙』とか、又は『狂歌五十人一首』『狂歌百人一首』等の類は、其畫面が五十百の數多くあるにも拘らず、其價格が甚だ廉であるの一事(高價の狂歌本は其挿畫が五六枚位ないのが多い)これは當時の風俗を知るの便とならない事もないが、肖像めいたものゝみを描いてあるので、其彫刻製本等は美であつても、浮世繪として賞玩するに足りないからである、何故其樣なものが多く出版されたかと云ふに、これは狂歌大流行の際とて、例のへボ連が賣名手段として、版元に五兩十兩の金を出して、自己の肖像めいたものを掲載せしめる事が盛んであつた爲である、それ故其畫者は著名の繪師であつても、畫題が好くないのと、後世其へボ連を崇拜する者もないので、隨つて其價格が低いのである、恰も明治の醫師番附とか書家一覽とか云ふの類に、金を出して其高位置に加へられて居るのと同樣、其賣名利己の劣等心が紙面に表はれて居るからである

事物の利弊は古今同一の圏内にあること、此一事を以ても察し得られるであらう

●片おもひの戀



挑燈に釣鐘荷なふ君と我
中をあかさむ片おもひ哉　谷之坊休甫

享保十年版(狂歌仙)

●へボ狂歌連の効蹟

浮世繪入の古い本であつて、諸外國人が最も高價に買收する結果、日本人間に於ても高價に賣買されるのは、天明寛政頃より享和文化頃までに出版した江戸の狂歌本である『山滿多山』『狂月望』『四方の巴流』等の類二三十種は、いづれも一冊數十圓の賣買價格であるが、是は外人が狂歌入の繪本を望むのでは無く、葛飾北齋、喜多川歌麿、窪俊滿、鳥文齋榮之、北尾政演等の畫が、精巧華美の技術によつて發揮されて居るからである、當時何故其樣に精巧華美の物を出版したかと云ふに、明和後、唐衣橘洲、朱樂菅江、四方赤良(蜀山)、宿屋飯盛(六樹園)、鹿津部眞顏等の名家が輩出したので、狂歌が大いに流行し、江戸町家の富裕者中にも好者が多かつたので、それ等富裕者が金にあかして當時の浮世繪名家に插畫を依賴し、一方書肆蔦屋には補助金を添へて其出版を請ふたもので、書肆は彫刻、用紙、製本等、及ぶ限りの華美を極めて出版したのである、之を口汚く云へば、江戸の平凡狂歌師連中は、當時隆名を博せる浮世繪師の畫によつて、自己の駄作を人々に示さんとしたのである されど其結果が今日諸外國人に日本産物の精華として愛玩され激賞さるゝに至つたのであるから、へボ連も亦國家に利益を殘した者と云つて可からう

さりながら茲に云つて置かなければならぬのは、當時出版された三四種の『狂歌卅六歌仙』とか、又は『狂歌五十八一首』『狂歌百八一首』等の類は、其畫面が五十百の數多くあるにも拘らず、其價格が甚だ廉であるの一事(高價の狂歌本は其插畫が五六枚位ないのが多い)これは當時の風俗を知るの便とならない事もないが、肖像めいたものゝみを描いてあるので、其彫刻製本等は美であつても、浮世繪として賞玩するに足りないからである、何故其樣なものが多く出版されたかと云ふに、これは狂歌大流行の際とて、例のへボ連が賣名手段として、版元に五兩十兩の金を出して、自己の肖像めいたものを揭載せしめる事が盛んであつた爲である、それ故其畫者は著名の繪師であつても、畫題が好くないのと、後世其價格が低いのである、恰も明治の醫師番附とか書家一覽とか云ふの類に、金を出して其高位置に加へられて居るのと同樣、其賣名利己の劣等心が紙面に表はれて居るからである 此事物の利弊は古今同一の圈內にあること、一事を以ても察し得られるであらう

●片おもひの戀



挑燈に釣鐘荷なふ君と我 中をあかさむ片おもひ哉　谷之坊休甫

享保十年版(狂歌仙)



雲母繪

東洲齋寫樂畫

五代目市川團十郎似顏繪

原畫は縱一尺二寸五分橫八寸五分ほどのものであるのを寫眞で縮めて摸造したのである

雲母繪考

『浮世繪類考』に「寫樂、東洲齋と號す、俗稱齋藤十郎兵衞、江戸八町堀に住す、阿州侯の能役者なり、歌舞伎役者の似顏を寫せしが、あまり眞を畫かんとて、あらぬさまを書なせしかば、長く世に行はれず、一兩年にして止む(式亭三馬の註に、僅に半年餘行はるゝのみ、とあり)五代目白猿、幸四郞、半四郞、菊之亟、仲藏、富十郞、廣治、助五郞、鬼治の顏を半身に畫き回りに雲母を摺りたるもの多し、俗に雲母繪と云ふ」とあり、『日本繪類考』に「寫樂が雲母摺込の工夫は面白けれども、此の人の似顏畫は、あまり眞に過て、顏の皺、頰のほくろまで細に畫きて、却つてあらぬさまに見え、人々賞翫せざる事となりしなり、されど一時行はれたれば、寫樂にならひて雲母繪を畫く者多し、歌麿、英山、北齋、榮之等も亦畫きたり」とある、これで雲母繪は東洲齋寫樂が寛政頃に初めて出した事が判る

明治三十九年發行の吉澤商店古代錦繪買入概價表に「雲母摺錦繪は普通錦繪の人物の周圍を雲母にて摺りしものにて銀摺とも稱し今より百年前に行はれしものなり其畫工は東洲齋寫樂、初代歌麿、榮之、榮昌、榮里、國政等○寫樂の雲母摺は何れも役者の似顏繪なり一枚拾圓乃至參拾圓○歌麿は一枚五圓乃至參拾圓、榮之、榮昌、榮里は一枚五圓乃至貳拾圓、國政は一枚參圓乃至拾圓なり」とある

寫樂は誰の門人ともつかず、大阪の耳鳥齋の如く、一種飄輕な似顏繪を描いた人である、此雲母繪を外國人が好いて一枚數十圓に買取るのは、何故であるか分らないと云ふ人が多い、我輩もこんなものに高價を拂ひたくないので、東京酒井好古堂の摸刻物を集めて滿足して居る

異名同書

兩名あるもの改題せしもの

(寶永七年版行(辨疑書目錄)

△宮すゞめ七册　寺社物語
△戀の夢合三册　是樂物語
△魚太平記二册　河海物語
△三幅一對三册　咄物語
△するすみ物語四册　懷硯
△戀の文づくし二册　水の柏
△とはずばなし三册　子孫鑑
△かゝり船五册　長明寢覺
△善惡物語五册　可笑記述追
△一休品物語四册　見ぬ京物語
△金持重法記　八鏡論
△光廣道之記三册　春の明ぼの
△七十四孝一册　親子物語
△御伽物語四册　とのゐ艸
△月見の友五册　螢隨筆
△日本歳時記三册　曆艸
△新因果物語七册　本朝二十不孝
△女諸禮重寶記五册　嫁取調法記
△いかだ船五册　うきよ物語
△新百物語五册　御伽比丘尼
△難波鑑六册　むかしの京
△見ぬ世の友五册　語園
△二人比丘尼二册　化野物語
△萬年曆一册　大雜書
△日本永代藏六册　新長者敎
△物草太郎一册　多賀本地

●浮世繪師の名物畫　(五)

喜多川歌麿の鮑取



これは三枚續きの中央一枚を縮寫したのである(原版は彩色摺)右方の一枚は一人の女が裸躰で立つて腰巻の水をしぼり、一人の女が大鮑を手に取つて示す圖、左方の一枚は二人の裸躰女が岩の上で休息中、水中の魚を見て居る圖である

此鮑取の圖は日本の版行繪中最も高價に賣買される品である、完全のものであれば目下外國相場が三枚で千二百圓以上千五百圓位、但し日本で原版と寸分の相違ないやう翻刻したものは一枚十五錢位である

現今浮世繪師　(五)

歌川國松

師門　二世歌川豐國 小林永濯 豐原國周
俗稱　歌川國松
年齡　五十六 (安政二年生)
生地　江戸下谷
現住　大阪市北區老松町二丁目七番地

宮川春汀

師門　富岡永洗
俗稱　宮川守吉
年齡　三十八 (明治六年生)
生地　三河國渥美郡畠村現福江町
現住　東京市芝區高輪南町五十二番地

多田北嶺

師門　父多田北嶺
俗稱　多田豐
年齡　四十五 (慶應二年生)
生地　岡山上内藤町
現住　大阪市北區東梅田町番外五二〇

河合英忠

師門　右田年英
俗稱　河合六之助
年齡　三十三 (明治十一年生)
生地　東京麴町區内幸町
現住　東京市芝區三田四國町二番地



男女縁のつな引



正徳六年即ち享保元年の版本、西澤一風の小説「今源氏空船」に酒奥の巣、こんな籤引をした事が出て居る、タワケの極ではあるが著作としての想はおもしろい

他山の玉

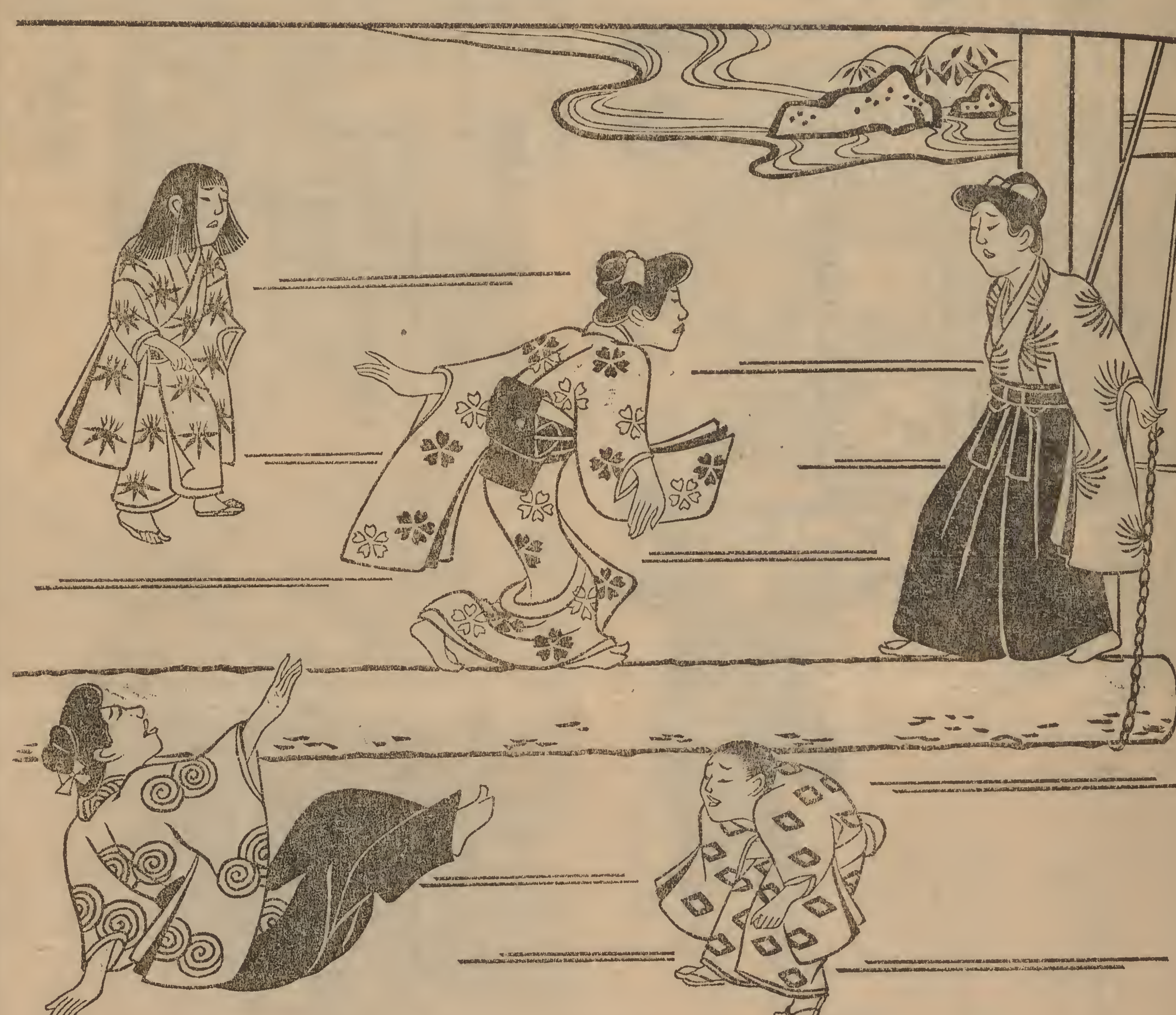
▲ほにほろ　此花第四枝「ほにほろ考」中「何故ほにほろと云ふかはトント分らない」とありて、終りに和蘭陀語らしいと推斷なされたが、あれは英語のHobby-horse「ほびーはるす」の訛したのではあるまいか、びがイ行のにに、るがラ行のろに轉じることは敢て不思議はない、英國でも紙張子の馬を腰に付けて踊ることが約十四五世紀の頃に流行してモーリスダンス等には盛んにあつたらしい、此ほびーはるすが和蘭陀人によつて日本に渡來したのではあるまいか　（韓國仁川せすん生）

▲剃髪奇談　此花第四枝「剃髪奇談」の附記に「今日之を喜劇に翻案して、曾我廼家一座の如き者に演せしめしならば、最も興趣あるものたらん乎」とあつたが、これは既に一昨年頭當地の歌舞伎座で曾我廼家兄弟が演じたのを觀ました、定めし抜目のない兄弟が『耳囊』か、宮武先生御發行の古雜誌でも讀んで脚色したのでせう　（京都酒呑亭管巻）

（記者曰）前號發行後、某友人が來て「剃髪奇談」の記事は感心しませぬよ、あれは古い演劇にもある事で、村中の者が殘らず坊主頭になるといふ筋のものもあります云々と告げられた

明治の風俗（一）

菱川師宣をして書かしむれば



東京大阪新聞と浮世繪師（現在）

『此花』前枝に「新聞紙と浮世繪師」と題して、明治十九年の略表を掲出したが、四月一日發行の『日本及日本人』に、東京各日刊新聞の現在挿畫擔任者を批評してあつた、其中から新聞に關係せる浮世繪師を左に摘記する

△東京朝日新聞　右田年英　池田輝方　河合英忠
△都　新聞　井川洗厓
△報知新聞　鏑木清方
△國民新聞　井川洗厓
△中央新聞　武内桂舟
△讀賣新聞　井川洗厓
△二六新報　宮川春汀
△中外商業新報　山中古洞

此外、時事新報の渡邊審也、毎日電報の細木原靜岐、東京毎日新聞の三井萬里、やまと新聞の公文菊仙などは浮世繪に類似した繪を描いて居るが、派が違ふから茲には加へない
次手に云ふ、大阪の日刊諸新聞と現在關係の浮世繪師とは左の通りである

△大阪朝日新聞　右田年英　幡多恒春
△大阪毎日新聞　多田北嶺　山本英春
△大阪時事新報　歌川國松
△大阪新報　北野恒富　磯部恒延
△大阪日報　（匿名某氏）

●古い牢舍

此花第四枝中に「此花記者入獄紀念繪」と題して、古い牢舍の繪を蒐集されてあつたが、予の藏書中、該延享より前の版本中に牢舍の圖が二つある、一は萬治二年版の「かげきよ」といへる舞の本に挿入せる景清牢破りの圖、一は年代不詳なれど、寛永末年頃の版本と見るべき「誹畫讃」にある日朗等入牢の圖である、浮世繪師の畫ではないが、古雅の牢舍圖として追加されよとて、京都の山口松香氏より寄せられたのが此二圖である

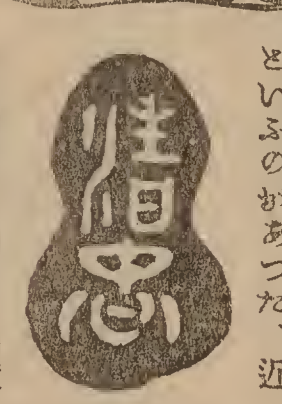




●浮世繪師逸事　（二）

▲鳥居清忠氏の初筆　芝居の繪看板に特技を揮へる鳥居派といふのは初代が鳥居清信、二代目が清倍、三代目が清滿、四代目が清長五代目が清滿（二世清滿）、六代目が清貞であつて、今の清忠氏は其七代目であるが、現に當地道頓堀辨天座四月興行、東京俳優一座の繪看板に筆を執つて大阪芝居に異例の光彩を放つて居るが、氏は鳥居家に產れしも、父清貞は氏をして鳥居家を繼がしむるを厭ひ幼少の時より河邊御楯の門に入れたので、氏は齋藤南陵の畫號もあるが師河邊氏は久保田米僊翁と共に、鳥居派畫家の絕滅を慨して、門人南陵の清忠氏に鳥居派に復歸する事を奬めたので、氏は終に鳥居風の繪を專門とする事になつたのであるが、當初は誰も氏に揮毫を賴む者が無かつたので、新俳優川上一座の中幕一枚の番附を、川上から「一盃耆るなら描かせてやらう」と云はれ、其請求通りにして漸く希望を達した事もあると、氏の直話で聞いた　（座禪堂旦水）





初代清信の門人に清忠といふのがあつた、近年其清忠の銅印を僞造した者がある

●問答　（一）

▲天淵道人（問）　北齋派の畫風にして天淵道人「司馬章」と署名押印せる肉筆の美人繪三幅所持せり、何れの書物畫人傳等にも見當らず若し御心當りあらば御敎示を願ふ　（大阪岡本）

△天淵道人とは何人であるか此花記者は知りませぬ、谷文晁の門人に小林天淵といふ畫家があつて、太田南畝等と交際して狂歌なぞを詠み、浮世繪らしい畫も描いたさうですが、それは北齋派でもなく司馬章でも無いから違ひませう

▲繪本松の調（問）　享和三年十返舍一九の序ある「繪本松のしらべ」といふ彩色繪本の筆者は誰なるか　（大阪瀨川島）

△此花記者所有の同本は、いろは順の「を」迄を上卷としたものと、「う」迄を上卷としたもの丶二種ですが、未だ其下卷を見たとはありませぬから、何人の畫筆か明瞭しませぬが、北尾政美であると聞きました、多分政美の筆でせう、同下卷は發行しなかつたのだと云ふ說も聞きました

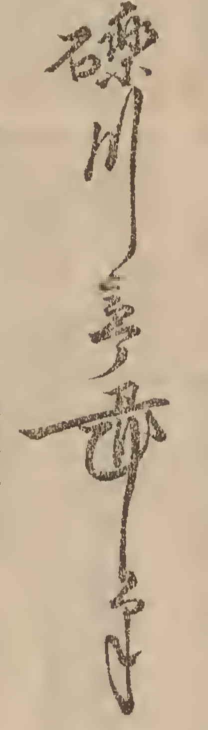
▲窓雪庵（問）　小生筆者不明の肉筆浮世繪一葉所持せり「九退世深谷」「窓雪庵」の捺印あり筆者及び年代を問ふ　（韓國仁川せんす生）

△記者は知りませぬ、「九退世深谷」などいふ關防遊印を押してあるのならば、浮世繪師では無いのぢやありませぬか

▲不器用又平（問）　不器用又平と署名せる淫畫あり、浮世又平の匿名なりと聞く、果して然るか　（近江長濱石川某）

△浮世又平は元祿前の人（岩佐又兵衛は慶長寛永頃の人）である、不器用又平とは一妙開程好（一勇齋國芳）なぞと同時に多く淫畫を描いた人で、元治元年に七十九歲で歿した歌川國貞（三世豐國）の戲號です、不器用又平を浮世又平の匿名であると云ふのは時代も畫風も何も知らない人です

▲礫川亭（問）　版行の江戶繪美人畫に



といふのがありますが、礫川亭とは何といふ氏名で何時頃の人で誰の門人であるか知らせて下さい　（筑前博多登久滿財）

△右「礫川亭」の下の字は永理といふ號を假名で「えいり」と書いてあるのですが、其氏名は知りませぬ、時代は寛政文化頃であつて、喜多川歌麿の門人であらうかと思ます「浮世繪師便覽」に「永春門人か」とありますが、永春（長谷川光信）は大阪人、永理は江戶人で畫風も大きに違ひます

珍書解題　五　（永田文庫）

▲尤の草紙　大本二册　寛永十一年版

これは假名草紙中有名なものであつて、記事は全卷悉く長き物とか靜かなる物とかいふ物はづけである、一例を云へば、嬉しき物の品々と題して、人の來て子をほむるは嬉し、諸勝負に勝たるは嬉しなど、嬉しを多く並べて、最後に「嬉しさを昔は袖に包みけり今宵は身にもあまりぬる哉」とある、これは古き就の草子又は徒然草などからの跋書又は燒直であらう、跋文にも「此尤草紙は或人つれ〳〵の餘りに硯にむかひ筆にまかせて書集ける云々」と記してある、奧附には「寛永甲戌六月吉日書舍中野氏道伴刊行」

▲似我蜂物語　大本六册　刊行年代不詳

談話の隨筆であつて、所々に古雅な繪が入つて居る、元祿頃の俳句集に「似我蜂」といふ外題本もあるが、此似我蜂といふ意は無名著者の序に「予此年まで聞し事共書留置ける書物に乞食袋と云ものあり世の人の爲に自然は一行なりともならんかしと思ひ品々の詞を綴りあらはし侍るが故に此雙紙を似我蜂と名付る事此蜂何にても他の蟲の子を取て我巢に入れよき事を敎へ養育してむつまじくそだてけると聞きしより其心をかたどり似我蜂と號す云々」とある

「日本小說年表」に此書を元祿十五年版と記してあるがそれは再刻本であらう、これは奧附を削り去つてあるので刊行年代は不明であるが、其版式によつて考へると萬治寛文頃のものらしい

▲艷占奧儀抄　小本一册　明和八年版

口繪に美人が机の上で占ひをして居る鈴木春信の畫らしい彩色摺が一枚あつて、頗る艷ッぽく出來て居る、役者の紋づくしで占ふ仕組であるが、その實は役者評判記と見るべきものである、一例を云へば、丸に結綿の紋にあたつた所を見ると「此紋にあたる人は仕合ありといへども內証はいたごとの苦しみ絕ねず、一色事は哧なことで美しいができんせん奇妙な事と思召せ間によろしいがござんすと人にとられなんす　一御病氣はおごりなんすが強いからお勝手は火の車でござんすそれに又お酒も好きやんすに勝負事がお好きなんすからたまるものではござんせん」など瀨川路考の性行を諷刺するの類である

●花つみ籠

▲東京の浮世繪展覽會　在東京の座禪堂且水氏よりの通信に「浮世繪流行、否復興思潮の發展として、東京木挽町萬安樓に於て浮世繪展覽會あり、催主は小林文七氏にして、酒井好古堂、吉田元祿堂の補助にて、四月九日十日の兩日開催あり、三都其他各地愛藏家の肉筆畫幅、いづれも逸品揃なりし、當日は春雨烈しきにも拘らず來觀者多數にて混雜を極めたり、出品目錄左の如し云々」とあつたが紙面狹隘で其目錄を茲に揭出する事はできないが、同會の趣意書を左に

○古代浮世繪展覽會趣意

浮世繪の日本美術中重要なるものたるに拘らず其の展覽會の如きは從來世上に其の例を見ること殆ど皆無なりしに、今回內外有志家の盡力苦心により本會を開催するに至れるは實に發起人等に於て以て獨り自己の光榮とする所のみならず又以て斯道の盛事とする所なり

さて本會の趣旨は浮世繪愛翫者博覽の爲め及び浮世繪研究者勵奬の爲め諸家秘藏の浮世繪肉筆を陳列し以て其の縱覽に供するに在り

抑も浮世繪は日本特有の美術なれば本邦人の以て世界萬國に對して誇稱すべき所なるに何人も之れに留意せざるは實に斯道の爲め慨しむべきなり然るに歐米に於ては學者美術家等皆な其美を認め其の用を知り之れを世界萬國の美術と比較し以て珍重愛翫すること實に其の極に達せり

斯く浮世繪が歐米人に珍重愛翫せらるゝこと甚しきに其の母國たる日本に於て贅物視せらるゝは誠に以て日本に於ける美術保護上の一大缺點と稱するも決して過言に非ざるべし因て發起人等は敢て率先して幾分か此缺點を補充するの重任に當らんとす歐米人にして浮世繪を珍重愛翫するものに在りては日本即ち浮世繪の母國に來遊して之れを觀覽することを得るの愉快は千金を拋ちて調理せる山海の珍味を以て饗應せらるゝの愉快に比して千層萬層勝る所とす今や歐米人の觀光の爲め團體をなして日本に來遊するもの其の千百團體の多きに至らんも知る可からず此の時に際して浮世繪と國を同うする吾人何んぞ之れを贅物視して留意せざるを得ん江湖同好の諸賢乞ふ本會の趣意を諒とせられよ

明治四十三年四月

浮世繪展覽會發起人總代
小林文七　敬白

浮世繪の起原性質價値及び浮世繪師の苦心

浮世繪の起原性質價値及び浮世繪師の苦心に關して一言せんに凡そ次の如きものあり

一浮世繪は他國の畫法より出でし支流に非ずして本邦に特發して本邦に固有なるものなること

二浮世繪師の落款には元祿時代より日本繪師何誰又は大和繪師何誰と署名し以て自から他派の畫師と相ひ區別するものあること往々なりしこと

三浮世繪師の苦心は民間に於ける人情風俗を畫くに在りたること

四民間に於ける人情風俗の繪は畫家の至難とする所にして手腕あるものに非ずんば眞を寫すを得ざること

五人情風俗を畫きて衆目を引くには美人を畫くに若かざること（今の世に於ても數多の雜誌に美人の寫眞を口畫とするは衆目を引くの爲め即ち賣れ高を多くせんとするの爲めなること）

六浮世繪師は至難中の至難たる美人畫に手腕を奮ふに務めたること

七本邦人從來の習慣として支那傳來の畫法即ち仙佛山水を主とする畫法及び其の畫家を貴重し日本特發の畫法即ち人情風俗を主とする畫法及び其畫家を輕蔑するは實に美術獎勵上當を得ざること

歐米に於ては公平なる學者美術家が或は浮世繪即ち日本固有の繪畫に關して書を著し或は之れを博物館に陳列し以て之れを畫道に於ける世界大家の作品と比較し以て其の美を賞贊し來りたること既に久しきに及べり且又本邦が世界各國特に歐米と交通すること頻繁を致せる今日本邦に於て何程日本美術と賞譽せらるゝものと云へども其の能く世界の美術一般と比較して巧妙なるを證明せらるゝに非ずんば何ぞ賞譽を世界各國特に歐米の人士に博するを得んや

▲倫敦に於る日本浮世繪　「神戸又新日報」の近刊紙上に、倫敦特信「浮世繪の大流行」と題して揭出せる所によると、去る三月二日英京倫敦のソセビーに於て競賣に附した日本浮世繪は、所謂ジャパニース、カラー、プリンツ大流行の際とて、喜多川歌麿筆の吉原花魁の道中繪は一枚日貨四百五十圓、同夕立の美人畫は一枚三百圓、鈴木春信筆の蟲狩は一枚三百六十圓、同仁義禮智の四枚は九百四十五圓、歌川豐廣の蟲賣三枚續は二百五十圓、歌川豐國の奧女中は二百十圓、同寶船は百五十圓で落札したとの事である、此外當日六七千圓の賣買であつて「前記鈴木春信の蟲狩の如きは幅五寸、長一尺に足らざるペロ〳〵の一片紙なるが背景に暗を配らひ美人が雪洞を捧げて佇立める側に若衆が萩の枝に蟲を探るの狀を寫し圖案と其サビ加減には無量の味ありげなれど局外者にはこれ一枚が三百六十圓かと呆れ返る程なりし」と同通信者の附記

▲佛國畫家の日本浮世繪研究　ルイゴットフロイ氏といへる佛國の靑年畫家は、日本の浮世繪研究のため、去る六日來着、向ふ一ヶ年間滯在の豫定であると云ふ

▲此花記者入獄送別會　大阪古書交換會の連中發企となつて、去る十日銀水樓に於て開催、酒宴の席上數氏の演說等があつた

●入獄の前中後

予は「此花」前枝にて廣告せしが如く、四月二十日迄に入獄の筈なりしにて、不在中二ヶ月分の雜錄其他の用務を處理すべく、晝夜大奮勵にて當備五枝の編輯は十日に終り、第六枝は二十日迄に植字の校正を遂げ、其間に十月發行第七枝の編輯準備大半を經へ、浮世繪鑑の第二卷「奧村政信畫譜」は十八日迄に附錄刷了の筈なるが、只「筆禍史」のみは若干の寸暇だもなかりしを以て、予の出獄後まで延引すことゝせり、乞ふ諒せられよ

さて何日に入獄して六月何日に出獄すといふことは、次枝に廣告する筈なり

先に獄則變更ありて、親族の外は書信を許されざる事となりしに付、在獄中予宛の御書信は見合せられたし

予は短日月なりといへども、今回の在獄二ヶ月間は、浮世繪研究上に必要なる德川時代史のみを晝夜研究する豫定なれば、出獄後に於ける本誌の編輯上には、漸次幾分の異彩を放ち得べしと、今より自ら負ふ所たり

明治四十三年四月十日雅俗文庫に於て

宮武外骨

附記　「此花」第六枝は全紙面に異例の記事と繪畫を滿載して六月一日に發行し、第七枝は予出獄の上發行す

第二枝以下の石版彩色畫は成蹟好からざるに付、大奮發にて今回より木版彩色摺とす、第七枝には歌麿筆の舟中美人

明治四十三年五月一日發行
大阪市西區江戶堀南通四丁目十番邸
發行所　雅俗文庫（電話西千八百六十一番）
假編輯兼發行人　渡邊源三
印刷人　太田彌八



明治四十三年六月一日發行

浪華名物

竹田近江機捩戲場

此芝居世に
名高く東西
邊鄙の旅人
も竹田から
くりを見ね
ば大阪へ來
りし驗なし
とぞ聞へし



丹羽桃溪畫　寛政十年版　攝津名所圖會

例言

△本誌は、萬國に於て、畫壇の精華と評されつゝある、日本浮世繪の研究ご鼓吹を目的こして、毎月一回發行するにあり

△されご俗耳に容り易きを主こして、高尚の論説等は、當分これを避け、低きを先こす

△又浮世繪に關係なき事項を記すここもあり、これ浮世繪の趣味を解し得ざる人にも本誌を讀ましめ其間漸次に牽引して同化せしめんこする一種の手段たり

△浮世繪師個人に就ての專門的研究の結果は、其記事を本誌に登載せず、浮世繪鑑、浮世繪師全傳等の別著こして發行す

△以上の主旨に反せざる研究家の投書は歡んで迎ふ

編輯發行者

▲此花第六枝總目錄

此花　第六枝

明治四十三年六月一日發行

浮世繪入の落語

予が浮世繪の研究に着手したのは、去る四十一年の夏頃であつて、それ以前には菱川師宣とか、勝川春章とか云ふことを、口に唱へた事も無かつたのである、爾來マダ二ヶ年にも足りない短日月、シカモ他に多忙の本業あつての餘事に過ぎなかつた、隨つて浮世繪上の知識は甚だ淺薄であるに、其專門雜誌として予が大膽に『此花』を編輯發行するに至つたのは、之を專業として編輯しつゝ、發行しつゝ浮世繪の研究を重ねたならば、單獨に孤鼠々々と研究するのよりは、便利であらうと信じたからである

故に予は今春來、腦中浮世繪の事の外、何等の餘念もないのである、『此花』の編輯上には缺點も多いであらうが、予は全力を此編輯に集注して居るのである

然るに幸か不幸か、予は新聞紙法違犯として二ヶ月の禁錮に處せられ、今回其刑の執行を受ける事となつたので、其不在中の二ヶ月間は『此花』の發行を休止せんかとも思つたが、又顧みて、予の一身上のため、讀者の愛顧に孤負するのは、本意とすべきでないと感じ、それより日夜の奮勵を以て、五月發行の第五枝を編輯したが、第六枝を例の如く編輯するには、少くとも十五日以上を要し、尙第七枝の編輯準備にも着手しなければならぬので、入獄の豫定期日までに、迚も終了し得ない、そこで第六枝は特別異例のものにしなければならぬ、編輯上に多くの時間と苦心を要しないものにしなければならぬ、と考へた結果、浮世繪に關係の少くない古來の落語を蒐集して、其間に浮世繪を挿入したならば、趣味あり利益あるものを、讀者に提供し得られるであらうと、終に當枝の如きものを發行するに至つたのである

古い落語などは面白くないと思召すお方は、只其挿畫のみを玩味せられたい、若し又落語も挿畫も共に感心しないと云はるゝお方は、予の一身上に於ける右の事情を諒察して、一回だけは發行しなかつたものと、おあきらめ下さい、そして又『此花』前枝に廣告した「予は短日月なりといへども、今回の在獄二ヶ月間は、浮世繪研究上に必要なる德川時代史の みを晝夜研究する豫定なれば、出獄後に於ける『此花』の編輯上には、漸次幾分の異彩を放ち得べしと、今より自ら負ふ所たり」といへるを、せめての樂み草とせられん事を願ふ

『此花』第七枝は、予が出獄の上編輯發行する豫定なれども、其挿畫及び材料の過半は既に出來上つて居るので、七月一日に發行し得ないやうな事があつても、同十日には讀者に見ゆることを得るであらう

明治四十三年四月十日　宮〇武〇外〇骨〇

附記

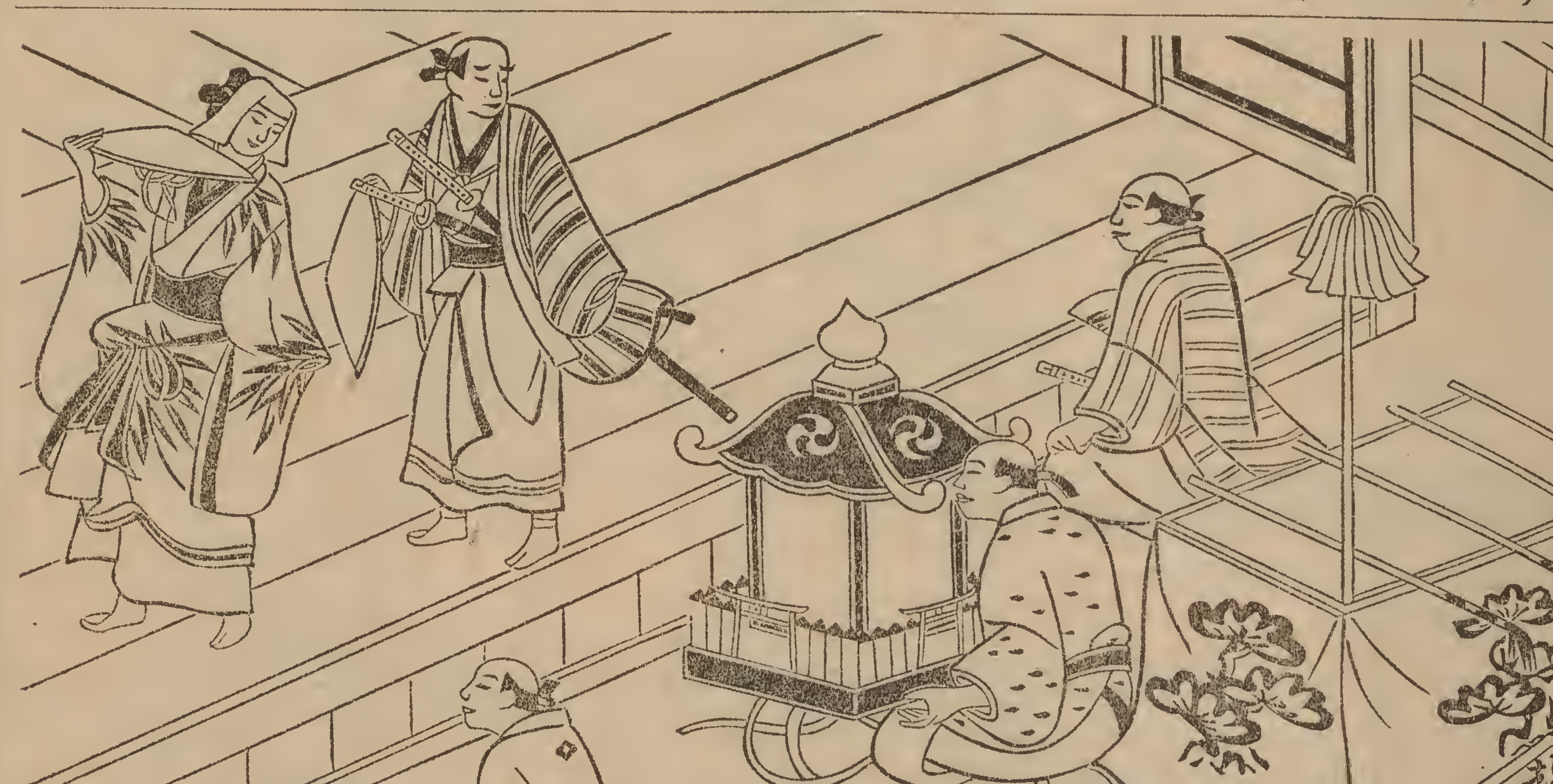
古めかしい落語といつて貶す人もあらうが、いつも寄席で演じて居る落語などは、大概古めかしいものである、新聞雜誌上に出る新作落語といふものでも、古い落語の燒直しが多い、それ等を新しい落語と思つて居た人々は、古きを溫ねて新しからぬを知るであらう

今回萬治以來慶應までの落語本數十種を通讀したが、其萬治頃の本には元和版の醒睡笑から剽竊したものが多く、元祿頃の本には萬治寬文頃の本から取り、明和安永頃の本には元祿寶永頃のものを燒直したのが多く、文化天保頃の本には其以前のものと同案なのが多かつた、其年代に拘らず、文章の輕妙なのと、挿畫のあるものを撰出したのであるから、原本の年代は落語の年代でないのが多い

博奕うち打負けて、赤裸になれる者二人ありしが、因幡堂へ參りて、藥師へ立願し申けるは、我等二人博奕に打まけ、はだかにて候へば、寒さたへがたし、衣を與へてたび給へと祈りて、通夜をしけるに、御夢想ありけるは汝申すところ不憫なれ共、衣を與へがたし、先今宵は此堂の下に、犬の子四五ひき有べし是を腹にのせて、寒さをたすかるべしと有ければ、二人づれにてたづねしに、一人は三びきたづね出す、一人は二ひきたづね出し、御夢想の通に、腹の上に犬の子をのせ、夜寒をしのぎしが一人いふやうは是にてもおとがさむし、いざ此方の二疋を其方へやるか、又其方のを此方へとるか、一方へかたづけむといふ、一だんとてはや賽を出しける、かゝるあさましき身となりはてゝも、博奕のきざしやまざる事を、藥師しめし給はんとて、犬の子をあたへしなれば、兩人賽取出しゝが、きつと思ひつゞけ、かくあさましき上にも、其方我等いまだ此こゝろざし出るよと、いひて止みしと也　萬治二年版(百物語)

● 雨乞の願ほどき

元祿十三年夏の頃、丹波の山家に、家二十斗の在所に高十五石の所あり、庄屋あまりに雨ふらず、其在所のうぶすなに一尺斗の宮あり



庄屋願かけ被申しは、雨を給はゞ、役者五六十人程に三番續きの大狂言水がらくりを致し慰め可申と願かけゝれば、其夜雨降世の中よし、扨雨乞の願ほどき致し可申とて、京へ役者雇ひに登す、役者五六十人參り候へば雜兵百人の上參り候、銀子壹貫五百目取の者行んと云、算用いたすに高十五石の所、五十匁米にして廿年が間一粒も殘らず雨乞の願ほどきに入事なればかなはぬと云、さる者是はもつともなり、しかし神の事そまつには成申まじしうぶすな樣へ慰め可申と云ければ、水がらくり致し手形被致よとてやがて壹貫わたす、受取九百文儲けた、思案格別、夫のうぶすなの御輿に繩をつけ、脊中に引掛け京へ登り、都萬太夫が芝居の内へ入、かの御輿を前にかゝへ今度の雨乞の願ほどきなり、能御覽候へとて見せた　正德二年版(露休ばなし)

● 書狀の往復

さる吝嗇男、友達の方へ狀遣はすとて、桐の葉に狀を書きて遣はしける、彼の男讀みて、さて使を呼び「さて〳〵そちの檀那は、世帶知らずじや、此桐の葉は燒つけになる、そちの肩をぬげとて、使の丁稚が脊中に返事を書き、とめに「御覽の後、火中〳〵」と書きてやつた　正德六年版(輕口福藏主)

● 編輯用原本目錄

『此花』當枝臨時編輯に付憑據したる原本は左の數十種なり

落語本の祖『醒睡笑』及『昨日は今日の物語』等は、浮世繪入のものにあらざるを以て採らざりし

雅俗文庫には落語本の蒐集少きが故、先づ東京の帝國圖書館にて、其珍本を借覽し、次に大阪の永田文庫にて右に漏れたるものを借出し、次に京都の山口松香氏より當方指定の二種のみを借出したるなれば、永田山口の兩氏は此目錄外に尙多數の藏本あり

○當流咄初笑	中本五册	享保十一年版
○輕口腹太鼓	中本五册	寶曆二年版
○繪本輕口惠方謎	中本一册	寶曆十年版
○繪本輕口笑顏草	中本一册	寶曆十年版
○繪本輕口初音森	中本二册	寶曆十一年版
○難波の梅	小本一册	寶曆版
○浮世繪つくし	中本二册	寶曆版
○友達ばなし	小本二册	明和版
○鹿の子餅	小本六册	安永元年版
○俗談口拍子	小本一册	安永二年版
○再度餅	小本一册	安永二年版
○さしまくら	小本一册	安永三年版
○賣言葉	小本一册	安永五年版
○年忘噺角力	中本五册	安永五年版
○立春噺大集	中本十册	安永五年版
○咄献立	中本五册	安永六年版
○新作はなし	小本三册	安永六年版
○時勢話大全	中本五册	安永六年版
○落咄茶呑友達	小本三册	安永九年版
○笑話お臍で茶	小本三册	安永九年版
○猫に小判	小本一册	天明五年版
○新作落咄德治傳	小本二册	天明七年版
○新玉のおとし咄	小本一册	天明版
○噺手本忠臣藏	小本一册	寛政八年版
○廓壽賀書	小本一册	寛政八年版
○臍可茶	中本五册	寛政九年版
○聰の掛金	小本一册	寛政十一年版
○頓太郎	小本一册	寛政十二年版
○落咄申の八眞似	中本五册	寛政十二年版
○賣切申候切落咄	小本三册	享和二年版
○東都眞衛	小本一册	文化元年版
○しみの住家物語	中本二册	文化二年版
○落噺顯懸鎖	中本五册	文政九年版
○江戸嬉笑	小本一册	文政九年版
○お蔭道中噺栗毛	小本一册	文政十一年版
○福德咄天狗	中本五册	天保十四年版
○初咲咄天狗	中本五册	天保十四年版
○大寄噺の尻馬	中本三册	天保版

(右雅俗文庫藏本)

○私可多咄	大本五册	萬治二年著
○百物語	大本二册	萬治二年版
○一休關東咄	大本三册	寛文十二年版
○波名肆物語	大本三册	延寶八年版
○枝珊瑚珠	中本五册	元祿三年版
○輕口露がはなし	中本五册	元祿四年版
○正直ばなし	中本五册	元祿七年版
○輕口福藏主	中本五册	正德六年版

(右東京帝國圖書館藏本)

○露休はなし	中本五册	元祿四年版
○初音草咄大鑑	大本五册	元祿版
○輕口老婆さくら	中本五册	寶永三年版
○當世誑嘘八百	中本六册	寶永版
○輕口福おかし	中本五册	元文五年版
○輕口東方朔	中本五册	寶曆十二年版
○輕口俵金袋	中本三册	明和八年版
○珍話樂牽頭	小本一册	安本元年版
○開上手	小本二册	安永元年版
○飛談語	小本一册	安永二年版
○おとしばなし	小本二册	安永四年版
○書集津盛噺	小本二册	安永五年版
○時勢噺綱目	中本五册	安永六年版
○乘合船	小本一册	安永七年版
○心の春雨噺	小本二册	安永八年版
○初鰹	小本一册	安永十年版
○おとし噺	小本一册	天明七年版
○評判の俵	小本一册	天明八年版
○富貴樽	小本一册	寛政四年版
○和賀笑美壽	小本二册	寛政七年版
○くゝり猿	小本一册	寛政八年版
○雅興春の行衛	中本五册	寛政八年版
○落咄福種蒔	小本二册	享和元年版
○新撰勸進話	中本五册	享和二年版
○落咄腰巾着	小本一册	文化元年版
○鬼外福助噺	小本一册	文化二年版
○振鷺亭噺日記	小本一册	文化三年版
○臍の宿替	中本五册	文化九年版
○會席噺袋	中本三册	文化九年版
○戯聞春の壽	小本一册	文化十二年版
○滑稽福笑	中本五册	文化十三年版
○落咄熟志柿	小本一册	文化版
○滑稽即席邯鄲枕	中本六册	文政四年版
○馬鹿大林	小本一册	文政八年版
○春興福神咄	小本一册	天保二年版
○開卷百笑	中本二册	天保十年版
○即席一笑噺の種	中本三册	弘化四年版

(右大阪永田文庫藏本)

○鹿の卷筆	大本五册	貞享三年版
○木の葉猿	小本一册	寛政十二年版

(右京都山口松香氏藏本)

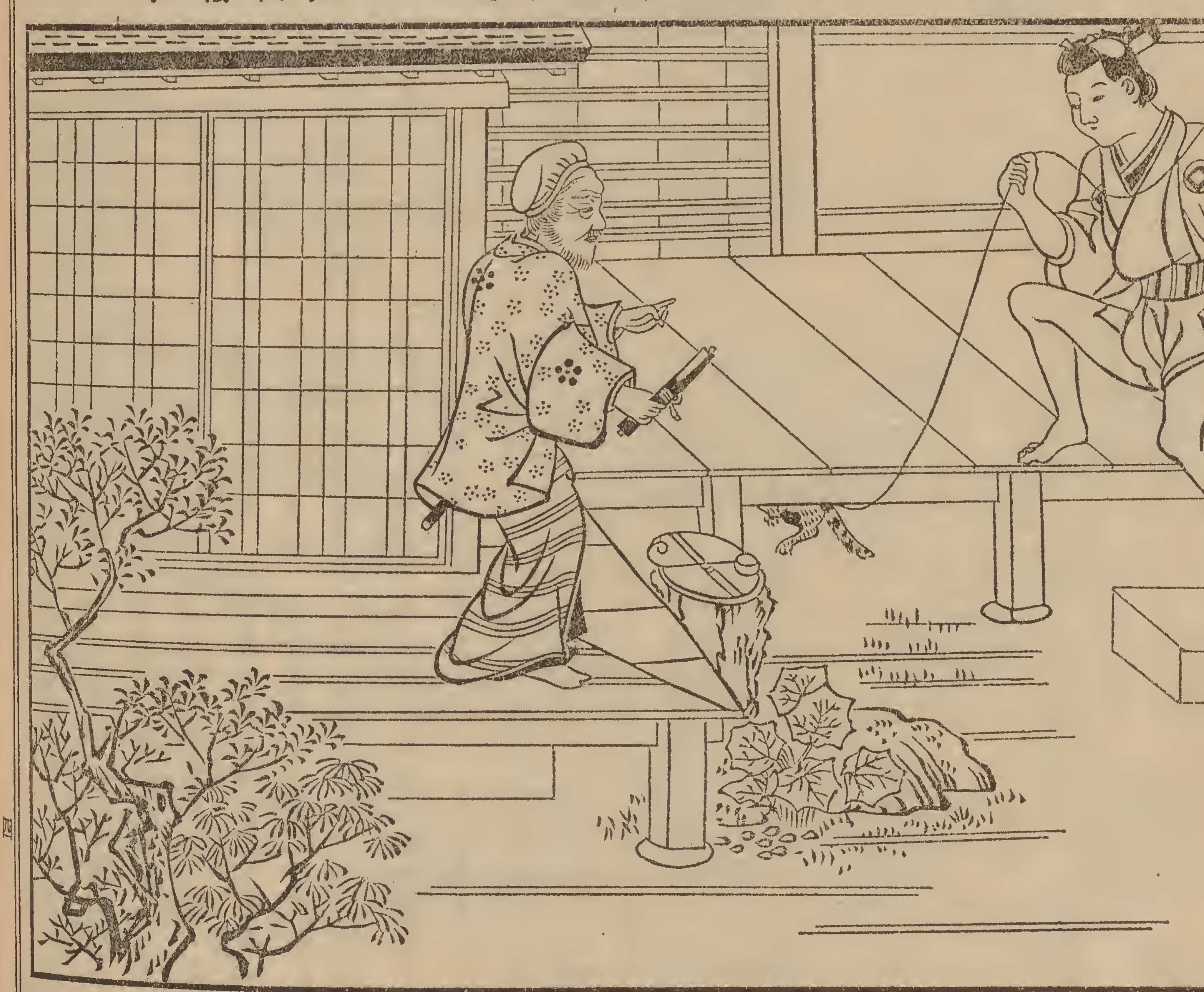
●琥珀の根付

さる人琥珀の緒〆を求め、塵など吸はせて試みければ、上々吉の玉にてよく塵を吸ふ、やがて印籠巾着につけて腰にさげ、あるとき魚屋町を通りしに、俄に印籠巾着重くなりしかば、不審に思ひ腰を撫て見ければ、うるめ(鰯)を二俵吸ひとりたり、大きに悦び宿へ歸り、さて〳〵塵をよく吸ふ琥珀は、かやうの俵物をも取る、これは重寶な物じやとて、又同し琥珀にて根付を大きに拵へ腰にさげられし、其後米屋の門を通りければ、何かは知らず、したゝかなる物を吸ひ取りたり、殊の外腰重くて、自由に歩りかねもせぬを、汗水になりてそろ〳〵歸り、宿へ行着きて、やれ嬉しや今日は米を一俵吸ひ取りしと、獨笑してよくよく見れば、薦を被りたる乞食の死骸にてありし　延寶八年版(波名肆物語)

●法華宗の猫

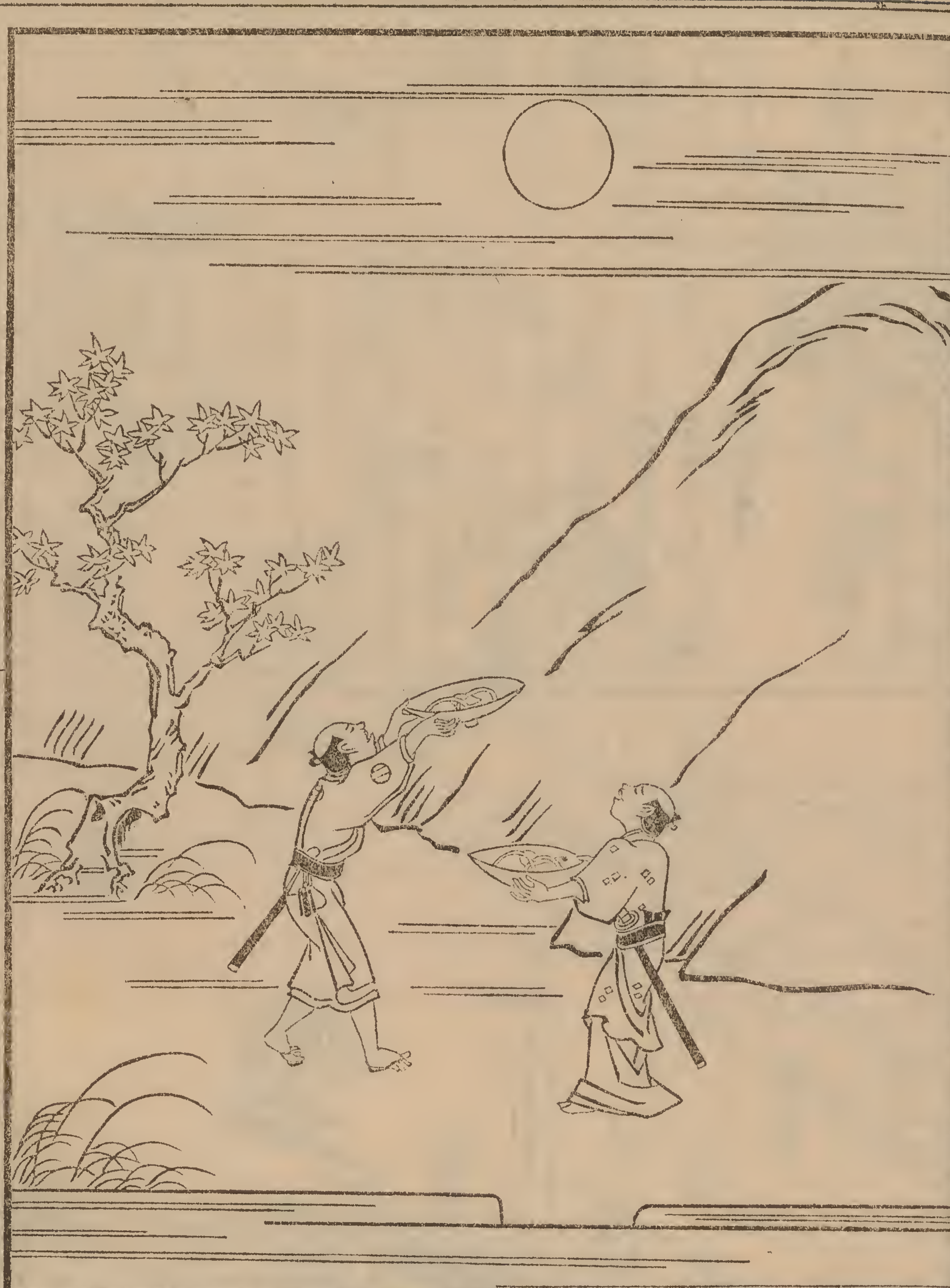
江戸芝牛町に、とつと堅き法華宗のおはしける、近所より猫を貰ひ求めけるに、さき樣淨土宗にておはしければ、此猫も淨土なるべし、兎角我所に置くからは、持法させんとて、繫ぎ置きける猫を捕へて、言含めけるは、一切の經々の中に我法の妙法華經は餘經にすぐれて功德深し、されば釋迦以來も、四十餘年未顯眞實と說きたまふ、諸敎十王最第一、いかなる畜類も、此經にて成佛疑ひなし、經に曰く、若有聞法者無一不成佛と說きたまふ、此法を聞くものあらば、一つとして成佛せざるといふ事なしとの意なり、龍女成佛の緣にまかせて、此法華經の五の卷を戴かせんとてこんじんより佛身にいたるまで、此經をよくたもつと云ながら、經を持ちて戴かせんとする時、猫愕きて椽の下にかけ込みたり、亭主それ引出せと三助に言付ければ、ひたもの首綱を引けども出です、やれ引け〳〵といへば、何程引きましても、なか〳〵出ませぬといふ亭主「出ぬか「出ませぬ「それなら置け、それほど情がこわくば、法華にきはまつたと云はれた

元祿七年版(正直はなし)　石川流舟作　菱川師宣畫



●月落ぬ落し咄

むかし〳〵、名月の夜の隈なきに、賢うもない者二人月見して、一人のいふは、月は動くのなり、何とぞとりはづしたらば落さうな、あはれ落たらば拾はんといふ、いま一人の者唐土へは落たと見へた、月落烏啼といふ詩がある、日本へは延喜の帝の頃は落なんだと見へた、蟬丸の謡に世は末世に及ぶとても、日月は地に落ぬとある、されども今は若し落る事もあらふ、落るならば笠で受たがよい、富士太皷に月落かゝる山城も、はや近づけば笠を脫ぎとある程に、うつかりと見るな、笠を持てとて、二人ながら翌日の辰時まで笠を搆へた　寛文十一年版(私可多咄)　中川喜雲作　菱川師宣畫



●比翼の魚

ある人申けるは、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理枝といふて、戀路の道はいづくも同じ事のやうにいふが、此界の下の龍宮にも戀といふ事はある事やと問ふ、おろかの事、そうべつたいの有ものに、一つとして和合かぐる事なし、殊に龍宮も一つの淨土なれば、いかで其事なかるべし、さればこそ昔浦島太郎も龍宮の乙姫と契りをこめて、玉手箱を持歸りしためしあり、それのみに限らず、比翼の魚といふて、一つに締め合せて居る魚をば見たまはずやといへば、左樣成もの咄しに聞くさへ初めなりといふ、扨々おく耳な人かな七月澤山來るものなり、俗名は○○○さばといふものじやといふた　元祿七年版(正直はなし)

●八百屋の人參

八百屋のむす子、大阪へくだるとて、夜舟にて乘合衆とはなしに、我は吳服屋の、いや米屋のと名乘あふて、さて彼八百屋殿に「御自分は御商賣は何をなさるぞ」と問へば、此むす子借上ものにて、さながら八百屋とはえいはず、我は藥種屋でござる、それゆへ大阪へ買物にまかる、いつも大分に買入いたしますといふ、乘合の衆きゝて「なにと大人參は只今いか程いたします」と問へば「大人參も束によりますと云はれた　正德六年版(輕口福藏主)





●時のはやり事

神田めつた町（江戸）に、德齋とてぬけたる膏藥賣り、いつも貧にて、やう〳〵夫婦の渡世をおくりけり、ある時女房異見しけるは、其方のやうに氣の働きなき人は、一生が間乏く暮らすものなり、世間の人は利發にて、同じ膏藥を賣れども、喜太郎が膏藥、すべ〳〵となをるなど、變りたる事云てはやらかす、總別何にても、はやり事をしだせば、儲る物なり、織物にさへ、いちのやおり、さんやれおり、染物にも、延寶年中に染め出したるとて延寶染あり、近年好色といふ事がはやれば、好色ならちや、好色たばこ、などゝ云、ちとはやり事を云て、膏藥も賣りやれといへば、德齋しごくして、その翌日より箱をかたげて萬應膏藥と云まいものでも御座らぬ、しかしゐんにやうと云て賣ありくほどに、人みな氣狂ひそふなと云た　元祿三年版（枝珊瑚珠）。

●惡性の名付親

さる所に二十許の惡性なる息子（六郎兵衛）あり、夜る〳〵外に遊びに出けり、親大きに腹立して、懇意なる人を兩人かたらひ、御太儀ながら、今晩息子めが居る所へ、同道たのむよし申て、扨親父は鉢卷、よりぼうなど持ちて、常に子が行所を見とゞけ、あはたゞ敷表の戸をたゝき、父に此方の息子は居ぬかと、急にたづねければ、子は親父が聲と聞き、やがて二階へ走りあがり、隱れ所のなきまゝに天井へ飛び上りければ、腰より上は天井にてかくれたり、親父友三人ながら、二階へ行見れば、何かは知らず、腰より下ばかりの物ありけり子も絶體絶命てゝなりと、息づむひやうしに、大きなる屁を一つぽんとこきたり、



扨一人がいふやうは、是は定めてろくろ首といふものじや、又一人がいふはいや首は見へぬほどに、ろくろ尻にてあろふといふ、親父も興をさまし、いや〳〵いづれもの量見とは違ふ、ろくろ首でもろくろ尻でもない、先の鳴り音を聞くからは、六郎兵衛にてあらうといふた　元祿四年版（輕口露が咄）

●鯉の目



さる人下人にいひ付て、鯉をあらはせしに、此下人鯉の目を水で呑ば、萬に薬なりと聞及び、鱗ふきて後、鯉の目を操出したる所を、主人見付て、そこな腔者、何事をしをるぞと大聲揚てわめかるゝ、下人肝をつぶしけるが両の眼玉ひょいとぬけ出、俎の上へ落た、下人の傍輩是を見て「扨〳〵目のぬける程叱らるゝといふは此事か、やれ〳〵早く目の玉を入よ」とて、周章ふためき、鯉の目を取違へ、彼者の目の跡へ、鯉の目を入し程に、目のはた落くぼみ、見苦しけれども、是非もなし、其後此下人大阪へ使に行とて、伏見より夜舟に乗て下りしが、夜半時分に船より這出、川へはまる、船中の人々、やれ誰やら川へはまつたはとて引あげ、扨も麁相な人や、小便するとてはまられたかと問へば、いや〳〵我等は曾て覺へず、現にはまりしといふ、能案じて見れば、鯉の目を入しにより、本の魚の時川にばかり住し故、古郷なつかしくてはいりけん　延寶八年版(波名皐物語)

●安産祝ひの挨拶

ある人座敷を立なをし、近所の人を新宅へ申入てふるまいける、酒なかばに内方出て、何も御座りませぬが、新宅を御馳走に酒一つまいりませといわれければ、一座さりとてはお物入で御座らふが、結搆な御普請で御座ると云、内方、うちの力ばかりでは御ざらぬ、みな近所の衆の御かげじやと云、與茂作かへりて咄しけるは、某殿の内儀は、さりとはくわをいわぬ利發な人じや、あの身代で誰に合力も得らりやうぞ、これ〳〵いわれたりと褒める、女房それほどの事がいわれぬものかと云けるが、十四五日へて喜びをしたり、七夜の祝ひとて近所の衆をよびたり、今日は目出たし、御内儀様もよろこびて御座らふ、安々と御平産、ことに男子で御座るなどゝいひければ、女房まかり出て、亭主ばかりの力で出來たでは御座らぬ、みな近所の若い衆のおかげじやと云た　元祿三年版(枝珊瑚珠)





兄さまの了簡

爰に花屋の茂兵衛といふて五十ばかりになりしが、子二人あり、兄は二十一二、弟は十二三になりける、南風烈しく吹きて、見世へ塵埃夥しく吹き上げけるほどに、兄の太郎介を呼びて、表へ水を打たせけるに、弟の次郎は表の椽に腰かけてゐける折節、母親近所へ禮に行きけるが、年ばゐは四十路に餘れども、心は春めきて若々としたる人なれば、伊達染の着るものに、繻子の幅廣帶して、とりなり引き繕ひて歸られし、次郎見て、いよしなものめ、ほつとりものといふて、母の尻をたゝく、親爺見て、大たはけめ、それ頭をはりやれ、母にそのやうな事するものかといへば、母親さてく馬鹿めといふに、親爺、そのやうな事をさせつければ癖になるとて、背中を思ふさまにたゝく、次郎夥しく泣けば、兄かけ來つて、何者がたゝいたぞ、誰にたゝかれたかといかつがましくいへば、親爺、おれが叩いたが何としたといふ、如何に親爺じやとて、正月しまにたゝかしやるは、如何やうなる科しましたと云へば、親爺、さてく親が子をたゝくが何じや、いひわけをせまいと思へども、あまりおのれ、いかつがましければいふ、母親の尻をたゝくさかいに、おれが打つたが何としたといはれて、太郎、それは親爺の道理じや、次郎めの尻をたゝくぞといふた

貞享三年版(鹿の巻筆)　古山師重畫

(註) 此繪は右の落語に關係せるものにあらず、「鹿の巻筆」は鹿野武左衛門が作の落語を集めしものなるが、武左衛門は常に己が作の落語を、湯屋床屋、芝居の樂屋、又は繪師其他の家に行きて咄せしものと見ゆ、斯くの如く本文に關係なき挿畫多くあり

又「鹿の巻筆」は大判紙形の大本五冊にして、其挿畫も大なるものなれど、茲に掲ぐるは寫眞にて短縮せしを彫刻せるなり、原本は京都山口松香氏の所藏にして著名の珍書たり



猿屋の菓子

浅草駒形(江戸)に猿屋といふ饅頭屋あり、お出入の御屋舗に、御祝言ありて、こなたの御姫様どなたへおこしが入ると、日限さだまり諸事御用をとゝのへけるに、御用人とりぐ沙汰し申されけるは、此度の御菓子は、彼が所にてとゝのゆる事、御祝言にさる屋不吉なり、是非賣りたくば家名を替へよと仰せければ、かしこまり候とてかへり、看板の猿に扇を持たせたり、御屋舗衆來らせ給ひて、家名を替へまするど云ふたが、元の猿屋じやと仰せければ、亭主、なるほど替へました、猿が扇を持ちましたれば、猿舞屋で御座りますと云ふた

元祿三年版(枝珊瑚珠)　石川流宣畫



(寫眞縮版)

四角な卵の鷄

庭鷄、家鴨の所へ來り「サテ近年は貴様の玉子もおいらが玉子のやうに賣れるが、それについて飛んだ事がある、おらが隣の雌鷄が四角な玉子を産み落した　あひる「そいつは珍らしい、昔から譬にも女郎の誠と玉子の四角はないと云ふが、目黒に比翼塚が出來たから、四角な玉子もありそふなものだ　にはとり「イヤその玉子が此間孵つて鷄になつたが、へんちきよ　あひる「ハテノどんな鷄になつた　にはとり「なんの事はねへ、不具者よ、胴が細くて首が太く、足がちんばで羽が横つちやうへぐつと延びて、イヤモフ變なふうの鷄さ　あひる「そしてその鷄は鳴くか　にはとり「鳴くには鳴くが、それが又大笑ひさ　あひる「そりやアどふ鳴く　にはとり「べかつこう

文化頃版本(落噺熟志柿)

主人の汗

さてく今日は暑い日だ、これ此汗を見てくりや、羽織までとをつたと丸裸になり、コリヤく小僧、此處へ來てあをげく、エゝもつときつくあをげ、埒のあかぬ奴だと叱られて、小僧やつきとなり、團扇を兩手に持ち、さつくとあをぐ、亭主「オゝいゝ氣味だ、おかげで汗は何處へかいつてしまつた」といへば、小僧「その汗は皆わたくしの方へまいりました

寛政頃版本外題不詳

●螢の熱

「おつねさん、お前の髱に螢がとまつて居るぞへ、それ〳〵首筋へ這入るわナ、「オヽわたしやいや」と首筋へ手をやれば、螢が指先にひいやりと觸われば、「オヽあつ

寛政頃版（落咄申の人眞似）　石田玉山畫



●大根井戸

尾張から上つた人が、身共が國方には、切口三尺より四尺まで、長さ一間半より二間までの大根があると云はるゝ「何と其種を一つ二つほしいが「何になさる「されば庭に作りて其あとを井戸にする　寶暦頃版（當流輕口初笑）

●虱と綿屑

小僧が「もし旦那様、お肩に虱が居ります」とつまみてとれば「コリヤ馬鹿者奴、そんな事を大きな聲で云ふものじやない」と叱れば小僧聲を低くして「ハイこれは綿屑でござりました　安永二年版（聞上手）

●妖怪本流行時代の諷刺

化物屋敷とさゝ、なに今時そんな馬鹿な事があるもんだ、おれが見屆け様と一人空屋敷に至り、定てわる格の一眼か、大入道が茶でも汲で出るだらうと待構へて居る、程なく夜もしん〳〵と更け渡り、二階をみち〳〵、さてこそもゝんがわと威すだろう、何條驚くものかと、降るを見れば、手の有さふな花魁の姿にて、オヤばからしいと、につこと笑ふ「おきやわがれ、氣の利いた化物は足を洗て引つ込む時分に、二階から降りて、てうづに行く振りで色男の所へよこをしに來たのか、ねづが見付ぬうち早く消てなくなれ〳〵と、思ふ樣洒落つけられ、化物はどうしやうのうと楊子を使いながら二階へあがる、こんだは餘程怖かろうと鯉口しめして待所へ、二階をみち〳〵、今度はきいた風な通り者と化て來る、「朝歸りの遲くなつた、親父の顔はど怖くねい、もちつと案じなせい、いつこうな筋だ、化物の怖くねいは不人相な新造にも劣りだによと、いつぱいにてらされ、惡い地口を云れたりして、化物は大にふさいで二階へあがり夫より一向おりて來ねば、待ち躰屈してそつと梯子を上つて見れば、狸腹這ひになつて新板の草双紙を見ながら「近年の草双紙は一つも手本にならぬ　文化三年版（振鷺亭噺日記）

●藝といふ事

ある田舍者、京に上り、歌舞伎芝居を見にゆきて歸りけるに、宿屋にて、皆々いふやう、今日は何を「藝」にしたと問へば、イヤ〳〵今日は、寶物の詮鑿と、色事の痴話ばかりで、なか〳〵藝をするところでは無かつたと云ふた　寶暦十年版（繪本輕口惠方謎）　西川祐代畫



●それから如何した

コウ十兵衛さん、なんぞ噺をして聞かせねな十兵衛「イヤ吉公は惡い癖で、兎角人が話をすると、それからどふした〳〵といふから、忙しなくて話が出來ねへ　吉「ハアそふ云つては惡いか、そんなら云ふめへから話ねへ　十兵衛「そんなら賭にして、主がそれからどうしたを云ふと二百文とるぞ　吉「云ねへとお前出すかな　十兵衛「知れた事よ　吉「コリヤア面白へサアはなしな、十兵衛「イヤ昨日新道のおかくが所へ行つたが親父もおふくろも留守で、娘ばかり内に居た　吉「ムヽそれ〳〵　十兵衛「そこでおかくが云ふには、今日はみんな留守で淋しいから、炬燵にでもあたつて、はなしてくんなと、うぬが方から炬燵へ這入たと思へ　吉「ナヽそヽそれ〳〵　十兵衛「そこでこいつは面白いと炬燵へ這入るや否、娘の方へぐつとよつた　吉「エヽもふ二百文うつちやれ。それからどうした　享和四年版（落咄腰巾着）

●慈姑の毒づき

旦那めかけと二人にて、酒盛をはじめ、いろ〳〵な甘い物などをこしらへ、樂み居る、妾肴に玉子をはさめば、旦那「おれは玉子より慈姑がいゝと云へば、妾「慈姑はおよしあそばせ毒でござりますと云へば、慈姑「おれよりもてめいが毒だ　寛政八年版（鄭壽賀書）



●不具者三八

片目と跛と鼻缺と三八づれにて、日暮里へ出かけしが、笠森（稲荷神社）へかゝりければ、お仙が居るを見て、三八ながら其前を通りかね、いろ〱考へけるが、やう〱と工夫してちんば「これはしたり糞を踏んだ」とびつこり〱して行く、鼻缺は袖を鼻へあて、「さても臭いは〱」と云ひながら行く、あとから片目を手でふさいで「イヤモウ二タ目とは見られぬ〱」　明和版（友だちばなし）



お仙茶屋の前　　鳥居清經畫

（註）お仙は當時江戸三美人の一

●自分の風体

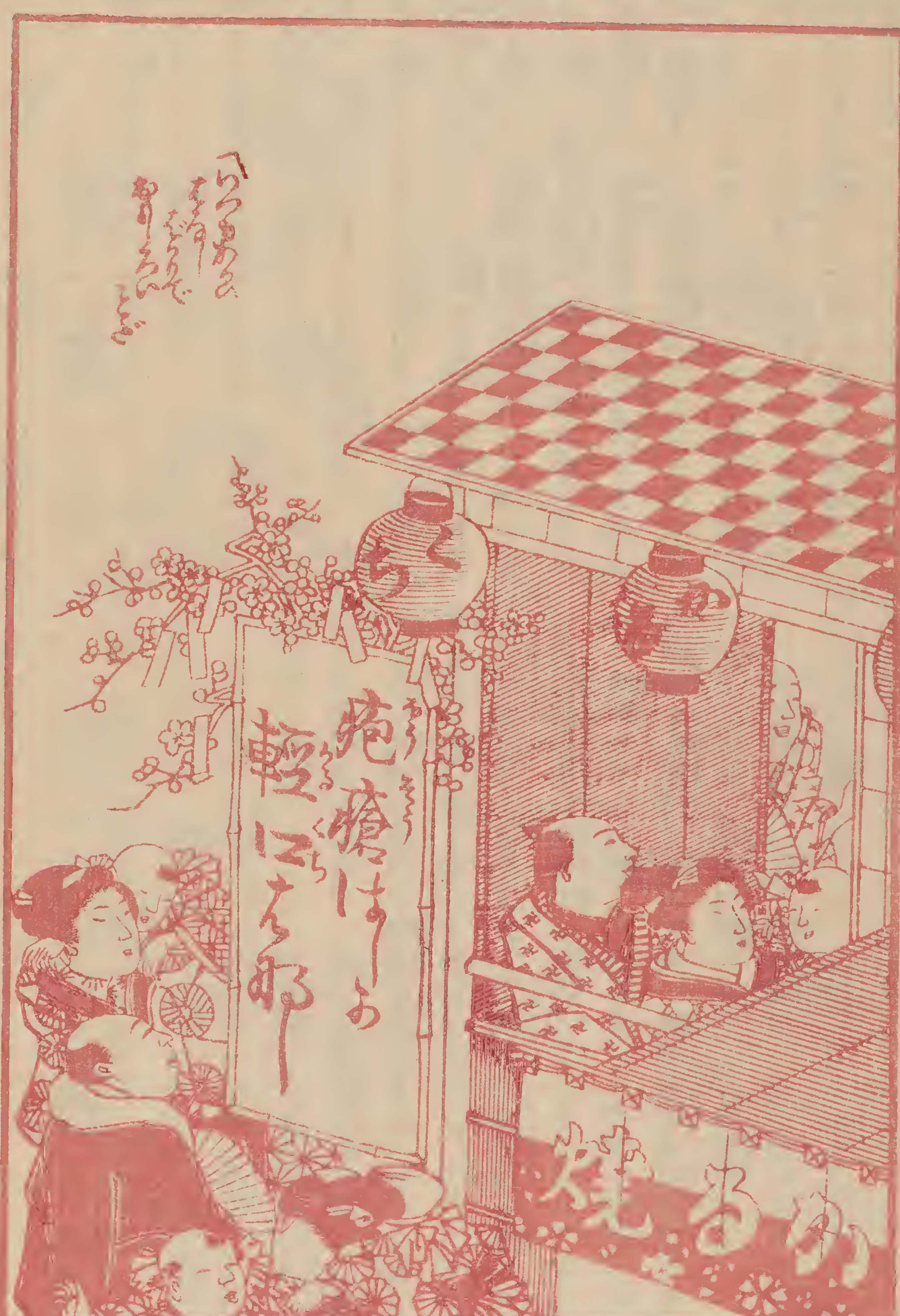
田舎の客人吉原へ行き、女郎屋へあがり、夕方より夜見世見物せんと出しが、さい前あがりし内を忘れ、あれこれと尋ねて少しの目印を思出し、これ〱若い者、さいせん、せんじの羽織を着た客人は見へぬかと云へば、まだお歸りなされませぬと云ふ、そんならおれか見てくりやれ　安永四年版（おとしばなし）

●ろくろ首の娘

本所へ美なるろくろ首が出るといふ事だが、嘘か眞か見屆けに行ふではないか、こりやおもしろい、今から行ふと、三升樽をさし荷ひ大盃を小脇にかい込み本所さして急ぎ行く、頃は極月寒氣しのぎかたく、なんと金兵衛おし付八ッであらふ、まづ寒さしのぎに一ぱい呑ふではあるまいか、そふもしよふと樽を開き酒最中、向より十七八の美なる娘靜々とあゆみ來る、綱平やいゝ肴が來るぞ、あれがかのなら、お仙もはだしだなどゝ云ふ所へ彼娘二三間向へすわり、ちとおあい致しませうと首をのばす、これは〱願ふに幸、さあ〱と大盃へなみ〱つぐ、娘ありがたしとぐつと引かけ、あゝいゝ氣味でござんすと咽をなでる、これは羨ましい、ひとしほ樂が長い「アイそのかわりに、おからをたべる時のづゝなさ　安永元年版（珍話樂牽頭）



疱瘡繪



輕口ばなしの圖　天保頃

歌川貞繁畫

爲永春水著（疱瘡安全子供輕業）

●不具者三八

片目と跛と鼻缺と三人づれにて、日暮里へ出かけしが、笠森(稲荷神社)へかゝりければ、お仙が居るを見て、三人ながら其前を通りかね、いろ〳〵考へけるが、やう〳〵と工夫してちんば「これはしたり糞を踏んだ」とびつこ



お仙茶屋の前　鳥居清經畫

りく〳〵して行く、鼻缺は袖を鼻へあてゝ「さても臭いは〳〵」と云ひながら行く、あとから片目を手でふさいで「イヤモウ二タ目とは見られぬ〳〵」　明和版(友だちばなし)

（註）お仙は當時江戸三美人の一

●自分の風体

田舎の客人吉原へ行き、女郎屋へあがり、夕方より夜見世見物せんと出しが、さい前あがりし内を忘れ、あれこれと尋ねて少しの目印を思出し、これ〳〵若い者、さいせん、せんじの羽織を着た客人は見へぬかと云へば、まだお歸りなされませぬと云ふ、そんならおれか見てくりやれ　安永四年版(おとしばなし)

●ろくろ首の娘

本所へ美なるろくろ首が出るといふ事だが、嘘か眞か見届けに行ふではないか、こりやおもしろい、今から行ふと、三升樽をさし荷ひ大盃を小脇にかい込み本所さして急ぎ行く、頃は極月寒氣しのぎかたく、なんと金兵衛おし付八ッであらふ、まづ寒さしのぎに一ぱい呑ふではあるまいか、そふもしよふと樽を開き酒最中、向より十七八の美なる娘靜々とあゆみ來る、綱平やいゝ肴が來るぞ、あれがかのなら、お仙もはだしだなどゝ云ふ所へ彼娘二三間向へすわり、ちとおわい致しませうと首をのばす、これは〳〵願ふに幸、さあ〳〵と大盃へなみ〳〵つぐ、娘ありがたしとぐつと引かけ、あいゝ氣味でござんすと咽をなでる、これは羨ましい、ひとしは樂が長い「アイそのかわりに、おからをたべる時のづゝなさ　安永元年版(珍話樂牽頭)



輕口ばなしの圖

天保頃

語を「輕口」といふのは上方言葉である、其故輕口何々と外題した落語本は、京都か又は大阪で出したものに限つて居た、然るに輕口の名人が上方にも多くあつて、其版本で江戸人を笑はせた結、いつしか江戸でも輕口といふやうになつて、寛政後には江戸で輕口噺といふ外題の本をも出版るに至つたが、其輕口ばなしの圖を疱瘡繪に使つたのは、疱瘡が輕いやうにとの呪である

そも疱瘡といふ病は傳染性のものであつて、古來時々大流行を極めたが、其豫防法の行はれなかつ時代には、如何にすれば免れ得るであらうか、如何にすれば輕くすむであらうかと、無暗に心配た果、伊豆八丈嶋の者は疱瘡に罹らない、それは源爲朝が疱瘡神を退治したからであると云ふ妄を信じて「鎭西八郎爲朝御宿」と書いた紙を表口に貼つて置いたり、又家々に疱瘡神を祭つて、紙の幣を立て、患者には赤い衣服を着せ・赤の飯に赤い鯛を添へて食はせるなど、赤づくしにすば輕くすむと云ふ迷信から、赤一色摺の繪本に赤い表紙を附け、赤絲で綴たものを見せればよいなど、誰云ふとなく、それが流行して、文化頃から天保の末頃まで、盛んに出版されたのである、(此外に鍾馗の圖などを赤摺にした一枚繪も出たが、英人ジエンネルが發明した種痘法の日本に傳來した嘉永後には漸々これ等の出版が止んだやうである)其赤い本は患者たる小供に見せるものであるから、お伽草紙と同じく、阪田の金時がどうしたとか、兎と猿とが話をしたとか、又は種々遊戯の法などを書いたものであるが、元來疱瘡が輕くすむやうにとの呪であるから、其畫作中にも輕いづくしで、輕業とか、輕燒とか、輕石、輕めら、尻が輕い、荷が輕い、手輕足輕など、輕いと云ふ事を集めたので、輕口ばなしの圖までが出たのである

爲永春水著(疱瘡安全子供輕業)

歌川貞繁畫

●天女の前生

和尚さま、あの天人は佛のやうにもあり、佛でも無し、どうしたもので御座ります「アレか、あれは信心はしたれども、平常夫婦中がわるふて、一蓮托生とも契らなんだゆへに、天上の果を得ても、後家同前に暮らすのじや それが何の手柄ぞやと說かせ置かれた「ハア有難いことでござります、そして其の男の方は何になりますか「ム、それか、その男が五百羅漢じや　安永六年版(時勢話大全)竹原春朝齋畫



●蝦蟆と醫者

藪醫者療治の歸るさ、暑さに困り、木陰に涼み居たりしを蝦蟆來つて何の苦もなく呑にけり、醫者腹の中にて工夫し、懷中の藥箱より巴豆大黄の類をまき散らしければ、腹中大に鳴り渡り、醫者を立くだしに下しけり、醫者大に悅び歸らんとせしが、藥箱を蝦蟆が腹の中に忘れたり、是はしたりと又蝦蟆が前にかしこまり、ヤイうはゞみ、今一度おれ呑んで呉れいと云へば、うはゞみ大音にて、エ、醫者を見るも胸が悪い　安永五年版(立春噺大集)

●亭主の未練

夫婦の中ちよつとした事が心安だてゞ、一ついひ二ついひ、喧嘩となり、三くだり半を書て投付け、そのやうな奴にはあきはてた、出てゆけと云ふに、女房も腹立まぎれに奥へ行て髮化粧つくりたて、路考茶縮緬に金絲紋、下には茶小紋の無垢に黑繻子の帶を胸高にしめ「アイおさらば」と、涙ぐみていふを見れば、又美しく惜くなれども、そふとも云はれず、早く出て行けといへば、女房しほ〳〵と立つて店をさして出るを、亭主「イヤ〳〵其處から出ることはならぬ」といはれ、さらばと裏口から出さふにするを、又「イヤ其處からもならぬ」と云へば、女房「そふして何處から出たらよいのですか、亭主「出る所がなくば出ぬがよい　寶暦頃版(難波の梅)鳥居清經畫





●色氣と水氣

夏の夕景色、門へ水を打て居る所へ年増が氣色どつて來る故、打かけた手桶を左へ振廻し撒かんとする所へ、奇麗な振袖が來かゝる、これへもかゝつてはと、こちらへ振向けば年増が間近く來る故詮方なさに、手桶を差上げて手前の頭からざぶり　安永五年版(書集津盛噺)

●癩病者の眞似

業平といふ人は眉を剃り齒を染て居らるゝといふ事を聞き、我も業平にならんとて、眉を剃り落して歩きければ、道にて友達に逢ひ、貴樣は悉皆なりじやといへば、すいめおとのひらを云はぬかといふた　明和八年版(俵金袋)

●猫も杓子も

どうだ勘彌の芝居を見たか、何だまだいかぬか、去年からきつい當りで、猫も杓子もいかぬ者はないと云へば「ナアニ馬鹿をいへ、猫は足があるから行もしようが、杓子がどうして行かるゝものか「ハテ杓子も辨當に付いて行くわい　安永二年版(聞上手)

●九十九夜の通ひ

或お公家樣のお姫樣におもひまいらせそろの文つけたれば、今宵より百夜通ふて、夜毎に通ふたしるし、車の榻に疵つける、百夜過ぎなば必ず逢はんとの返事うれしく、雨の降る夜も風の夜も通ひ〳〵て九十九夜め、車の榻へ疵をつけ立歸らんとせし所へ、腰元出て袖を扣へお姫樣の仰やりまする、お通ひなされて九十九夜、一夜ばかりはまけにしてあげませう程に、私に連れましてお寢間へ直にまいれとの事と云へば、此男只いやはや〳〵との尻込み「ナゼ其樣に仰やりますといへば「アイ私は日雇でござります　安永元年版(鹿子餅)



●布施の狸

獵人佛事を執行ひしに、貧にして布施に包むべき銀子なし、をりふし狸一疋生擒り置たり獵人此狸にかたりて曰く、佛事の布施に包むべき銀子なし、汝畜類たりとも、こゝを能く聞分け、白銀一両の包銀に化て坊様の懐中へ入り、御寺まで行き、寺にて戸棚に入れらるゝ時逃げ歸るべし、汝が一命を助け遣はすべしと、狸得心して忽ち包銀に化けたり、其夜佛事首尾よく勤め、坊主は布施の一封を受取り機嫌よく歸られたり、暫くして表の戸を急に叩く者あり、獵人出て見れば、彼狸ふならく〱として逃げ歸れり、何とした、仕損じたかと問へば、狸泣聲にて、道でひねり殺そとしをりました　明和二年版(輕口東方朔)

●惚れ藥の流失

守宮の黒焼を求めて持けるが、美しき娘に逢ひ、これ幸と振りかけゝるに、風の吹く拍子に供の三平二滿にかゝりけるが、大きに戀慕ひ氣違ひのやうになつて付廻しければ、男は厭がり逃げるを跡より追つかけ、たとへ何處に逃げるとも本望遂げいで置かふかといへば男段々逃げあるき、川にて渡し舟を頼み川中へ漕出しければ、女續いて川へ飛込みけるが黒焼が流れ失せけるやら、吃驚したる顔して元の岸へ上つた　弘化四年版(噺の種)

●手足のいさかひ

手と足と寄合ひ、手が云ふには「きさまはおれより位が下つて居るから、人中へ出ても、足を出せは失禮者と云はれるが、可哀そうなことだと云へば、足が腹を立てゝ「それでもおれが糞を踏みつけた時には、てめいに拭かせる　安政二年版(春興福神咄)



●犬男

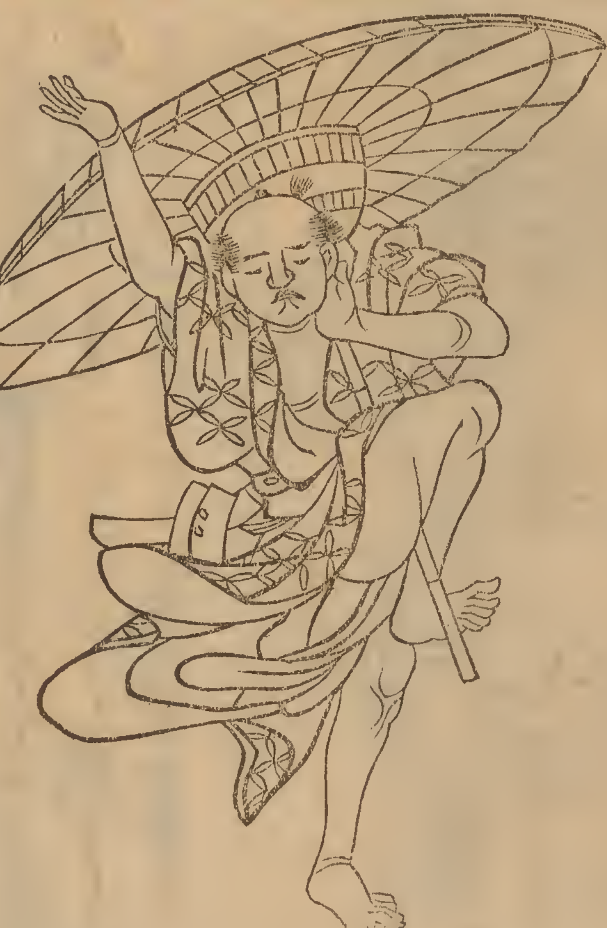
ある人友達の所へ夜噺に行、うか〱と夜の更ける迄居て最早歸らふと云しな、うぢ〱と去にかねる、友達がどこぞ悪いかと問へばいや〱何處も悪いことはないが、去にしなにいつでも犬めが威しをるに困ると云ふ、友達がそれには能い事敎へてやらふ、それは忝けない、どふするがよいのと問へば、先おどしかゝらぬさきに、四這ひになつてわん〱と此方から云へば、いかな犬でも先を越されてはよふ威さぬと云へば、かの男悦びて、直に歸りがけに敎へられた通りやつて見れば犬が逃げた、扨もよい事を覺へたと思ひ、翌る晩又外へ行、歸りに犬の居るあたりで四這ひになりてわん〱と云しを、きかぬ氣な犬、彼男の太股に咬付たれば、うろたへて「きやおん〱」といふた　寶暦頃版(輕口獨機嫌)

●無料入場

能と云ものついに見た事の無き者、場所なりとも見たき事に思ひ、木戸口に行ければ、笛皷の面白く聞へければ、何とぞして這入りたく思へども札買は大義なり、近付の人もなくうろ〱と横手へ廻れば、圍の板少しあきてありける故、首をそつとさし入れければ世話人見付、此處から這入る所でないと押出だす、彼者暫く思案し又彼の所へ行き、尻をずつと入れければ、内なる者又見付て、コレ其處から出る所でないと、帶をとらへて引ずりこんだ　安永頃版(輕口飛出駒)

●天に吹上げらる

もふしお聞きなされませ、此中わたしが風の吹くとき、傘をさして出たれば、風がフウとふくと、わたしの体が宙にだん〱吹かれて上るほどに、だん〱上つて、ぱつたりと支へたから、手を出していぢつて見たれば、星がさら〱　天明七年版(落咄德治傳)　泉昌有畫



●江州石山の小供

京大阪より石山の月を見に來るを、其あたりの小供が、あれは何を見に來るのだといへば月を見に來るのじやと云、小供、京大阪に月は無いかへと云ふた、弘化四年版(噺の種)

●不義者

亭主、間男を眞二つに切殺す、女房「私も共に殺して下され、亭主「いや殺さぬ、あの世で添はせてはならぬ　天明版(新玉のおとし咄)

●女房の味

獨住の人頓死しけるが、渺々と廣い川原へ出しと思ふに、是は早冥途か、何とぞ極樂へ行たいものと思ふ所へ、青鬼と黒鬼とが出て、「おのれは何者じや「私しは娑婆でひとり住いたし何も科なる事いたした覺へはなし、どふぞ極樂へまいりとふござりますといへば、鬼「おのれ娑婆で女房も持たず、人間の道さへ知らぬ大罪人、喰ふてしまふ筈なれど、女の味をも知らぬ奴を、喰ふでもない、賽の川原へうせろ「イヱ〱私しは在所で一旦入婿にも參り女房の味もぞんじて居りますといへば鬼「何じや女房の味を知つて居る「さやうでございますと云へば、鬼小聲にて「その味はどの様なものじや　安永五年版(年忘噺角力)

●腰元の顔

扨々御不沙汰いたしました、まづ御變りもなくてめでたい、御亭主様、只今是へ參る道で眞の美人といふ女を見ました、笠森のお仙でもかなひませぬ、あれがほんの三十二相などゝ申すのでござりませふ亭主「はてあればあるものな　客「申ぶんは少しもなけれど、若いはゞ鼻の下がちと短いばかりが疵でござります亭主「こいよお茶をあげい」腰元おこい鼻の下を隨分引きのばし客へ顔を突きつけて「お茶あがりませ　安永二年版(飛談語)



●足袋

女房、細工に夫の足袋をこしらへしに、十文の足へ九文の形にてこしらへし故、はいりかね、腹立ければ、女房大きにせき「用にもたゝぬ足ばかり大きくて　安永五年版(寶言葉)

●亭主の希望

何處でも寄れば色ばなし、アゝおらはおぼこな振袖がいゝ「イヤ〳〵新造よりも年増がおもしろい「イヤおらは地色は嫌ひだ、比丘尼がいゝ、といふ内に一人が「いや〳〵何もいらぬ後家がよい、兎角後家のこと〳〵」と云へば、皆々口をそろへて「そふだ〳〵後家〳〵」と云へば、一人が「おらが嬶も早く後家にしたい　安永元年版(開上手)

●仙術の女

座してくらへば山もなくなる道理にて、さる歴々の旦那、若盛りの血氣に任せ、新町通ひに現をぬかし夜晝の流連、終に大身代もばた〳〵とつるをたくり、今では非人同前の身の上となりけるが、世間の手前も面目なく、大阪の町をうろ〳〵貰ひあるこよりは、いづくいかなる山奧へも行て、仙人になりたらば飲食の世話もいらず、通力を得たれば自由自在に世間を飛びあるく樂み、是にはしかじと直ぐさま北山へと心ざし、五六日も飲まず食はずに暮し、木の根を枕として山に住けるが、段々髯はのび、からだは痩せ衰へ、もふ仙人らしうなつて來たが、飛んで見んと飛んで見れば、ひよろ〳〵する故まだ仙人にかたまらぬそふなと、いろ〳〵術を使ふて見ても何の事もなし、困つたものじやと思ふ内、向ふより女の仙人が來るを見れば、前かた馴染の新町の小糸といふ女郎なれば、是は珍らしや小糸ではないか、小いと、ヤアお前は吉さんかいなア、マアどふしてこふいふなりに成て、人も通はぬ此山奧へ來なましたへと問へば、吉サアわしも仙人にならふと思て來たけれども、まだ修行が足らんか今によふ飛ん術を使ふて見ても一向使へんが、わが身はいつから此よふに仙人になつたぞ、定めし術を使ふたり、通力を得たであろ、小糸、私はもふ通力自在を得て術も使へるは、何ぞお前欲いものはないかへ、有るなら何でも出して見せふかへ、吉、それは結構なものじや、先づ試に黑縮緬の羽織と黑羽二重の小袖を出して見や、小糸、天に指をさしてバンといへば忽ち出る吉、是は妙じや、おとへ博多織の帶と印籠、巾着と出してくりや、小糸、また天を指さしてバンと云へば忽ち出る、吉、扨々結構な指じや、なんと、其指切つてたもらんかと云へば、小糸、指切つて呉れとは、やつぱり疑ひ深い　文化九年版(勝の宿替)　桂文治作　淺山蘆國畫

●盲目と車

座頭、さつさと歩き、車にばつたりと突當る「途方もない、ちと氣を附けろ」と探つて見て「人ならこう云ふのさ　天明頃版(新板咄本)

●おあしを入る物

オヤ〳〵縞の財布だと思つたら、草鞋であつた、しかし財布と思つたも無理はねへ、やつぱりおあしを入る物だ　文化六年版(新作落咄)



●評判の鮓屋

麓太夫が、千本櫻の三つ目を四條の戲場で語りしが、得手場かして大評判、ある職人が友達の方へ行き、どふじや八兵衛、鮓屋がえらひ評判じやによつて、行ふと思ふが付合ぬかい　八「オ、よふ誘ふて呉れた、己も往たいけれど、たつた今晝飯を食た　享和二年版(新撰勸進話)



●幽靈株と化物株

殊の外悋氣深き女死て、冥土より娑婆の便を聞たふ思ひける所、隣の七兵衛といふ者死て來りければ、彼おさん大きに悦び、先夫の事を尋ければ七兵衛「イヤモウこなたが死で一七日立つや立ぬ内、何處の女郎やら連て戻り、大抵仲のよい事じやないといへばおさん「いよ〳〵悋氣つのり、それなら幽靈になつて行ましよ七兵衛「イヤ幽靈は株がのふては出られぬよつて閻魔樣へ願はんせ、わしが連ていてやらうと云へば、おさん悦び閻魔王の前へ出、幽靈を願ひければ、大王つく〴〵とおさんが顏を御覽じて、その願ひ叶はぬ程にそふ心得よ、凡そ幽靈といふものは色白く美しう脊もすうはりと高いものじや、それにおのれが面を見よ、色黑く目は猿眼なり、脊は低し、それが幽靈にならるゝかと宣ひければ、七兵衛おさんが袖を引き、コレおさんどの化物株と云はんせ　安永五年版(立春噺大集)

●不潔の個所

隣家へ剃刀を借りに行く亭主「やすい事だが、また汚い所を剃るのではないか「これは迷惑そんな爰で髯ばかりそろうと、髯をそり、下腮ばかり殘して歸るゆへ亭主「何故腮の下をば殘さしやつたと云へば「こゝへは褌をはさむ故、遠慮申しました　安永五年版(寶言葉)

●顔の紅葉

若い衆が集りて、近所の後家や娘の評論に、かしこの内儀は美しいといへば、イヤそれよりは向ひの娘に文を付たが、あの娘はやさしい、其文を取るでもなく、又取らんでもなく顔を赤めてオホヽと云て居た、餘程やさしひ所があつてぐつと惚れ氣がますと、褒むれば



速見春曉畫

惣座も共々に褒めるのを下女が聞て居たるが其あとで小間物屋が來り、節季前の事なれば申し女中さんと書出しを差出せば、下女は最前の話はこゝぞと手にも取らず、顔を赤めてオホヽ、小間物屋「イヤ今日でなくてもよろしうござります　享和二年版（新撰勸進話）

●美しい女房

四五人寄合、隣の女房は顔は美しいが風が悪ひ、向ふの内儀は風も顔も好が尻が大きい、とかくいゝのが無ものじやといへば、いや女房は悪いのがいゝ、美しいのを持つと若死をするものじやと云へば、ある男、顔をしかめ素湯を呉りやれといふ「どうぞしたか「なんだか氣分がわるくなつた　天明頃黄表紙咄本

●乞食の安樂

大三十日の夜、非人親子橋の下に貰ひ物を貯へしまい、酒を親子飲で咄しゐけるが、橋の上を懸取りの通るを見て、アレ親父どの見やしやれ、旦那衆も大抵ではない、物を賣ては懸取に行かしやれんならず、最早おつ付夜が明るに、又われをしまはしやつたら禮に出さつしやらにや成るまい、われを見てはこちは樂な事じや、懸取る事はなし、禮に行こかとも思はずといへば、親父聞いて、其樂はだれがさすぞ　安永五年版（立春噺大集）

●頭の大きな人

大いなる頭の人、頭に櫻の木が生へて、花の頃は見物わまたわりてやかましき故、黒鍬を頼みて堀おこしければ、そのあとが淵になりて魚集りければ、夏の頃は遊山船など來て騒がしくて大に困り、せんかたなさに其淵へ身を投た　弘化四年版（噺の種）竹原春泉齋畫



大阪新町廓内

動作落語

大阪にて一ワカと云ひ東京にて茶番といふもの、これ短滑稽劇にして、又動作的落語といふべきもの



寺澤昌次畫　天明初年版　風流四季の友